

転生したけど、手に入りすぎ  
れたスキルが自由すぎ  
て困ってます

低蓮

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ヴェルドラ  
暴風竜の消滅。それによる世界への衝撃。

そんなもの知らぬとばかりに、転生者二人は今日も気ままに日々を過ごす。

本来交差することの無かった二人の物語。幸か不幸か交わったそれは、誰も予想の出来なかった方向へと転がり出す。

※このストーリーや設定はコミック、単行本を基準としていますので、web版とは違う展開がある可能性があります。ご注意ください。

また、感想をいただけると作者が狂喜乱舞します。執筆も捗る（かもしれない）ので、お時間ありましたら一言二言投下していただくと嬉しいですよ。

9 / 2 勘違い要素が薄いのでタグを削除しました

# 目次

## 地位向上&森の騒乱編

異世界転生	1
未知との遭遇	25
いざドワルゴンへ	49
すれ違う聖魔	73
新たな仲間	99
少女の思い	127
奇妙な少女	159
V S 豚頭騎士団	178
突撃、隣の戦場模様	197
僕と遊ぼうよ	214
二つの戦い 1	237

二つの戦い 2	266
そして決着へ	293
願いは紡がれ	317
幕間の物語	
一悶着	344
厄介なもの	372

## 地位向上&森の騒乱編

### 異世界転生

世界とは残酷である。

等しくすべてが不平等であり、理不尽にまみれ、死という恐怖が跋扈している。

それに打ち勝つことが出来るものなど僅かもおらず、故に人は僅かでも自分に有利に事を運ぼうと争う。

時とは無慈悲である。

冷酷に無遠慮に、全てのものを「過去」という次元の彼方に流し去る。

時に抗い得る者もまた幾程も居らず、人はやがて過去を忘れていく。

しかして、それ故に人の生は面白い。

理不尽が無ければ奇跡など起きず、死という恐怖があつて初めて生という喜びを得られる。

傷付こうともそれはやがて癒え、人はまた前を向くことが出来るだろう。

生きることを諦めるなかれ。

人の生を謳歌せよ。

諦めなければ、意志を持って対峙すれば。

自ずと、道は開かれるのだから——



とある病院の一室にて、表情の抜け落ちた硬い顔をした少女がベッドに横たわっていた。

歳は十五を数える程度か、その顔には未だ少しばかりの幼さが残っている。

周囲には誰も居らず、少し開いた窓から吹き込む風が、只いたずらにナースコールを揺らしていた。

少女——ひぐらし 未空みくは、不幸と呼ぶにふさわしい生涯を辿っていた。

彼女の母親は病弱であった。それこそ、子を産めば命が危ないと言われるほどに。

しかし、子供を生むのは夢だったのだと譲らず、遂に身ごもるまでに至った。

出産の日、それに立ち会ったのは病院側の人間だけだった。

父親は彼女が身籠ったと知った途端蒸発し、最後まで反発していた親戚達は立会を拒んだ。

念願の子を成した彼女は、しかしそこで力尽き果てたのか我が子を見ることなく息を引き取ってしまう。

更に、母体の健康状態が悪かったせいも、生まれてきた子供はいくつかの障害を抱えていた。

一つは、隻脚。生まれつき片足が欠損しており、車いすや義足などを用いないかぎり移動すら困難になるものだ。

そして、もう一つが重度の免疫不全症。あらゆる病に対する抵抗力が損なわれ、いつでももおかしくない状態にまで悪化すると手がつけれなくなる。

そのため迅速な手術が求められるのだが、生まれたばかりの子に手術に耐えられるだけの体力があるのかどうか、そこが問題だった。

幸いにもドナーと腕の立つ医師に恵まれ、更には手術も奇跡的に耐えぬいた子は一命

を取り留めることに成功した。

だが、母親方の親戚たちは子を引き取ることを拒否し、当然父親の行先など知る由もない病院側は、仕方なくその子を孤児院へと預けた。

幾年もが過ぎ、少女は孤児院で10の誕生日を迎えた。その頃には身体も成長し、車いすを使えばある程度なら地方で移動することも可能としていた。

少女が預けられた孤児院は、所属する子供の誕生日には盛大に祝うのが習わしだった。けれどもその日、孤児院からは楽しげな声一つ漏れてこない。

なぜなら、少女はこの孤児院において「いないもの」として扱われていたからだ。

元々、少女を引き取った際の孤児院の院長は人の良さそうな老婆だった。

幼いころに受けた手術の反動からか、感情を表面に出せないでいる少女の、たった一人の良き理解者でもあった。

「未空ちゃん、貴女は無愛想なんかじゃないわ。あなたの心の中は、何よりもその瞳が雄弁に語っているもの……」

そう朗らかに笑って少女の頭を撫でた老婆。



そして、毎回のようにとある言葉を繰り返した。

——世界とは残酷である

——時とは無慈悲である

——しかして、それ故に

「人の生は、面白いんだよ」

それは、どこかの小説から引つ張つてきたものか、あるいは少女を元気づけるために老婆が考えたものか。

どちらにせよ、その言葉は少女のココロを数年来支えてきた。

老婆が寿命により孤児院を去った後、新たに院長となったものはお世辞にも子供が好きだとは言いがたかった。

傍見無愛想である少女のことを可愛げのない奴だと決めつけ、孤児院での少女に対する嫌がらせは更におおつぴらとなった。

そして、少女の容体が悪化したと見るや、これ幸いと病院へと押し込んだのだった。

——これで、終わりかな……

無愛想に見えて、その実人一倍感情が豊富だった彼女は、自分の死期を正確に悟った。もう、長くはない。今にも、ドアを開けて死神が顔を出しそうな予感。

——嫌なこともあったけど……でも、それだけじゃなかった。生まれてきてよかったって、思えることもちやんとあったよ……

苦しみを受け入れ、その上で乗り越える。誰に倣うでもなく、少女自身が成し遂げた偉業。不安に潰されず、恐怖に屈せず、15年の長きに渡り保たれ続けたその声は、意志は——

——死ぬのは怖くない……だけど、只の一人も友達が出来なかったのは、ちよつと寂しいかな……

『——確認しました。エクストラスキル「ともだち姿無き声」を獲得』

届くはずのない場所へと、少女を誘った。

——来世って有るのかな……？ あるんだったら、少しくらい私の思い通りにことが運ぶように祈っても、罰は当たらないよね……

『確認しました。ユニークスキル「脚本家」ツムギンモノを獲得』

——いっそ、世界の神様に……なんて、ね

『確認しました。ユニークスキル「神格化」しんかくかを獲得。「脚本家」ツムギダスモノと統合。「神格化」しんかくかと「脚本家」ツムギダスモノを失い、新たに「創造神」ヌリカエルモノを獲得』

——……えっと、なんか変な声が聞こえるような。そ、創造神？ また大層な名前だね……うん、まあどうせ私の悲しい妄想なんだろうけど。っていうか、死ぬ間際に何やってるんだろ私……

『確認しました。エクストラスキル「姿無き声」ともだちを進化させます……成功しました。エク

ストラスキル「姿無ともき声」は「妄想しんゆう」へと進化しました』

——いやいやいや?! それ退化! 退化って言うか悪化だから! 進化してないから!

思わずツツコミを入れた少女は、次の瞬間には自嘲気味に笑った。

——はあ、これから死ぬって言うのに、私も強かだなあ……あはは、全く……

薄れていく意識、闇に埋もれていく自我。それをはつきりと感じ取りながらも、少女は最後の最後まで笑っていた。

——死ぬのって、思ってたよりも……怖く、な……

死ぬ間際の不思議な体験。それは少女の妄想か否か。何れにせよ、これから起こる現象の前兆であったことは疑いようもないことだった。

『確認しました。ユニークスキル「ふとましい者」ノリコエシモノを獲得』

——まだ言うか



暗い、ひたすら暗い闇の中。ある意味何もない空間において、私の意識は覚醒した。  
つて……？ 私、死んだん……だよ、ね？ えっと、そしたら此処は死後の世界……？

当然、答えなんて期待してないし、返ってくるとも思ってた只の胸の内のつぶやき。けど——

《うーん、まあ一回死んでるし、死後の世界って認識でも間違いないかな？》

——ふあ?!

返事、返ってきました。

《——と言うわけで、紆余曲折の末に君は異世界に転生したってわけだよ》

紆余曲折って？

《紆余曲折は紆余曲折だよ。あんまり細かいこと気にしてたら、肥るよ？》

え、肥るの?!

現在、私は現状についての説明を受けている。

どうも私は、所謂異世界転生なるものをしたらしく、一度元居た世界で死んだ後に、この世界に移ってきたらしい。

で、今私に説明をしてきているのが、死ぬ間際に聞こえた声が何たらスキルとして説明してくれた「妄想しんゆう」らしい。本人がそう言っていたから間違いないんだろうけど。

なんだか、擬似人格がどうのこうのと難しそうな話を長々と始めそうだったので、あわてて遮ったのは秘密だ。

兎に角、自分の現状はだいたい解ってきた。で、そろそろ話を進めよう。

結局この暗い場所は何処なの？ 異世界って、まさか闇に閉ざされた世界とか？

《うん？ 真っ暗？》

うん、真っ暗。

《うーん？ ええ、とお……》

……？

《……》

『エクストラスキル「魔力感知」を獲得しました』

突如死ぬ間際に聞いた無機質な声が頭のなかに響くと同時に、闇に閉ざされていた周囲に光が宿る。周囲は岩に囲まれてるから、洞窟かどこかなのだろう。

いや、そんな事よりも……

えっと、これは一体どういう……？

《あー、うんと。どうやら身体にまだ馴染めてないみたいだったから、スキルを使って少し補助してるんだ》

ふーん……？ 分かったような、わからないような……

それに、魔力感知って何？

《元いた世界には魔力がなかったんだっけ。まあ、端的に言えばこの世界に充満する――》

え、この世界って魔力があるの?! ……って言うことは、魔法とかも……？



《ああ、うん。あるよ。》

周囲を見渡していたら、ふと違和感を抱いて小首を傾る。

なんだろう、と考えていたら、自分の視線が妙に低くいことに気が付いた。

ねえ、視線の位置が低い気がするんだけど、もしかして……

《君は「転生」してるからね。当然、体も新しいものになってるよ？　なんと、ぴつちぴちの十代前半！　……を通りこして、一桁台！》

おお、若返ってる……まあ、五体満足な時点で私の体じゃないことは確信していたし、なんかもう納得いっちゃうなあ。

それに、これで自由に動きまわったりいろんなことが出来ると思うと、今からワクワクがとまらないし。

「妄想」に聞きたいことは大体聞いたし、そろそろこの場所から移動してみよう。

前世ではまともに歩いたことすらなかったから直立するって感覚に少し戸惑ったけど、慣れてしまえば元からこの体で過ごしてきたみたいに馴染んでいる。

一歩一歩感覚を楽しむように足を踏み出してみれば、足の裏から心地の良い振動が返ってきて気分が高揚する。試しに足を動かすスピードを速くしてみれば、何の違和感もなく身体は思い通りに動き、その動きを加速させる。

うん、これあれだね。すっごい楽しい！

ただ単に体を動かすだけでもこんなに楽しいんだから、前世でやれなかったことを片っ端から試してみたいな！

《あ、ちよつとそつちは……》

とりあえず気の済むまで走ろう！ そう思い立って、スピードを緩めずに走り続けてただけど……私は忘れていた。ここが「異世界」だってことを。



ろくに確認もせずに曲がった曲がり角。前世だったら人にぶつかってたかもしれないけど、この世界ではもつと恐ろしいものにぶつかるみたいです。

「シャーッ！」

《おー、ありや毒霧だね。当たったら溶けるよ》

「呑気なこと言っていないで逃走補助！ 逃走補助して！」

勘で右に避けた瞬間、今まで私<sup>が</sup>たっていた地面が溶けた。

それを見て、呑気なこと抜かしている「妄想」<sup>しんゆう</sup>に思わず怒鳴る。

「妄想」との会話は念話でも発声でも出来ると解ったんだけど、今はそんな事を気にしている場合じゃない。

折角色々やってみたくいことが出来たというのに、こんな所で溶かされてたまるもんですか。

「妄想<sup>しんゆう</sup>」！ 次どつち曲がればいい?!

《右でいいんじゃない?》

んな適当な。だけど文句を言う暇も考える暇もないので、言われたとおり右に曲がる。もうかれこれ十分は全力で逃げてるというのに、追っかけてくる怪物<sup>モンスター</sup>——

テンベストサーベント  
《嵐 蛇だね》

—— 嵐 テンベストサーベント 蛇は存外にしつこく、未だに振り切れないのだ。

ちよつと、あれどうにかならない?! このままじゃいづれ体力つきちやうよ!

《いや、それはないと……というか、戦えばいいんじゃない?》

いやいや、無手の私に何を言うかな! それに、戦うって言ったってそもそもどうやって……

《無いなら造ればいいんだよ。ほら、君にはユニークスキルがあるじゃないか》

ユニーク……？　つて、あの創造神スリカエルモつてやつ？

ごめん、使い方全然わかんない。

《仕方がないなあ……なんか好きな形状の武器を思い浮かべれば、PON☆て出てくるよ、多分》

ちよ、多分なの?!

そこは言い切つて欲しかったんだけど……でも、そこにつつこんでいる余裕はない。「妄想しんゆう」を信じて武器を想像する。

ええとええと、あの蛇を殺せる武器……つて、あれもう蛇つていうかドラゴンだよね？

うわあ、一気に倒せる自信がなくなつた！

などと思いつつも、しっかりと武器のイメージは固めておく。

思い浮かべるのはドラゴンを殺したという因果を持った武器。

流石に言い伝え通りの強さなど望むべくもないだろうから、何処まで意味があるかは解らないけどね。まあ、ゲン担ぎゲン担ぎ！

よし、竜殺しの武器っていつたらこれしか思い浮かばなかった！

「――アスカロンの剣！」

私の手に光が集まり、光度を増していく。

眩いばかりの光が散って、姿を現したのは一振りの直剣。嘗て聖ジョージが使用したとされる、竜殺しで有名なものだ。その伝説上の武器が、今私の手の内に収まっている。

……細身の刀身のみる限りだととてもドラゴンを殺せるようには見えなんだけど、大丈夫かなこれ？

《まあ……うん、大丈夫だと思うよ？》

「しんゆう妄想」のお墨付きを貰ったから、たぶん大丈夫だろう。今一信用できない雰囲気があ

るけど、今それを言っても始まらないし。

足を止めて向き直ると、こちらに向けて真つ直ぐ突進してくるテンバストサーベント 嵐 蛇と目があつた。

正直その体躯と射抜いてくる眼をみると体がすくみそうになるけど、どうにかそれを押さえ込んで対峙する。よし、この剣でもって攻撃すれば……すれ、ば……

「あれ？ 私剣なんて振ったことないんだけど？」

《ええ？ あー、そういえば……》

直前になって重要なことに気が付きました。

どうやって攻撃すればいいか解りません。なにこれ終わった。

もう目前にまで迫ってきているテンバストサーベント 嵐 蛇に半ば混乱していると、「妄想しんゆう」がやれやれと言った感じに口を出してくる。

《仕方がないにやあ。代わりにやってあげるから、ちよつとお寝んねしましょうねー》

へ？ え、ちよ……

なんかとんでもないこと言われたような気がする。

慌ててどういう意味かを聞こうとした瞬間、私の周囲が闇に覆われ、意識にまで黒い靄がかかる。

そして、何がなんだか解らないままに、私の意識は闇へと落ちていった。



ズバンツと言う音とともにテンベストサーベント嵐の巨軀が吹き飛び、奥に見える大きな鉄の扉へと派手な音を立てて着弾する。

ずり落ちる身体はピクリとも動かない。

それも当然だろう。その巨軀には大きな風穴がぽっかりと空いており、一目でそれが致命傷だというのが解った。

カツン、という足音が響く。その音の主は、今し方テンベストサーベント嵐テンベストサーベント蛇を吹き飛ばした張本人。金色の髪を流すその幼さを残す少女は、ちらりと嵐の死体をみると、ため息を



吐きながら手元の剣へと視線を向けた。

『いやいや、オーバーキルにも程があるよ。武器だけでも少なく見積もって伝説級武器並みの力あるよって言うのに……』

まさかそんなものが出てくるとは思っておらず、「妄想」はこれを為した少女に対し呆れとも感嘆ともつかないため息を吐いた。

今その少女の意識は、眠りに落ちてしまっているが。

それに、と「妄想」は先ほど手に入れた魔法を思い出した。

「神話召異」。神話の武器、防具や神、人。果てはそのシーンすらも再現できるといふづつ壊れ性能。

といっても、明確に思い描かなければそのままの力を再現できないために、劣化版だと思いついてる少女には使いこなすことはできないだろうけど。

まあ、別に知らせなくても良いか、と「妄想」は面倒になったのか説明を端折る決意を決める。

なんともスキルの癖に自由な奴なのだがそのスキルの保有者の意識は現在闇の中のため、問題はない。

『……で、これどうしよう』

問題はそう、目の前の死体と鉄の扉だ。

いや、死体だけなら魔素に分解すればいい話だから問題はない。そもそも洞窟に魔物の死体が転がっていようと気にするものなどいない。

だが、その死体にぶつかられ歪んでしまった鉄の扉が問題なのだ。

「妄想」<sup>しんゆう</sup>は、この扉の奥に大きな力を感じていた。そして、この扉がその力の主を封印している所へと続く道を閉ざしているということにも考えが及んでいた。

『流石に、直さないとまずいかなあ……』

封印に直接影響したりはしないだろうけど、流石にこのままにしておくのは忍びない。

そう考え、鉄の扉に手をかざす。それだけ、たったそれだけの動作で歪んだ鉄の扉は元の姿を取り戻した。……いや、それでは語弊がある。

正確には、おどろおどろしい感じに改造されたのであるが、「妄想」<sup>しんゆう</sup>はその出来映えを

見て満足げにうなずくと、その扉に背を向けて悠々と歩き去っていった。後に残されたのは、不気味に改造された封印の扉○のみであった。



いつもと変わらない日。朝を迎えたものは今日もそうだと信じて疑わなかった。いつものように家事をし、いつものように仕事場に出かけ、またいつものように魔物を討伐する。

そんな日常を送れると信じていた。

しかし、一部のものはその異変に気が付いていた。巨大な抑止力の消失。

それに伴う魔物の活発化。非日常の足音が遠くから近付いているのを感じ取れたものは、今はまだごく少数。

しかし、時がたちその足音を感じ取るものが増えるにつれて、その影響は小波のように広がっていく。

その元凶、リムル・テンペストと呼ばれる後の魔王となる、スライムに転生した異世

界人は未だその事を知らない。

そしてもう一人。

後に聖王エンゼルと呼ばれる、魔王とは完全に対をなす存在となる同じ異世界よりの転生者である少女にも、この後に巻き込まれることとなる様々なやつかい事を知る由もなかった。

魔王デビルと聖王エンゼル。奇しくもほぼ同時期にこの世界に生を受けた二人が出会うのは、まだまだ先のことになる。

あとがきに転生する？

✓ Yes

No

## 未知との遭遇

前回、あわや嵐テンバーストサーペント 蛇に殺され掛けたことで、この世界がやっぱり恐ろしい所であると確認した私は、絶賛引きこもりの構えを取っています。

《あのさ……だから大丈夫だって。あの魔物もそれなりに強い部類だったけど、問題なく倒せたでしょ?》

妄想しんゆうが呆れたようにその声を掛けてくるけど、命がかかっているだけに私が早々容易く意見を変えるはずもない。

倒せたって言っても、そのときの記憶はないんだけど?

《一時的にこつちで強制制御オーバerrライドしたら、意識が沈んじやったみたいなんだよねー。だから、記憶がないのも無理はないよ。あはは》

笑い事じゃないからね?! 突然身体が自分の意志で動かせなくなるわ、意識が薄れていくわ、びつくりしたんだから!

《ごめんごめん……でもさ、実際問題魔物は嵐テンペストサーペント、蛇だけじゃないし、嵐テンペストサーペント、蛇だつて一匹じゃないんだよ? 外にでたがらないのは勝手だけど、むしろこのままこの洞窟に居る方が危険なんじゃない?》

むぐ……た、確かに……

《それに、折角力を手にして生まれ直せたんだからさ、色々と自分の力で何とかしてみたら?》

うーん……確かに、前世とは比べものにならないくらい色々出来るわけだし……あれ? でも妄想しんやうつて私のスキルなんだから、イコール私の力なんじゃない?

《君が、途中の記憶はないのに結果だけが用意されてる世界が楽しいって感じるなら、それでも良いけど?》

自分でやらせていただきますはい。

あっさりと自分のスキルに論破された私は、外にでるべく魔物に出くわさないように慎重になって周囲を伺う。

右よーし。左よーし。正面に敵影なーし……今！

ぐっと足に力を込めて、駆け出す姿勢になり――

『エクストラスキル「気配遮断」を獲得しました』

突然響いてきた声に驚いて盛大にずっこけました。タイミング悪すぎないかなあ、もう！



そんなわけで手に入れたスキルだけど、これが中々どうして使い勝手の良いものだった。妄想しんゆうが解説してくれたところによると、何でも体から出ている魔素とやらを完全に抑え込んだ上で、私の出す音に何らかのフィルターを掛けてどうちやらこうちやらするらしい。ざっくり言えば、「魔力感知」に引つかからず且つ影が薄い人の如く存在を気が付かれにくくなるみたい。

そういうえば、魔素ってなに？

《簡単に言えば、体からでる妖気オーラみたいなものだね。これが多ければ多いほど強いって考えられてるよ。まあ、技術アーツは魔素に因らない力だから、一概に魔素が多ければいいってわけでもないんだけどね》

ふーん？ 因みに、私の魔素ってどれくらいあるの？

《んー、かなり多い部類に入るんじゃないかな？》



そうなの？ あテンベストサーベントの嵐 蛇の方が多と思うんだけどなあ……まあいいや。

妄想しんゆうの解説を聞いているうちに、いつの間にか洞窟の出口が見えてきていた。あそこを抜ければ、遂に異世界とのご対面ということになる。果たして、一体どういいう世界なんだろう？ 気味の悪い動物が闊歩していたり、地表が岩で覆われてたりとかするのかな？

《ううん、君が居た世界とほとんど同じような環境だから、特殊な草とか魔物とかが居る以外は普通だよ？》

魔物が居る時点で普通とは呼べないと思うんだけど……まあ、下手に変な環境におけるよりは馴れている方が良いに決まっているから、その事についての不満などあろうはずもない。さあ、異世界の景色とご対面——ッ！

——普通だね。

《そう言ったよね?》

いやうん、そうは聞いたんだけどさ。比喩的表現であつてもうちよつと違いがあるものかと思つてた。

《がっかりでもした?》

ううん、そんなこと無いよ。想像と少し違つたから、ちよつとね……まあそれは置いておいて、みた限り魔物は居ないみたいなんだけど、そんなに数が居る訳じゃないの?

《んー、感知範囲にはそこそこ居るんだけど、大体は集団で行動してるみたいだね。弱い種族ほど群れる傾向にあるから、この辺りの魔物は大したこと無いみたい》

そつかあ。言葉が通じない以上、余り魔物との接触は控えた方がいいよね。となる  
と、ひとまずは人間が居るところに行かないと……

《言葉なら通じるよ?》

え?

唐突に妄想しんゆうが放った一言を理解するのに時間がかかり、暫し私の脳は回転を止める。暫くして、漸く妄想しんゆうの言った言葉の意味が理解できた私は訝しげに首をひねった。  
嵐テンペストサーベント 蛇 つて、問答無用で襲ってきたよね?

《あれは知能が低くて、野性的な性質の魔物だからね。基本群れることがないから、言語能力は発展しなかったみたい》

ふーん……それじゃ万一出会っても友好的に話を進めることもできるってこと?!

《状況にもよるけど、そういうことになるね》

成る程……だったたら、あんまり人の居るところに急ぐ必要はないかな。スキルとかこの剣の扱いとか色々やりたいこともあるし、暫くはこの……森? で修業をすることに

しよう。あ、そういうばこの劍アスカロン 抜き身のままだと持ち運びにくいんだけど、鞘ツバつて無いの？

《無いけど、創れるよ》

あ、そつか。えーつと……まあ、この劍が収まればどんな鞘ツバでもいいや。

そんな適当な感じでも、アスカロンを創った時と同様に光が私の右手に集まり、それが散った後には一本の鞘ツバが握られていた。特に何か伝説を思い浮かべたわけでもないし、あやふやなイメージでも創ってくれるとは何とも使い勝手の良いスキルだ。

よーし、せめて人並みに劍ツバが使えるって言えるようになるまで、がんばって修業だー！



洞窟からでてから三日経ち、私はそれなりに剣の扱いに慣れたと言える程度には、ずつとやり続けていた素振りも様になってきた。

たった三日程度、と思うかもしれないけどそれは違う。実は私、この三日間何も食べていなければ一睡もしていないのだ。だから、流石にずつとというわけではないけど、前世の頃の三日などよりも遙かに濃厚な期間を修業に充てることができた。

ただ、寝る必要も食べる必要もないっていうのは便利だけど、何か物足りない感じがしてならないんだよね。やっぱり、前世の影響なのかな。これからは差し迫ったものがない限り、食事も睡眠もとろうかな。

そんなことを考えながらいつものように素振りをしていると、不意に妄想しんげうから声を掛けられた。そういえば、素振りしてる間はあるまり話したりしてなかったな。

《近くに魔物が居るね。凄く弱ってる個体と、元々気配の小さい個体の二つ。周辺にはかの気配は見あたらないうよ》

弱ってるってことは、怪我をしたりして群れからはぐれたのかな。言葉が通じるなら

何とかしてあげたい気もするけど、どうしよう？

《どっちも牙狼族だから、言葉は通じると思うよ》

なら、魔物とのファーストコンタクトといこうか。

《ファーストって言っても、来て直ぐに嵐テンペストサーベントとあつてたよね？》

嵐蛇あられは意志疎通ができない上に一方的に襲ってきたからノーカウントで。いいね？

《アツハイ》

万一襲ってきてても、この数日で覚えたスキル「武器習熟」と素振りの成果で撃退！  
……出来るの良いなあ。

そんなわけで、妄想しんゆうの案内のもと気配のするという場所の近くまでやってきたわけで

すが、何でこんなに鉄臭いんだろう？ うんまあ、何となく想像付くけど。

気配の元にたどり着くと、案の定というべきか一面に広がるのは血に塗れた地面といくつかの死体だ。これのせいで周囲に鉄臭さが漂ってたんだろうね。そしてその中心には、元は灰色であったであろう毛をどす黒く染めた、一匹の狼がうずくまっていた。僅かに上下してゐるから、生きてはいる……のかな？

「えーっと、大丈夫？ 生きてる？」

なるべく距離をとって驚かせないように……と思つたんだけど、私の声が聞こえた瞬間に狼は身体をびくりと震わせ、素早く周囲の確認をし始めた。

その様子は鬼気迫るものがあつて、なんだか悪いことしちやつたな、と思いつつ狼の前に刺激しないようにゆっくりと姿を見せる。

「何者だ。何のようで、此処へ来た」

「えっと、意志疎通が出来るかどうかの確認と、なんだか大変そうだからなにか手伝つてあげられないかなつて。あ、怪しいものじゃないよ？」

「見るからに怪しいだろうが。それになんの力も持たぬような小娘が、手助けだと？  
笑わせてくれるな」

低い声で威嚇しながらそう告げる狼……狼ってなんか呼びづらいなあ。

「君の名前はなんて言うの？」

君とか狼とかじゃ格好が付かないし、名前で呼びあえれば多少は警戒も解いてくれるんじゃないかな。

そう思ったんだけど、狼は答えようとはせずじつとこっちを見つめてくる。その瞳には、警戒の色よりも困惑の色の方が多いように見える……え？　なんで？

《ああ、魔物は基本的に名前は持つてないよ。名前は上位の魔物や魔神が下位のものにつけるのが一般的なんだけど、それなりの代償もあるからあんまり固有名持ちは居ないみたいだね》



そうだったんだ……代償ってどんなものがあるの？ 寿命が縮んだり？

《ある意味ではそうかな？ 名付けをやる度に、名付け親の魔素が名前を得る魔物の強さに応じて減って、ついでに魔素の最大量が減ったりするんだ。それは力を失うことと同義だから、好き好んで名前を付けるものはいないかな》

え？ それだけ？ なんかこう、もつと重い代償でもあるかと思っただけど……そういうことなら。

「名前がないんだったら、こっちで勝手に『カイ』って呼んでも良いかな？」

その言葉に驚いたように狼<sup>カイ</sup>が眼をまん丸に見開く。さつきまでの剣呑な雰囲気から一転したそのキョトンとした顔に、思わず吹き出してしまった私を責められるものは居ないと思う。

その事に何かを思ったのか、狼<sup>カイ</sup>が口を開き掛けた瞬間、その身が光に包まれた。

……私、何もしてないよね？

《名付けは手っ取り早く力を付ける手段だから、君に名前をもらったことで『進化』が始まったんだね》

進化って……名前もらった程度で出来るものなんだ。

《君の思っている名付けと、この世界での名付けは意味が大きく違うからね。ポ○モンだってレベルがあがれば進化するでしょ？》

なんとなく理解できたけど、そもそもなんでポ○モン知ってるの?!

と妄想しんゆうに突っ込みを入れているうちに進化は完了したようで、うずくまっていた狼カイはその身を起こすと、高い位置から私を見下ろしている。立ち上がれるということは、怪我は完治したみたいだね。良かった良かった。

……正直言うともものすごく怖いからやめて欲しい。というより大きすぎない？ 軽く数mはあるように見えるんだけど。

なんて軽く怖いっていると、狼カイが先程までとは打って変わったような穏やかな声で語りかけてきた。

「先程は小娘などと無礼なことを申してしまった非礼を、どうか許していただきたい。言い訳にしかありませんが、少しばかり気が立っていたのです」

なんか性格変わってるー！ー！ーツ？！

伏せの姿勢に移行してそう言ってきた狼カイの態度が全く予想と違ったから、思わず心の中でそう叫んでしまった。

いや、でも誰も想像できないよね？ 寧ろ勝手に名前付けやがって、とか言われた方がさっきの対応的にしつくりくる……

「い、いやいや。無礼だなんてそんなこと思ってないから。そんな事より、勝手に名前決めちゃったけど平気だった？」

「勿論です。寧ろ、名を付けていただいたことでききなり星狼族スターウルフにまで進化する事が出来たので、なんとお礼をすればいいか……」

「どうやら、狼——いや、カイは私の付けた名前が気に入ってくれたようだ。元の毛が灰色っぽかったから安直にカイって名前にしたんだけど、本人が問題ないって言うならいいや。」

「こつちで勝手につけたんだから、お礼なんて気にしなくていいよ？ そんな事より、何があつたの？」

「そうですね……実は——」

カイが話してくれた内容を要約するに、どうやら彼女はゴブリンとの小競り合いで運悪く負傷し、素早く動けなくなったために群れからはぐれてしまったらしい。

更に、子連れのために迂闊に動くことが出来ないで、この場所に留まるしかなかったらしい。

「——本来ならばゴブリン程度に、万に一つも後れをとることなど有り得なかつたのですが……たつた一匹。いえ、たつた一人だけとてもゴブリンとは思えないほどの技量を持った個体が居たのです」

「そんなに強かったの？」

「ええ、彼だけは戦士として尊敬できる技量の持ち主でした。私はそんな彼に、一太刀浴びてしまったのです。代わりに、腕を一本噛み千切ってやりましたが」

さらつと怖いことを……でも、一匹だけやたらと強かったってことは。

《もしかしたら、誰かが名付けを行ったのかもしれないね。目的は不明だけど》

うーん、やっぱり。でも、名前を付けるだけで此処まで強くなるんだったら、固有名持ちがほとんど居ないことに納得がいかない。少しくらい弱くなっても、強い味方が増えるんだったら結果的に得じゃないのかな？

《名付けは名付け親の強さにも比例するから、相当力を持ってないと進化すらしないこともあるみたい。言わば、ギャンブルみたいなものだからね》

ふーん。そういうこともあるんだ。

なんて妄想しんゆうと話していたら、カイがジーツと私を見つめていることに気が付いた。  
な、なにか……？

「私の身の上話は以上です。次は、御身の話をお聞かせ願えませんか？ 御身をなんと  
お呼びすればいいのか……」

「あー、私は鯛ひぐらし 未来みく。身の上話は……うーん、なんて言えればいいか」

死んだら転生してこの世界にきました。異世界人です。とでも言えればいいかな……  
？

なんて私が悩んでいたら、カイが何か納得したような表情で一つ頷いた。

「成る程、ミク様は私など遠く考えも及ばぬような生を送ってきたのですね……」

まあ、あながち間違っていないし誤解は解かなくて良いかな……下手に転生しましたと

か言つて、何か問題があつても困るし。

「ところで、その……疑うわけではないのですが、ミク様は力をお隠しになつていて、震すか？ 全く力の波動を感じられないもので……」

困つたようにカイがそう告げてくる。

別に隠したりはしていないし、やっぱり私の力つて殆どないんじゃない？ ……あれ？ そういえばさ、「気配遮断」つて効果時間どれくらいなの？

《君がいいと思うまでは続くよ。ちなみに今は絶賛効果発揮中だね》

そのせいだねー……んじゃ、解除解除。

私からしたら特に変化は感じられなかったけど、その瞬間にカイの全身がビクリと震え、うれしそうに一つ頷くのをみる限り上手く解除できたようだ。

「これほどとは……先ほどまでの非礼、重ねて謝罪いたします。どのような処罰も——」

「——だから良いって！ ほら、怪我完治したのなら群れに戻りなよ」

そう言いつつ私は踵を返した。魔物とも意志疎通さえ出来れば良好な関係が築けることもわかったし、今度は人間の居る場所にいつてみよう。魔物との友好が築けても、人間との間に友好が築けないこともなきにしもあらずだからね。

と言うわけでね、カイ。付いてこなくていいんですよ？

「何で付いてきてるの……？？」

「今更群れに戻る気などありません。ですので、ミク様さえ良ければ同行させていただきます」

「私が拒否したら？」

「勝手に付いていきます」



拒否権無いじゃないですかーやだー!

まあ拒否する理由もないし、一人旅は正直気が進まなかったから、付いてきてくれるっていうなら喜んでお願いするけどね。

問題は、こんな巨体を連れて歩いていたら、いらぬ誤解を受けるんじゃないかってこと。

その事をカイに話してみたら、一瞬で解決したんだけどね。

「心配には及びません、ミク様。新たに得たスキル「影移動」にて、ミク様の影に潜むことが可能になりましたので」

そういうやいなや、私の影にカイは飛び込んだ。飛び込んだは良いんだけど、この後に残されたおどおどした感じの子犬っぽい生き物はなんでしょうか？

《さつき感知した気配のもう片方だね。見たまま子供の牙狼族だよ》

突然親が目の前から消えたら、そりやびつくりするよね……そういえば、この子にはまだ名前付けてないや。

私は、そつとその子狼を抱え上げると、なんて名前を付けようか考え始める。

子狼は僅かに身をよじっただけで、私に大人しく抱えられている。うーん、可愛いなあ。

よし、決めた。子供でふわふわしてるから、この子の名前は「シフ」にしよう！  
え？ どこかで聞いたことある？ 気のせいだよ、きつと。

《？》

あ、妄想しんゆうには関係ない話だから、と。

「君の名前は今日から「シフ」だよ。宜しくね」

頭を撫でながらそう語りかけると、シフは嬉しそうに一つわふつ、と鳴いた。気に入ってくれたみたいで何よりです。

なんて、呑気なことを考えていたら突然体から何かごとつそり抜け落ちる感覚とともに、凄まじい虚脱感が身体を襲った。

慌ててシフをおろして踏ん張ろうとしたけど、全く力が入らずにその場に崩れ落ちて

しまう。

え？ ちよつとなこれ、どういうこと?!

《名付けには魔素を消費するっていったと思うけど、その消費量が一定値を超えたから、暫く魔素を回復させるために全行動を一時的に凍結させたんだ》

そういうのって、事前に通告できないの……?!

《忘れてた☆》

忘れてた☆、じゃなあああああああいッ!

なに、なんなの?! 何で私スキルに嫌がらせ受けてるの?!

もう、もう………妄想しんゆうのことは信用しないからーッ!

暫くの間は、妄想しんゆうのことを信用しないようにしようと思心に決めた瞬間だった。

あとがきに転生する？

✓ Y e s

N o

## いざドワルゴンへ

名付けのせいで魔素の量が一定値を割り込んだせいで、身体に全く力が入らなくなりました。五感は生きてるみたいだけど何故かカイとの会話が出来なくなっていたから、この状態から回復するまではカイの毛がふわふわで温かいということ以外何もわからなかった。

体感で二日くらい。

その間はひたすらカイの毛に包まれているだけだったけど、漸く魔素が回復したみらいで四肢にも力が入るようになった。と言うわけで、この二日間ずっと言いたかったことをいわせていただく。

「カイ、動けない私を守ってくれていたのは有り難いけど、時折頭ペロペロ舐めるのは止めて！ 後シフ！ 顔潤けちゃうから、もうちよつと舐める頻度減らして?!」

そう、二人そろって私の事をペロペロと舐めまくってくるのだ。カイに至っては、只でさえ体が大きいのに頭を舐めるものだから、その内パクリと行かれそうで気が気では

なかった。

確か、狼が相手のことを舐めるのは目上の者に対する親愛の証だったはずだから、そのこと自体が嫌なわけではない。嫌なわけではないんだけど、体中が唾液まみれでベタするのでもう少し控えめに表現してほしいなあ……

「そうですか……わかりました、ミク様」

申し訳無さそうに尻尾と耳を垂らして返事をするカイに、私の心が痛む。

あれ？ 私別に悪いことしてないよね？

「わかりました！ ミク様！」

此方は何が嬉しいのか、尻尾をぶんぶん振って元気良く答えるシフ。と言うか君、喋れるようになったのね。

「つて、わかりましたって言いながら舐めるのは何故?!」

「ミク様に言われたとおり、舐める頻度は『なるべく』減らします!」

「減らす気無いよねそれ!」

尻尾をぶんぶん振って顔をペロペロ舐め回す。うーん、もう完全に犬だよこれ。

《種族進化してるから、犬っぽくは成らない筈なんだけど……子供だからかな?》

あれ、そういうえばシフは大きくなったりしてないけど、進化に失敗でもしたのかな?

《え? いやいや、ちゃんと進化してるよ。種族は……》

まあでも、こう言うときもあるよね。別に進化させたくて名前を付けてあげた訳じゃないし、このままの大きさなら連れ歩いて問題ないかな。

《あれ、これもしかしなくても無視されてる?》

あまり信用しないって決めたからね、「妄想」<sup>しんゆう</sup>にはちゃんと反省してもらいたいものだ。

というわけで、カイには私の影に潜ってもらい、シフは私の頭の上に乗ってもらった。頭の上に乗せる上で、絶対に頭を舐めないように言いつけたんだけど、さっきのこともあるし警戒しておこうかな。

ところでカイ、そんな羨ましそうにシフをみても、流石にカイを頭の上に乗つけるのは無理だからね？ シフはまだ子犬程度の大きさだから、何とか乗せられてるだけなんだから。

「あ、そういえばカイ。この近くに人の住む国ってある？」

「人の住む、ですか……確か、近くに自然の洞窟を改造して住まいとする国家が有りましたね。人間の国家というわけではありませんが、国王が中立政策を取っているの、色々な種族が集っているそうです。その中にはもちろん、人間も居ますよ」

もしかしてとは思っていたけど、やっぱり人間以外にも文明を築ける種族が居るらしい。エルフとかかな？



「確か、名を『武装国家ドワルゴン』と。千年にも渡って不敗を貫くドワーフ王が率いる、戦強国です」

「ドワーフ……もしかして、鍛冶で有名だったりする？」

「ええ、そのようですね。良くご存じで」

まあ、前世ではそういう扱いだったからね。と言うことは、エルフも精霊魔法とか弓術の達人だったりするんだろうか。

今はその話は置いておくとして、近くに国があるんならそこを目指してみようかな。洞窟を改造した国って言うのも気になるし！

「その国……ドワルゴンだったけ？ それって、どのくらいの距離にあるの？」

「今の私の脚でしたら、数日中につく距離ですね」

うーん、カイの出せるスピードがどれくらいなのか解らないけど、そこまで遠い距離じゃないのかな？

よし、なら道々修業しながらドワルゴンを目指すことにしよう。

「それじゃ、ドワルゴンに向かってみようか。歩いていくけど、カイはどうする？」

「ミク様がお赦し下さるのでしたら、お側に」

「私小さいから歩くの遅いし、修業しながらだからもつと遅くなると思うけど？」

「問題ありません」

ま、本人が良いって言うなら良いや。修業って言っても素振りと持っているスキルの確認程度だからそんなにかからないし、一週間程度でドワルゴンにつけるだろうからそれまで辛抱してもらおう。

それじゃ、ドワルゴンに向けて出発ー！



遡ること数日、「妄想」<sup>しんぼう</sup>によって魔改造された封印の門の前に、一匹の魔物が佇んでいた。

見た目はRPGの雑魚キャラでお馴染みのスライムそのもの。雑魚とは言え、物理攻撃耐性を持ち中々に厄介なのだが、下手に自信をつけた冒険者なら舐めて掛かるような魔物だ。

そのスライムは、ジツと門をみたまま動かない。まるで、その扉の構造に興味を示しているかのようだ。

このスライム、一体何を思っているのかというと……

——「大賢者」さんや。目の前のこれ、どう思う？

《解。『暴風竜』ヴェルドラが封印されていた箇所への侵入を防ぐための、封印の扉と推測します》

——いや、そうなんだけどき。そうじゃなくて、形状に違和感を覚えなにかね？

《解。経年劣化や損壊などが見受けられないため、極最近何者かの手が加えられた可能性があります》

——つまり、元は普通の扉だったかも知れないけど、誰かの手でこんな悪趣味に改造されたと……

思い切り困惑していた。

このスライムは一定以上の知能がある上に、何らかのスキルを手に入れている様子だった。

実はこのスライム、ミクと同様に異世界から転生してきた元日本人であり、暴風竜ヴェルドラより授けられた名をリムルという。

まだこの世界のことは慣れてはいないとは言え、目の前の明らかにおどろおどろしい造形の扉には違和感を覚えたようだった。覚えないう方がおかしいのだが。

——しかし、うーむ……この扉、どうしたものか。「水刃」で切り刻むか、いつそのこと「捕食者」で……

《告。扉から僅かな魔素の放出を確認しました。警戒して下さい》

——おつと？

自分のスキルだいきんじやに注意を促されたリムルは、慌てたように物陰に身を潜めた。滅多なものに遭遇しない限りは身の危険など無いのだが、それをいまいち理解していないのかとあるごとに慎重に成りすぎているのだ。

そんなリムルを余所に、扉が音もなく開き始める。如何に最近手が加えられているとは言え、一切の淀みなく滑らかに開いていく扉はリムルの眼からしても異様に映った。

「あ、開きやしたね……」

「開いたな……」

「開いたわねえ……」

と、扉が完全に開ききったところでそんな声とともに恐る恐るといった体で数人の人間が顔を覗かせてきた。

「えつとお、封印の扉ってこんなのだっけ？」

「少なくとも、あつしの知ってる扉は自動で開閉したりはしないでやすね……」

「つてか、こんな気味の悪い造形じゃなかっただろ……」

「なんか不安しいわよう……もう帰って、ギルドマスターに文句言つてやりたいわ」

「まあまあ姉さん。いざとなったら盾になりやすから。……カバルの旦那が」

「俺かよ?! まで、リーダーは俺だけ? 此処はギドが盾になるべきだろ」

「盗賊シーフに何を求めてるでやすか、全く……」

「重戦士ファイターなんだから、すっかり盾になってね」

「納得いかねえー?!」

——なる程、人間ね……見た感じ、冒険者かな？

《是。Bランク相当の冒険者と推測します》

——「大賢者」さん流石つす。何でも解るんだね、と……さて、今出ていつでも最悪討伐されるだろうし、此処は様子を見させてもらおう。

リムルが様子を窺い始めて幾らしないうちに、騒いでいた冒険者達が一カ所に集まったかと思うと、その身を視認しにくい状態にした。

——おー、何という夢ドリームアーツの技術……！ これは後で友達になる必要があるな。

《……告。扉が閉まりつつあります。再度開く可能性は推定不能です》

——おととつと?! 危ない危ない、と言うかこの扉自動で閉まりもするのか……

馬鹿なことを考えているうちに危うく扉を潜る機会を失いかけたリムルは、安堵しつつ気持ち切り替えた。

——取り敢えず、外目指すか。



一週間で着けると言っただけ、あれは嘘だ。

いやまあ、うん。カイの足で数日以内とかよくよく考えたら結構な距離になるよね。



だって四足歩行だし。

寧ろ道々修業しながら来たにしてはかなり早い方なんじゃないか知らん。

そんなわけで、あれから三週間ほど掛けてようやくたどり着きましたドワルゴン。山脈の麓にある門を見たときには、安堵から涙がでかかったよ。

今現在は、入国のための審査を受ける列に並んでいるところなんだ。

「ミック様、ドワルゴンへは何をなさるおつもりで？」

と、今更ながらにドワルゴンへの到着の喜びをかみしめていたら、頭の中にカイの聲が響いてきた。

今、カイは人間達を驚かせないようにと私の影に潜ってもらってる。会話で声だけが聞こえるのは、「思念伝達」の恩恵みたい。

「これって目的はないけど、強いて言うなら人間達とも友好を結べるかどうかの確認かな」

私がそう返すと、カイは成るほどと眩き「流石ミック様です」と嬉しそうにしていた。目

の前にいたら尻尾をブンブン振ってるんだらうな。

「人間とは欲深き生き物。その欲深さが将来ミク様の覇道の害となるか否か、今のうちに見極めておこうというわけですね」

何言ってるんだらうこの子。そんなつもりだったわけじゃないというか、覇道って何？

まあ、カイがそれで納得してるんなら別にいいか。わざわざ訂正するのも面倒だし、適当に頷いておこう。

「やはりそうでしたか。ご安心下さい、ミク様。後の災いと成るようでしたら、私が処分して見せましょう」

うんうん、それにしてもこの国って、本当に天然の洞窟を改造して造られてるんだね。この門もそうだけど、なんだか自然を身近に感じられる造りになってて良いなあ。

「それに、シフもミク様に名を付けていただいたことで新たな力に目覚めたようですし、

ミク様を煩わせるものにはそれなりの制裁を与えられることでしょう」

うんうん。シフ、シフかあ。そういえば、ごっそりと魔素を持っていかれた割には、見た目変化無いよね。今も私の頭の上で幸せそうに寝息立ててるし。

あれだけの思いで、喋れるようになっただけとか笑えないよ……

「シフもミク様と同じく、——の力を引き出せるようになっていきますしね」

うんうん……うん？ なんの力？

なんだろう、聞き逃しちやいけなかったような気がする。仕方がない、あんまり聞いてなかったって正直に言っつて、もう一度話を……

「次！」

と思つたら、いつの間にか私の順番が来ていてタイミングを逃してしまった。

まあ、また今度聞けばいいか。今はさっさと中に入れてもらおう。

「子供……？ 一人か？」

「ううん、この子も一緒だよ」

「魔物……それも牙狼族の子供か。どんな手を使って手懐けたかは知らんが、そいつが騒ぎを起こしたらどうなるか解ってるか？」

「うん、ちゃんと言って聞かせるから大丈夫だよ」

「言つて聞かせる、なあ……まあいい、通れ。次！」

入国審査みたいなのはそこまで厳しくないみたいで、意外とすんなり通してくれた。  
た。

本当に危ないのだけを弾いて、後は中で対処するって感じなんだろうね。流石戦強国、なるべく問題を起こさないようにしよう……

門を潜ってみると、活気のある雰囲気にも面食らってしまった。

街並みも、如何にもな感じに配管やら何やらが通っているし、所々には人集りもあるし。

覗いてみるとどうやら武器防具のお店みたいで、なんかすごそうなものがずらりと並んでいた。

って言うか、この武器なんか光ってない？

《素材に魔鋼を使ってる武器だね。魔力になじみやすい材質で、空中の魔素に反応して光って見えるんだよ》

あ、そうなんだ。って言うか「妄想」しんゆういたんだね。

《ずっと無視してたのはそっちだよね?!》

え？ ……あ、もしかして修業中に手に入れた「思念遮断」ってスキルの効果を無意識に使って、声が聞こえていなかった可能性が。

《えっ》

ま、まあ過ぎたことは水に流そ？ そんなことより、魔鋼つてなに？

《な、なんか納得いかないけど……魔鋼は、さつきも言ったとおり魔力に馴染みやすい性質を持った金属だね。長期間自然の魔素に当てられた鉱石が一定の確率で魔鋼石になつて、それを冶金すれば魔鋼の出来上がり》

ふーん、それつてごろごろあるの？

《それなりに珍しいよ。だから、魔鋼を使った武器や防具は高いんだ。まあ、加工が難しいつて言うのもあるけど》

つまり、これを造つてる人つて凄いなだね。あ、この工房みたいな所で造つてるのかな？

偶々目に入った建物を覗いてみたけど、視線の先には無人の工房が。使われてないと

いう訳じやなさそうだったけど、職人の人はどこにいるんだろう？

「あれ？　これって……」

何の気なしに工房の中を見回していたら、無造作に置かれている武器の一振りが目に入った。

薄く発光しているそれは、「妄想」に教えて貰った魔鋼しんゆうを使った武器に間違いないのだろう。

ということとはつまり、この工房を使っている職人さんが凄腕の業師ということだね。うん、一目会ってみたいなあ。

なんて、目の前の武器に感心していた私は、背後から近寄ってくる気配に気が付かなかった！

「おい、お前。そこでなにをしている？」

別に殴られも薬を飲まされもしなかった私は、普通に声をかけられ普通に肩に手を置かれた。

え、なにをってそりゃ——

「——べ、別に盗もうとしていたわけじゃないですよ?」

「ほう、そうか。俺はてつきり許可を得て見ているものだと思っていたんだが」

墓穴掘ったああああ?!

機先を制して盗みを否定するつもりが、これじゃ盗みの現場を見られて焦ってるようにしか見えないよ?! だって凄い視線痛いし!

ま、まだあわてる時間じゃないぞ私! 此処から挽回するんだ!

「そ、そういえば、この武器って魔鋼を芯に使ってるんですね」

「……」

「いやあ、こんなに良い武器を造れるなんて、此処の職人さんは腕がいいんですね」

「……」



「それにしても、こんなに良いものを無造作に床においておくなんて、盗んで下さいって  
言ってるようなものですよね。不用心だなあ、あはは」

言葉を発することに追いつめられていく気がするのは何故?! もうこの人の私を見る  
目が、完全に犯罪者を見るそれなんだけど!

《そりゃ、あんな言い回ししてたら疑わしくも思うでしょ》

ですよね私もそうじゃないかと思ってた!

「おい」

「はいー!」

「続きは牢の中で聞いてやる」

誰か助けて?!



リムルがヴェルドラとあつてから一月そこそこ。その間、スキルの修業やらゴブリンとの遭遇やら牙狼族の群れを支配下に入れるやら、様々なことを経験してきた。

特に、考えなしに名付けを行つて低位活動状態スリープモードになった時は、ちゃんと注意が欲しかったと心の底から思ったものである。いや、あつたけど。

そんなわけで、リムルはゴブリン達の住まいを改善させるべく修繕指示を出したのだが、できあがったのを見てみればそれは今までのと何ら変わらないボロボロの小屋だった。聞いてみれば建築の知識がないのだという。

「そういえば、今まで何度か取り引きしたことのあるものの中に、手先の器用なもの達がありました。そのもの達なら、家の作り方を存じておるやも知れませんか」

村長リグルドのすすめに従って、リムルはドワーフの王国ドワルゴンへと向かった。移動は牙狼族の背に乗って行ったために、僅か三日で目的地であるドワルゴンへと到着した。

「ここにドワーフが居るわけか……会うのが楽しみだな」

密かにそんなことを思いつつ、リムルは入国検査を受ける列へ並ぶべく案内のゴブタを連れて門の方へと進み出した。

不思議と引き寄せられる二人。互いに気が付かなくとも、実はすれ違おうように二人の道は入り組んでいる。

二人の道が交差する時がくるのは、案外近くなのかも知れない。

あとがきに転生する？

✓ Yes



## すれ違う聖魔

目の前には厚い体皮に覆われたアーマーサウルスと、その足下をちよこまかと動き回るシフ。

アーマーサウルスの鋭い爪を有した腕が振り下ろされる度、シフがすんでのところ身をかわす。

目標を失った攻撃は、勢いそのままに地面を抉っていく。

ぱつと見、シフが一方的に追いつめられているように見えるけど、それは違う。だつて――

「あはは、遅い遅い！ そんなんじや攻撃なんて当たらないよ！」

――めつちや尻尾振つてるし、めつちや楽しそうだし。

完全に遊ばれているのはアーマーサウルスの方で、さつきからこの周辺にはシフの歓声と破碎音しか響いてない。

その光景をぼーっと眺めながら、ふと私は思った。

……どうしてこうなったんだっけ？



遡ること四半日。

「で、言い訳の続きを聞こうじゃないか」

この人は王国警備隊隊長のカイドウさん。さっき私のことを牢にぶち込んでくれた張本人だ。

「えっと、本当に盗むつもりは無かったですって……」

「じゃ、あそこでなにしてたんだ」

「魔鋼を使った武器作ってる人って、どんな感じの人なのかなって」

「工房に無断で入った理由は？」

「そこに関しては申し開きもごさいません申し訳ありませんでした！」

土下座する勢いで謝ったら、ふとカイドウさんが纏っていた剣呑な雰囲気霧散して、苦笑をこぼす気配がした。

えっと、これは……？

「ようやく謝罪がでたか」

「え？」

「なに惚けた顔してたんだ、まさか本当に窃盗罪で捕まったと思ったのか？」

え、違うの？ てつきりそのせいで捕まったのかと……

私がカイドウさんの言葉に戸惑っていると、それを見抜いたのか顔に呆れの色を浮かべながらカイドウさんはため息を吐いた。

「幾ら何でも、あんなことで捕まえたりはしないぞ。大体、おまえが本当に盗むつもりが無かったことは分かっていたしな」

「えっと、だったら何で私牢に入れられたんでしょう……？」

「無断で工房の中に入ったのは事実だったろう。素直にそれを謝ればいいものを、ぐだぐだと御託並べやがって……」

やばい！ またカイドウさんに剣呑さが！

「本当に申し訳ありませんでした！」



「はあ、わかったよ。ほら」

ガチャリ、と音がして牢の扉が開けられる。いやあ、最初入れられたときはどうなることかと……

「迷惑掛けちゃつて、ごめんなさい」

「別に良いさ。ガキの世話を焼くのは嫌いじゃないしな」

「えっと……ロリコン？」

「そういう意味じゃねえよ、もう一度牢にぶち込まれたいか？」

「牢の外の空気はおいしいなああ！」

三十六計逃げるに如かず。全力で話題を逸らさねば！

「そ、そういうえばカイドウさんは隊長なんですよ。どうしてあの場所に……？」

「あん？ ああ、それは兄貴にちよつと用があつたからだ。あそこの職人つてのは、俺の兄貴だからな」

「もしかして、兄弟そろつて有名人……？」

「兄貴の方が圧倒的に知名度高いがな。ドワルゴンのカイジンと言えば、国外にも名前が知られているほどだしな」

「へえ……」

「なんだかすごい人と出会つちやつたなあ。あ、だったら伝手であわせてもらえないものかな？ それをカイドウさんに伝えたら、若干申し訳無さそうに首を横に振つた。」

「いや、すまんが俺にも兄貴が今なにしてるかは分からん。ただ、最近素材がどうのとぼやいていたから、もしかしたら鉱山地区にいるかも知れん」

「いえ、情報をいただけただけでも有り難いです。早速行ってみますね！」

カイドウさんにお礼を言って、教えて貰った鉱山地区へと足を向けた。ちゃんと会えるの良いなあ。



「で、言い訳を……って、これ二回目だな。つたく、次から次へと問題ごとが舞い込んでくるな……」

「へ？」

「ああいや、何でもない。で、一体なにやったんだ？」

「そうそう、聞いて下さいよ！ 俺たち悪くないですから！」

そこからリムルが話したのは、概ね正当防衛と言える程度のことだった。

馬鹿なことをしたもんだ、とカイドウがリムルに絡んだ人間の冒険者達に哀れみを抱いているところに、ドアを勢いよく開け放ちながら一人の王国警備隊員が駆け込んだ。

「おい、もうちよつと静かに……」

「それどころじゃない！ 隊長、鉱山ででかい事故が起きた！ そのせいで、魔鋼石採集の為に奥まで潜っていた鉱山夫が酷い怪我を……」

「な、ガルム達が?! くそつ、なんて曰だ！」

「ありつたけの回復薬集めてるが、戦争の準備だから品薄だ。このままじゃ……」

「くそ、あいつ等は兄弟も同然なんだぞ！ そう簡単にくたばらせてたまるか！」

大急ぎで出て行こうとするカイドウに、いつの間にか牢を抜け出していたリムルが声をかける。

「そう慌てなさんな、旦那。どうせ急いだところで品薄じゃどうしようもないでしょう？　これ、必要なんじゃないですかね」

そう言いつつリムルが指し示した先には、先程までリムルが押し込められていた樽一杯に注がれている液体。

「これは……?」

「飲んでよし！　掛けてよし！　の回復薬ですよ」

「……魔物の提示するものをつかえと?」

「どつちにしろ、旦那の兄弟分が危ないんでしょ？　試してみるのも一考だと思っんで

すがね」

「……」

リムルの言葉に何事か考え始めるカイジンに、駆けつけてきた警備隊員が慌て始める。

魔物のことなんて、といい募る彼を一喝で黙らせると、リムルにじろりと視線を向けた。

「なにが目的だ？」

「いやだな、人が人助けをするのがそんなに珍しいことですか？」

「おまえが魔物だから珍しいんだろ……まあいい、絶対に逃げるなよ」

「た、隊長?!」

「ぼさつとすんなさつさと行くぞ！」

さつさと行ってしまうカイドウを、隊員が樽を抱えて慌てて追いかける。鉦山へと足早に向かうカイドウは、ふと今朝にあった少女を思い出した。彼女も鉦山へ行くと言っていたが……まさかな？

「そういえば、大きな事故ってなにがあつた？ 落盤でもしたのか？」

「あれ、言っでなかつたか？ アーマーサウルスがでたらしいぞ」

「は？」

「アーマーサウルス？ ……あれって、確かBランクに届くか届かないかくらいだよな？」

「馬鹿やろう、それを早く言えよ?! 街に出てくる前に倒さんと……」

「……あと、それなんだが。大丈夫というか、大丈夫じゃないって言うか……」

「……？」

歯切れの悪い返答に、カイドウは一抹の不安を覚える。いやいや、まさかそんな……

「……どういうことだ？」

「いや、小さい女の子が此処は任せろーって」

カイドウは頭を抱えた。



目の前では未だにアーマーサウルスとシフによる戦じやれあいいが続いている。



余りにも暇だったせいかな、アーマーサウルスを見るなりシフが飛び出してちよつかいを掛けたのが始まりなんだけど……

もうシフに軽くあしらわれているアーマーサウルスがいたたまれなくなって、私は思わず眼を背けた。

大体、なんでこんなに弱い魔物が此処にいるんだろう。

アーマーサウルスが出てくる前に一瞬だけ空気が震えたけど、あれが何か関係しているのか知らん？

なんて考えていたら、いよいよシフ達の戦いじゃれあいも佳境のようで、明らかにアーマーサウルスの勢いが衰えている。

あ、倒れた。

「ミク様ミク様！ 見て下さいこれ！」

シフは倒れたアーマーサウルスに飛び乗って喉笛をかみ砕くと、勝ち誇ったように遠吠えをあげた。

ほめてほめて！ と言うように尻尾を振るものだから、頭を撫でて労ってあげる。

弱かったとは言え、魔物を倒したのは誉められることだ。ただ、惜しむらくは……

私は、周囲の惨状を見てため息を吐いた。

「シフ、遊びすぎだから」

アーマーサウルスの攻撃で抉れまくった壁や地面を横目にみつつ、シフの頭を軽く小突く。

シフも言われて気が付いたのか、気まずそうに視線を逸らした。まあ、シフも子供だし仕方がないのかな。そういえば遊んであげたこと無かったし。

結局、それらしい人とは会わなかったし空振りかなあ。日を改めれば会える……？あれ、向こうから走ってきてるのって……？

「カイドウさん……？」

なんだろう、すっごい慌ててるような……

もしかして、お兄さんがもう帰ってきてたからわざわざ知らせに？　なんて優しい人なんだろう。

笑顔で手を振ってみたなら、何故か顔をひきつらせてスピードをあげる。

うん？　なんで？

「こんの……大馬鹿やろう！」

「痛い?!」

なんで今殴られたの?!

カイドウさんによると、さっきシフが倒したアーマーサウルスは、ランクがBに届くか届かないかくらい**の強さらしい**。なんでも、それなりに強い部類の魔物だとか。

いや、でも待つてほしい　それにしてもシフあつさり倒してなかった？　どういこうと？

と言うわけで「妄想しんゆう」さん。教えて下さい。

《調子良いね……シフがアーマーサウルスに勝てたのは、単純にシフの方が強かったからだよ》

はあ……そう言われてもいまいちぴんとこない。ランクで言うところの辺りなの？

《Sランクくらいじゃない？》

……えすらんく？　なんか強そう。

《もうその認識で良いと思うよ……》

兎に角、シフが意外に強いと言うことが発覚したわけだけど、まあ今はそんなことは細事なわけで……

「おい、聞いてるのか！」

「聞いてます！」

「なら、今言ったことを復唱してみろ」

「聞いてなかったですごめんなさい！」

「この野郎……」

カイドウさんの有り難いお説教が早く終わってくれを祈るばかり。

「いいか？ Bランク以上の魔物っていうのは一人で挑むものじゃないんだ。今回はB—だったから何とか成ったものを、もう少し上位ランクの魔物だったら死んでたかも知れなかったんだぞ？」

「いやあの、戦ってたの私じゃ……」

「言い訳すんな！」

「ごめんなさい！」

カイドウさんはカンカンになって、今は何を言っても取り合ってくれそうにない。しかも、心配してくれているからよけいに反論しづらい。真っ先に心配……うん、真っ先はなぐられたけど。でも、その後一応私の心配もしてくれた。一応。……カイドウさん、私のこと心配してくれてるよね？

「——と言うわけだ、いいな？」

「えあ、はい？」

「……また聞いてなかったろ」

「あ、あはは……わ、わんもあぶりーず」

カイドウさんの目つきが怖い。正直、Bランクだ何だのと言っていたアーマーサウルスなんかより断然今のカイドウさんの方が怖い。

それを言ったらまた怒られるだろうから黙っておくけどね。

「いいか？ お前がアーマーサウルスと暴れ回ってくれたおかげで、鉱山の至る所で落盤が起きたんだ。幸い死者こそ出なかったものの、暫くの間採掘作業が出来なくなっ  
た」

「え、私が悪いの……？」

「はあ……いや、魔物を討伐してくれたことは感謝している。だが、採掘作業が出来ないってのはこの国ドワルゴンじゃかなり深刻なことなんだ」

「そっか、装備とかを作るための素材だもんね」

「ま、そういうことだ。んで、処置としてお前には国外退去命令。簡単に言えば出禁が言い渡された。それでも相当処置が軽くなってるんだからな？ 下手したら国家転覆罪だ」

魔物倒したら国家転覆罪で処刑とかたまったものじゃないんですが……というか、処置が軽くなったってことはカイドウさんが口添えでもしてくれたのかな。やっぱり優

しい人だ。

「……って、出禁？ それって、私がカイドウさんのお兄さんに会えるまで待つてくれたりは……」

「するか馬鹿やろう。退去命令は今すぐだ」

「ですよー」

さて、そうなると困った。正直この後どうしようとかいうプランが全くない。

カイドウさんのお兄さんにも、すごい武器を作れる人ってだけであいたかったわけだし、この国にきた理由もカイドウさんに会ったことで殆ど達成してるし……

私が悩んでいると、それを国外退去を渋っているとらえたのかカイドウさんが一つの提案をしてくれた。

「まあなんだ。お前ほど腕が立つなら、冒険者登録でもしてみたらどうだ？ どうせ登録していないんだろ？」



「冒険者登録……そういうのがあるんだ……」

ファンタジーな世界観だし、魔物とかが居るなら冒険者も居るだろうとは思っていたけど、まさか登録制だったとは……

もしかして、勇者とかも登録制なんだろうか。夢が壊れるなあ……

「冒険者登録をすればある程度自由に国家間を行き来できるし、方々で優遇されたりもする。勿論それにはランクを上げることが重要だが、お前なら討伐部門でCランクくらいなら直ぐとれるかもな」

どうやら冒険者にも種類があるらしく、葉草などの素材採集に特化しているのが「採取部門」。遺跡探索など、罫の解除や周辺警戒に特化しているのが「探索部門」。そして、魔物との戦闘を第一に考え、対魔物戦のエキスパートと呼ばれるのが「討伐部門」なのだそう。

勿論、部門加入に制限はなく、各部門でランクを上げる猛者もいるそうだ。

ただ、Bランクまであげるのは比較的簡単らしいんだけど、その先は確かな実績がな

いとランクアップの試験を受けることが出来ないらしくて、高ランクを目指したいなら部門は一つに絞った方がいいとの助言を貰った。

うーん、折角だし討伐部門で最高ランクを目指してみようかな！

なんて冗談半分にカイドウさんに伝えたら、ものすごく微妙な顔をされた。

「いや、その歳でそれだけ腕が立つなら、将来的に狙えなくもないだろうが……それにしたって、お前が高ランクの冒険者に成るってのはどうもいけ好かないな……」

「ひどい?!」

「冗談だ、半分くらいは。そんなことより、受けるつもりがあるならこれを持ってブルムンドを目指せ」

「えっと、これは一体?」

「簡単な紹介状みたいなものだ。その見た目じゃ討伐部門は受けにくいだろうし、受付が渋ったらそれを見せればいい」

「へー……ありがとうございます！」

「いや、良いさ。恩人への饒別みたいなもんだからな。俺はこの後もう一人の恩人に礼をしに言く予定だから、おまえはさっさと国をでろよ？」

「分かりましたって……そんなことより、もう一人の恩人って？」

「ああ、実は俺の兄弟分が運悪く此処に採掘しに来てたみたいだな。大けがを負って死にかけてたんだが、お人好しな魔物のおかげで助かったんだ」

「……もしかして、それって私のせいだったりします……？」

「……気にするな。おまえがいなかったらあいつ等は怪我どころじゃすまなかつたかも知れん。過ぎたことをとやかく言ったりはしないさ」

良かった。もしシフ達の戦いに巻き込まれて大怪我を負っていたんだとしたら、シフ

にもうちよつと説教しなきゃいけないところだった。

カイドウさんも気にするなつていつてくれたし、此処は素直に忘れてしまおう。

それにしても、お人好しな魔物ね……会つてみたい気もするけど、さつさと国をでないとまた怒られるんだろうなあ。

よし、此処はブルムンドとやらに行つて冒険者になつてみよつと！

「因みに、その魔物つてどんな感じの？」

「しゃべるスライムだ。まあ、会つたら直ぐ解るくらいには変な奴だよ。そんなことよ  
り、さつさと出てつた方が身のためだと思うが……？」

「分かりましたあ！ ……それじゃ、いろいろお世話になりました。またどこかで」

「俺的にはあんまり会いたくはないな」

「ええ……」

何という冷たい反応。私が一体なにをしたと言うんだろうか……

《不審な動きしたり、鉦山破壊したり?》

そういえばそうだった。そう考えると、私ってカイドウさんに迷惑しかかけてない……?

うん、このことを考えるのは止そう。考えても私が悲しくなる未来しか見えない。

そんなことよりも、また暫く歩くことになりそう……まあ、この体は存外丈夫みたいで幾ら歩いても息切れ一つ起こさないから、問題ないと言えば問題ないんだけど……

なんというか、道中がとても暇なのだ。

いや、スキルの研究とか修業とかやることに暇はないんだけど、それだけで時間を忘れるほど集中できるかと聞かれたら否なわけでして。

カイドウさんと別れてドワルゴンから出た私は、ひっそりため息を吐いた。

「はあ……何かおもしろそうなおこと起きないかなあ……」

そのささやかな願いが聞き届けられるかどうかは、今の私には知りようがないけどね

あとがきに転生する？

✓ Y e s

N o

## 新たな仲間

大上段から打ち下ろされる剣をアスカロンの剣の腹で滑らせつつ、体勢を崩したところを一閃して倒す。

近くではシフとカイが同じように襲ってくるオークを噛み殺したりはね飛ばしたりしている。

こんな時でもはしゃいでカイに窘められているシフに和みつつ、新たに襲ってくるオークにアスカロンを構え直す。

視界がオークで埋まるっていう全く嬉しくない光景に辟易しつつ、私はまた一体オークの首を斬り飛ばしたため息を吐いた。

もう、斬っても斬っても全く減らないし、そもそも何故かは知らないけど死体を私そつちのけで喰い漁り始めるし、豚顔だし、嫌になってくる。

《最後の完全には偏見じゃない？》

だって事実だもん。何が悲しくて豚に囲まれて熱いアプローチを受けなきゃいけないのか。

一分一秒でも此処にいたくないし、さっさと囲いを突破して此処から逃げ出したいのは山々だけど、それも出来ない事情がある。

チラリと視線を後ろへ送ると、銀色の髪をした子供が顔を青くして震えている。

人間の子という訳じゃなくて、「妄想」曰わくオーガだそう。

偶々——本当に偶々通りがかったこのジュラの森で、オークに追いかけている子供が見えたから思わず助けちゃったんだけど……うーん、どうしようこれ。

「妄想」、なんかこうズバーつと片付けられるスキルとか無い？

《ズバーつとつて……幾ら何でも抽象的過ぎだよな？》

えー……それじゃ、格好良く雷とか落として殲滅するみたいな。

『エクストラスキル「黒雲招来」を獲得しました』

「妄想」が文句を言ってきたから少しイメージを固めたところ、あの機械音声みたいに



感情の窺えない声が響いてきた。

「黒雲招来」ね……なんだか威力出なさそうだけど、とりあえず試してみよう。それで「妄想」しんゆう、どうやって使えば良いのこれ？

《おおざっぱに場所を指定すれば、後はこっちで味方に被害が出ないように調整するよ》

おお、何という便利さ。それじゃ、大体あの辺りにしてみよう。

私が適当に選んだのは、シフ達が戦っている方向とは反対の位置。

調整するといっても、わざわざ味方の近くに指定するのは危ないし意味ないからね。で、肝心の威力の方は……

《あ、見てない方が良いよ》

え？

一瞬。それは本当に一瞬の出来事だった。

「妄想」の音が聞こえた直後、圧倒的な光の奔流と断続的に響く衝撃波が私の五感をダイレクトで抉っていく。

もうね、痛いとかそういうレベルじゃない。ヤバい、この一言につきる。後取り敢えず「妄想」。私はおまえを絶対に許さない。

《えー、一応注意喚起はしたよね?》

した直後にこうなったんだけど? もう視覚も聴覚も使い物にならないんだけど?

『「状態異常耐性」を獲得しました』

なった後に獲得しても遅いんだけど?!

は、いけないいけない。「妄想」は良いとしてもこの機械音声に怒ったって仕方がない。冷静にならないと。

まあ、結構凄そうだったし威力も期待——

耐性を得たおかげで回復が速まったのか視界が急速にクリアになっていき、黒雲招来

のもたらした破壊の跡が私の目に飛び込んでくる。

「——へ？」

目の前の光景は一面の更地。先程まで犇めいていたオークはおろか、木々や岩までもがきれいさっぱり視界から消えてしまっていた。

……威力、高すぎない？

《でもほら、ズバーっと格好良く殲滅できたよ》

それはそうだけど……うん、このスキルはなるべく使わないようにしよう。  
そんなことよりも。

「カイ！ その子背負うなり啜えるなりして付いてきて！ シフ！ いつまでも遊んでるとおいてくよ！」

後ろのカイとシフにそう指示をとばすと、更地になった方へと駆け出す。

後ろからは「ひゃあ?!」という小さな悲鳴と二種の足音が響いてきているので、二人ともちゃんと付いてきてくれている。

私たちはそのまま、追っってくるオーク達が見えなくなるまで全力で走り続けた。

……あれ？ 私もカイに乗せて貰った方が早かったんじゃない？



「これは、一体……ッ！」

少女の悲痛な叫びは、絶え間なく響く剣撃にかき消される。

目の前で繰り広げられるのは、戦いなどという生やさしいものではない。

虐殺——そう、これは一方的な虐殺だ。

いや、見渡す限り敵の姿が飛び込んでくる状況だ。戦況も一方的にもなるだろう。

……その相手が、オークでさえなければ、だが。

オークとオーガの間に存在する絶対的な壁。それはランクの優劣だ。

オークは精々がDランク。対するオーガはBランク以上の個体も存在する。

この世界において、戦争は数ではなく質。たった300程度の集団であろうと、オークなどが幾ら集まっても負ける筈もないのだ——本来なら。

だから、今少女の目の前の全てが異常。

族長は黒い鎧を纏ったオークに一撃で屠られ、主たる戦士達も悉くがなぶり殺された。

幾ら戦闘集団といえど、全員が優秀な戦士というわけではない。

歳をとって動きが鈍くなった者もいれば、今なお修業中のものもいる。

そんな者達が、倒しても倒しても押し寄せてくる敵を前に、いつまでも持つはずがなかった。

一人、また一人とオーク共の波に飲み込まれていく。

ふと気が付くと、少女の周りには少年が一人居るのみ。

その少年も少女に気が付いたのか、少し安堵したように近寄り背中合わせになる。

「あー、しんどい。何時になつたらこの波切れんのかね」

「あんたがこれ全部殺しきれば、波も切れるんじゃない？」

「いやいや、それは幾ら何でも無茶じゃ……つと！」

軽口を叩きながらまた一体を切り捨てるも、その穴はすぐに別のオークによつて塞がれる。その事に苦笑いを浮かべた少年は、困つたように背中合わせの少女に問うた。

「どうするよこれ」

「どうも出来ないから困つてるんでしょ」

「それもそうか」

元々解など期待していなかったのか、少年はあつさりと言葉を受け流すと目の前の仇

を切り捨てた。

「ならば、俺の案に乗らない？」

「……一応聞くけど？」

「俺が全力でお前をぶん投げれば」

「それ、あんたはどうやって脱出するわけ？」

「じ、自分をぶん投げれば……」

「要は考えてなかったわけね」

少年の案とも呼べない提案に、少女は呆れつつも此奴らしいと顔を綻ばせた。それをみた少年は、ニヤリと笑いつつ大げさにおどけてみせる。

「作戦なんてその時になってから考えればいいんだよ。行き当たりばったりが一番性に合ってるからな！」

「はいはい。前見ないと斬られるわよ」

「え？ ……うおおお?! あぶねえええ?!」

この少年騒がしいのが玉に瑕だが、剣の腕は少女など遙かに凌ぐものを持っている。騒がしいのが玉に瑕だが。

それは裏を返せば、それほどの腕を持っていてもこのオーク共の包囲を脱せ無いのだ。

「しっかし本当にどうしようこれ。いつそ本当にぶん投げようか？」

「却下に決まってるでしょ。他に良い案はないの？」

「うーん——あ、ある……にはある、けど……」



「……………？　どんな？」

「俺がお前を抱えて、オーク共の頭を踏み台に脱出……………うんやっぱりなんでもな——」

「……………うん、案外いけるかも知れない」

「——おう？　提案した俺がいうのもあれだけど、正気？」

「他に良い案もないでしょ。投げるのは却下で」

少女は大雑把に周囲を見渡すと、一番囲みの薄い地点を見つけ出し少年へと振り返った。

「それじゃ、よろしくね？」

「おう、マジかよ……………失敗しても恨むなよ？」

「はいはい。成功するよう祈っておくから」

少年は少女を抱え上げると、大地を力強く蹴りつけ大きく飛び上がる。そのまま着地点となるオークの頭を踏み抜きつつ、囲いを破るべくオークのいない方へと突き進んでいく。

少女は少年の腕の中で身をよじると、眼下へと視線を向けた。

未だにそこかしこで剣撃が鳴り響いているが、それも今にも消えてしまいそうなほど弱々しい。

見渡す限り、オークで埋め尽くされている視界。

そう、奴らに。あの黒い鎧に、族長も皆も殺されて――

ふと、少女の思考はそこで止まる。

そうだ、あの黒い鎧。黒い鎧を纏ったオークは、今どこに……？

「ぐ……ああああ?!」

少女がその発想に至るとほぼ同時、彼女を抱える少年の口から苦悶の声が漏れる。

何事かと視線を戻そうとしたとき、バランスを崩したのか少年が倒れ込み、少女は地面へと投げ出された。

幸いにも包囲は突破していたようで、地面に倒れた少女に襲ってくる影はない。

慌てて飛び起き少年の方へと視線を向けると、右肩を押さえた少年が肩で大きく息をしていた。

その眼前には、あの黒鎧の姿があつた。

「……ッ！ 逃げて！ そいつは——」

「——逃げる？ はは、馬鹿言うなよ」

「え………？」

「むしろ逃げるのはお前だ。何のためにお前を包囲の外に出したと思ってる？」

「なに、を………」

少女は一つの思い違いをしていた。

少年にすら、この包围を破るのは容易では無いのだと。

しかし、実際にはそれは誤りだった。

少年は、逃げようと思えばいくらでも逃げ切れたのだ。

ただ、少女を逃がすためにそれにそれをしなかつただけのこと。

「ほら、早くいけよ。敵さんは待っちゃくれない、ぜー」

少年はいつの間にか近寄って来ていた黒鎧に猛然と打ち掛かった。

その周りには無数のオークが少年を襲わんと犇めき合っている。

「……！ 私も残って……」

「おいおい、俺に無駄死にさせる気か？ ……頼むぜ。生き残ってさ、みんなの仇とつてくれよ」

剣戟の間を縫うように一瞬だけ少年は少女へと顔を向ける。

その顔は少女に対する信頼であふれており——その口元には、微笑さえ浮かんでいった。

仇をとる、そのためには生きて帰らなければならない。たとえ、今日の前の少年を見捨てることになろうとも。

だが、確かに託された。少年は少女に“一緒に死ぬこと”ではなく“生きて仇をとること”を望んだ。だったら、少女に出来ることは一つだけだ。

「…………ツ 取るから…………絶対に、仇はとるから！」

少女は少年に背を向け、振り返らずに走り出した。その少女に向けて、オークの群れが逃がすまいと押し寄せる。

その光景を横目でみつつ、少年は黒鎧に向かって不敵に笑った。

「仇を頼むとは言ったが、死んでやる気はさらさらないぜ？」

「…………」

「……黙りかよ、つれねえな。暫くは付き合ってもらうんだ、仲良くしようぜ」

時さえ稼げればそれで良い。少女ならきつと……

そんな思いを胸に、少年は絶望的な戦闘を始めた。

木々の間を抜け、一目散に逃げる。後ろを振り返らずとも、奴らがしつこく追ってきているのは解っていた。

先程まで全力で戦闘をしていた上に、今度は全力で疾走している少女の体力は、とうに限界を迎えていた。

既に足の感覚は半ば失われ、気力のみで走っているに過ぎない。

そんな少女が周囲に良く警戒を出来るわけもなく、地面から突き出していた木の根に足を取られたのは、ある意味必然だったのだろう。

「……うあッ」

バランスを崩して勢いそのままに地面へと投げ出された少女は、立ち上がって再度走り出そうともがく。

しかし、極限まで酷使された四肢は一度迎えた休息を手放そうとせず、少女の必死の努力は僅かに体勢を変えたにとどまった。

そんな少女の目には、動きを止めた獲物に猛然と向かってくるオーク達の姿が映った。

少女の顔に、恐怖はない。有るのは、諦観の念と己への苛立ち。

少年に託された思いすら果たせず、この状況を半ば以上仕方のないことだと受け入れてしまっている己に。

全く及ばない、己の力に。

「もっと、力があれば……」

少女は迫り来るオークの群れを、ただ為す術なく見つめることしか出来なかった。

そして、オーク達の伸ばした腕の一本が少女を捕らえようとしたその刹那。

「——え？」

少女の視界の端に、金色の光が掠める。それと同時に、近くまで迫っていたオーク達の体が両断された。

「カイ、シフ！ そいつら蹴散らしておいて！」

そんな声とともに、大小二つの影がオークに飛びかかる。見た目は牙狼族に見えたが、内包している力はそれとは比較にもならなかった。

特に小さい影の方は、垂れ流しているであろう力の底がとんでもなく深く、少女の知っている限り一番強い族長と比べても全く勝負にならないほどだった。

「大丈夫？ えーつと……ふーん、オーガの子かあ」

驚いている少女に、声をかけてきた存在がいた。

金色に淡く光る髪を持つ、十にも満たなそうな容姿を持った女の子。

少女を心配するような表情の女の子と眼があつた少女は、しかし恐怖に身をすくませた。



その双眸は少女の全てを見抜いているかのように鋭く、あの小さな方の牙狼族よりも底知れない力をあふれられる女の子に、絶望的な状況になってさえ恐怖を感じなかった少女が身をすくませたのだ。

——次元が、違う……

強い弱いではなく、最早別の次元の存在。それが少女の女の子に対する率直な感想であつた。

少女が嘗て無い恐怖に身をすくませていると、女の子は何を納得したのか一つ頷くと少女に向かって笑いかけた。

「大丈夫、こんな奴らすぐに蹴散らして……え？ 囲まれた？ ……ちよ、敵多すぎない?!」

素つ頓狂な声をあげる女の子に、少女は結局オークから逃げ切るまで震えを抑えることが出来なかつた。



あの後、あのオーク達から逃げ切るのものすごい苦労した。

なんかどんなに威嚇しても怯まないで襲ってくるものだから、もう一発「黒雲招来」をお見舞いした後にカイに乗せてもらってその場から全速力で逃げ出した。

それで、ようやく落ち着いた私達はオークに追いかけられていた子から事情を聞こうと思って休憩中なんだけど……

「……」

「……」

何故かすっごい怯えられています。

おかしい、私はこの子に感謝されることはあっても、怯えられるようなことなんて

……

あ！もしかして「黒雲招来」に怯えちゃったとか？ それは悪いことをしてしまっ  
た……

正直、あんなもの見せられたら誰だつて怖がる。私だつて怖がる。

《ああ、その可能性はないよ。あの光と音は「オーバードライブ事象上書き」の応用と「スキルクリエイト創造世界」で作つた「情報拡散」でその子とあのわんちゃん達には届いてないから》

うん、待とうか。色々突っ込みたいけど、一つずつ消化していこう。

まず、「スキルクリエイト創造世界」と「情報拡散」ってなに？

《「スキルクリエイト創造世界」はスキルを作るスキルだね。相当とんでもないもの以外だったら、その場で即座に作れる優れものだよ。あと、「情報拡散」は光とか音とかの情報の進む方向に干渉してねじ曲げて、周囲に散らすスキルだね。魔法とかにも使えるから、防御スキルみたいなものかな》

オーケーオーケー、それじゃ次にいこう。

……なんでその「情報拡散」で私のこと守らなかつたの?!

《ほ、ほら。二回目は守ったし。一回目は「状態異常耐性」を得るために……ね?》

ね? じゃないよ! あれ本当に辛かったんだかね?! つていうか、だからそういうことは先に言っててば!

念話で「妄想」に怒鳴り散らすと同時、あの子と目が合う。

「……(ふい)」

……め、逸らされた。なんかこう、凄いい心にグサグサくるよ……

でも、助けた手前怖がってるからここでバイバイ、というわけにもいかないよね。うーん、どうしよう……

「……あ、あの……ッ」

「うん?」

なんて思案していたら、向こうの方から声をかけてきてくれた。これはチャンス！ 聞きたいことがあるなら何でも聞きなさい！……だから、目が合ったらビクってなるの、やめて？

「あなたは……どうやって、その力を身につけたんですか……？」

「え？ あー、うーんと……」

「わたツ……私に、力を与えてくれませんか?!」

「えーつと……」

どうしよう。転生した時にこの力貰いました(笑)、とかいえるわけ無い。それに、力を与えてといわれても、私自身そんなに強い訳じゃないし……

《名付けをすれば、手っ取り早く力をあげることが出来るよ?》

あ、そっか。カイもそれで進化したしね。

でも、同意なしに名付けをするのもなんだかなあ。カイの時ののは不可抗力つてことで。

というわけで、この子に聞いてみよう。本当に力がほしいなら、受けてくれると思うけど……

「力を、ね。それはいいけど、一つ条件があるよ」

「それ、は……?」

「私はあなたに名前をあげる。だから、あなたは私の『家族』になってくれない?」

「名前を……? いえ、それよりも……『家族』?」

「そう、家族。カイもシフも私の大切な家族だから、何かの時は守ってあげるし、力にもなる。君も家族になってくれるんだったら、全力で助けてあげる。……なにか、困って

るんでしょ?」

「あ……」

その子は小さな声を漏らして顔を俯かせてしまう……と思ったけど、すぐに顔をあげて私の目をまつすぐに見てきた。

ああ、漸く怯えられずに済む!

「……私は、仲間に託されました。仇を取ってくれと」

「うん」

「だから、私に力を……そして、居場所を下さい」

これで同意は得たかな。さてさて、本題の名前を決める段階に移るけど……ぶつちやけると、私にネーミングセンスとか求められても困る。

カイは毛の色から取ったし、シフはもうなんかあれだし。

というわけで、此処は大人しく髪の色から決めさせて貰おう。  
えーっと、銀色だからギン……？ いや、それとも……

「うん、〃シロガネ〃って名前はどうかかな？」

「シロガネ、ですか……」

「気に入らなかった？」

「いえ、そんなことは。ありがとうございます」

私に頭を下げるその子の体が、カイの時と同じように光に包まれる。

この子も進化かあ、とか思っていたら案の定きましたよあの虚脱感。

い、いや。でもシフの時に比べたら軽い気がする。あの時は溜まらず崩れ落ちちゃったけど、今はなんとか踏みとどまれる……と。

危ない危ない。気を抜いたら足から崩れ落ちそうだけど、立っていられなくはない。



「あの……大丈夫ですか？」

「あーうん、大丈夫だいじょう……？」

あれ？　なんか声音ちがくない？

視線をあげてみれば、身長150cm程度の女の人が私のことを心配するように見下ろしている。

えーつと、どちら様でせう……？

《さっきのオーガの女の子だよ。進化して体格が良くなったんだね》

え、えー……？　変わり過ぎじゃない？　いや、こんなものなのかなあ……

あ、やばい力抜けた。

「ちよ、大丈夫ですか?!」

「ミク様?!」

シロガネやカイの心配そうな声を聞きつつ、足先から崩れ落ちた私は、さっきの激闘も相まって私は意識を落とすことにした。

うん、なんか今日は濃い一日だった……っっていうか、ちゃん 目を見てくれたことで嬉しくなってよく聞いてなかったけど、仇ってなに？

なんか、面倒なことになりそうだなあ……

そんなことを思いつつ、私は二度目の虚脱感に身を任せていった。

あとがきに転生する？

✓ Yes

No

## 少女の思い

幸いにも、二度目の虚脱感は一日とたたないうちに回復した。

なにかシロガネとカイが私がどうのとじゃれ合ってたけど、まあそれはどうでもいい。仲良くなることは良いことだもんね。

後ろから聞こえ始めた破砕音を無視して、私は目の前の小さな悪魔を抱え上げる。

「シーフー？ 私、顔をなめるのを控えろって、言ったよね？」

「平時はずっと控えているので、今回は羽目を外しました！」

「外さなくて良いの！ ちゃんとはめておいて！」

可愛い顔して何てことを言うんだこの小悪魔ちゃん。

これってもしかしてあれ？ こうなる度にシフに顔を蹂躪されるの？

むう、何か対策を考えないと……取りあえず、名付けは慎重に行うべきだね。

名付けをする。シフになめられる……と。

まあ、名付けなんてそうそうする事でもないだろうし――

「ミク（主）様！」

「――ふえ？」

呼ばれて振り返ってみると、肩で息をしたシロガネとカイが私の方へと身を乗り出してきている。

っていうか、主様ってそんな主従関係みたいな……

「えつと、なに？」

「聞いて下さい主様！ 主様のお世話は人の形に近く、かつ女である私の役目に決まっていますよね！」

「え？ えーつと……」

「全く何を……ミク様の身边のお世話は、古参である私の役目に決まっている。そうですよね、ミク様？」

「う、うーん……？」

「ちよ、古参って言ってもそんなに変わらないじゃないですか！」

「少しでも早ければ古参だろう」

「誰が決めたんですかそんなこと！」

「はいはいストップ。喧嘩しないの」

目の前でいがみ合い始めたシフとシロガネを軽く叱りつけると、二人ともシユンとなつて大人しくなる。

うん、シフだけでも罪悪感が凄かったけど、二人合わせるともつと凄いや。私間違つ

たことしてないはずなだけどなあ……

「えっと、取り敢えず二人にとって私の周辺の世話って外せないことなの？」

「勿論です。その為にも、主様と形状の近いこの私が……」

「進化したてで、身体のコントロールが上手くいかんだろう？ 案ずるな、やはりここは私が……」

「なんでそういがみ合おうとするかな！ ……交代制じゃだめなの？」

「……交代制、ですか。なる程、考えもつきませんでした」

「流石はミク様、確かに一定の期間において交代すれば何の後腐れもなくお世話をする  
ことが出来ます」

「交代の期間はどうしますか？」

「十日毎でいいだろう。長すぎず、短すぎずだ」

交代制を提言したら、私そつちのけで話が進んでいってしまった。と言うか君たち、私の身辺の世話とか何が楽しいの？ しかも十日毎とか、私だったら一日交代でも面倒なくらいだと思うけど……

まあ、本人達がいいのならいいんだけどね。別に嫌なわけじゃないし。

「では、最初の十日は私が主様のお世話をしますね」

「……さて、期間を決めたのは私だ。ここは私に譲るべきところだろうか？」

「それを言うなら、主様の提案を先に肯定したのは私ですし、そもそも私が期間の話をそちらに振ってあげたんですよ？　ここは勿論、私からだ」と

「……一度、はつきりさせた方が良くようだな」

「……望むところです」

もう知らない。後ろから聞こえてくる戦闘の音なんて知らない。

兎に角、この二人は放っておいてさっさと目的のブルムンド王国へ向かおうそうしよう。

「先行ってるからねー。ちゃんと後からくるんだよー」

「ちよ、待って下さいそれは本気出し過ぎ——」

「本気を出すことの何が悪い！」

「——危なし?!」

「……行こっか、シフ」

ま、後からちゃんと付いてくるから大丈夫でしょ。



……大丈夫だよね？



「ささ、主様。何なりと申しつけて下さい！」

「うん、今は特にないからもう少し落ち着いて歩いてくれないかな……？」

私たちは今、ブルムンド王国の領地を歩いている。

領地、と言ってもここは農村みただけ。

道行く人に聞いてみたら、ブルムンド王国は小さな国で中心に位置する王都と周囲の村々から成り立ってるらしい。

その王都へはこの村から定期馬車がでているらしいから、折角ということで村を散策しているわけだ。

まあ、定期馬車の時間にまだ成ってないだけなんだけどね。

で、今となりにいるのはシロガネだ。

ボロボロになりながらも「主様、勝ちましたよ！」と誇らしげに報告してきたから、何となく頭をなでてあげた。

その様子をカイが羨ましげな顔で見っていたけど、そういえばカイは全く怪我してなかったような……

一応決着は着いたみたいで、カイは大人しく私の陰に潜ってシロガネが私の隣を歩くことになった。

ボロボロな見た目で王国に行く訳にも行かなかつたから、「神話召異」で適当に服と武器を作つてあげた。特にこれといったものがない浮かばなかつたけど、取り敢えず丈夫な服とよく切れる刀を思い浮かべたら出てきてくれた。本当にスキルとか魔法つて便利。

そんなわけで、先程から時間を潰すために村を適当に歩いているんだけど、シロガネがどうしても私の世話をしたいのかちよつと鬱陶しい。

一応シロガネの身に起こつた経緯を聞いたりしたんだけど、本人は仇を討つ事以外にはあんまり関心がないみたい。

オークが憎い？ つてきいたら黒い鎧の奴以外は特に、つて返つてきたし。

まあ兎に角、完全に善意からなんだろうから邪険にも出来ないし、どうしよう……

「そ、そうだ。おなか減っただろうし、宿屋でご飯でも食べよっか」

「分かりました！ 任せてください！」

「待つて待つて！ なんで武器抜き放つの?!」

「え？ ですから矢土野というところで獲物を狩るのでしょう？」

「しまった常識に差異が……」

危うく大惨事になるところだった……と言うわけで、シロガネに人間社会の常識について基本的なことを教えてあげた。

まあ、私の知っているものとの世界のが一緒とは限らないだろうから、基本的に基本的なことだけだね。

「なる程、此処では無闇に武器を抜くのは禁止なんですか……」

「そうそう、話し合いで解決するの。わかった？」

「はい、うっかり武器を抜かないように常に気を張っておきます」

「う、うん。頑張ってるね……」

気を張ってないとうっかり抜いちやうんだ……私もシロガネが暴走しちゃったときに対処できるように、気をつけておこう。

「そんなこんなで宿屋について中に入ってみると、それなりに人が居て賑わいがあった。」

宿の真ん中で冒険者らしい風貌をした男たちが何やら騒いでいたけど、煩わしいから頭のなかから締め出す。

第一、関わりと碌な事にならなそうだし。

「えっと……ここが宿屋つてところね。ここで寝たり食事をしたり、まあ色々とするわ

「ただけど」

「なるほど、ここが……しかし、獲物はどこにいるんですか？　そこらに群れている人間どもは食べられないでしょうし、いるとすればあそこのまるまる太った豚……」

「いや、それも人間だから一応！　えっとね、ここでは食べ物を注文すれば調理してから出してくれるんだよ」

「じ、自分で料理をしないんですか？　そんな、もし口に合わなかったら……」

「うーん、まあそういう時もあるかもしれないけど、基本的にこういったところの料理は万人に受けるような味付けをされてるから、問題はないと思うよ」

「なるほど……人間の村々には優秀な料理人がいるのですね……」

やがて運ばれてきた料理をひとくち食べて、シロガネは満足そうに一つ頷いた。どうやら口にあったみたいだ。

私も、目の前に運ばれてきた料理をひとくち食べようと手を伸ばす。けど、その私の視界の端から、ヌツと一本の大柄な腕が生えてきた。

「……………えつとっ？」

腕の持ち主を仰ぎ見てみれば、先ほど宿の真ん中で騒いでいた内の一人だ。

あの騒ぎの中では多少マシな腕を持つてたようだけど、それでも大した実力じゃない。  
い。

いざとなればどうとでもなるんだけど、まあ騒ぎはなるべく起こしたくないわけだからここは穏便にすまそうと思う。

だからシロガネさん、抜刀しようとするのはどうかこらえて下さいお願いします。

「……………お前、頭に乗っけてるもんは一体何だ？」

漸く話しかけてきたと思ったら、突然にそんなことを聞いてきた。

頭の上？ えーつと、よだれをダラダラ垂らしながら私の食べようとしてる料理をじつと見つめているシフがいますね。

さつきからなんか頭が暖かいなあと思つたらそういうことだったのかー、あはは。  
これは後でキツイお説教が必要だね……

「まあ……ペット？　みたいなものかな？」

「ペットだと？」

私の言に、シフが抗議の視線を送ってくるけど、だつて君犬みたいなんだもん……  
シフを見ていると遊びたいざかりの子犬を見ている気持ちになつてくる。

あれは、間違つても狼が取る行動じゃないよ。犬だよ。

「そいつは、牙狼族だよな？」

「うん？　うん、そうだけど」

「つまり、お前は魔物をペットと言いたいわけか？」

「うん、私の大事な家族みたいなものだよ」

料理食べたいんだから早くどつかいって！ と強く念じてみるものの、男は何が気になるのか質問を重ねてくる。

だんだん面倒になってきた私は、おぎなりに対応することにした。

「で、私の他の家族がすごい形相であなたのこと睨んでるから、そろそろ下がったほうが良いよ？ それに、私いい加減たべ——」

「——おい、聞いたかお前ら?! こいつ、よりにもよって魔物を『家族』だとよ!」

うん? なんだか不穏な雰囲気になってきた?

え、ちよつと待つてつて。騒ぎを起こしたくないんだから、あんまり騒がないでよ。

「お前、魔物と戦ったことはあるか? ねえよな。魔物に誰かが殺されるの見たことがあるか? あるはずねえよな。魔物に大切な人が殺されるのをただ見てるしかなかつた経験はあるか?! ねえよなあ?!」



「ちよ、いきなりなんでヒートアップしてるの？」

トラウマスイッチでも入っちゃったのかは知らないけど、ちよつと他所でやってくれないかな……

「こう、ご飯を前に邪魔されると、凄く苛々するんだけど……」

「ご飯の恨みって、恐ろしいんだよ？」

「あつたら、魔物なんざと『家族ごっこ』なんかして遊んでいられねえもんないか?! 魔物っていうのはな、こうやって大事なもんを奪ってく奴らなんだよ!」

突然、男が背中からツヴァイヘンダーを取り外すと、シフにめがけて振り下ろしてきた。

「だけど、それはキレも何もあつたものじゃないただの振り下ろし。」

「当然それを察して、その剣筋から華麗に離脱をしていくシフ。」

「……ちよつと待って、頭の上にいたシフがそれ躲したら。」

「……これ私の脳天に向かって突き進んでくるんだけど?!」

「余裕ぶっこいてたら躲す時間なくなつたし!」

シフがこつちを向いて、可愛く舌を出してるのを横目に見つつ私はアスカロンを手に取ろうとする。

シフには後でたつぷりお説教をしてやらねば……

「——んなツ」

突如キーン、と金属と金属がふれ合ったみたいな甲高い音とともに、振り下ろされえている最中の刃が空中で切断された。

そのことに、声を上げて驚く男。まあ、いきなり武器がぶつ壊されたらそりゃ驚くよね。

あ、壊れた武器は弁償しないからね？ 自業自得だから。

「ありがと、シロガネ。もう大丈夫だから、刀仕舞っていいよ」

「しかし主様、この狼藉者の首を狩らねばまたいつ襲ってくるか……」

「あ、本当に良いから！ そんなことしないでいいからね！」

渋々といった体で刀をしまうシロガネにホツとしつつ、私は料理を食べようと前を向き直る。

しかし、そこには既に料理の姿はなかった。

あるのは、ピカピカに舐められた皿と丸くなって眠るシフが一匹。

ほう、良かろう。そこまでお説教されたいのかこの子は……ッ

「……ッ お前は分かかってない！ 魔物がどんな存在なのか！ 今に、きつと後悔を――」

料理を食べられてイライラしているところに、更にイラつく声が聞こえてくる。

魔物がどんな存在か？ 私の料理を勝手に食べる恐ろしい存在ですよ……！！

「お前の大事なもんが、そいつに奪われるんだからな！」

もう奪われたって、私の料理！

あーもう本当にうるさい！

【——黙れ】

怒り心頭の私は、思わず声を荒げてそう口にする。

低く響いたその声は、場を支配し辺りに静寂を招き入れた。



暴風竜の消滅が確認されてから、ここブルムンドでは魔物の大量発生に備えて警報が出されていた。

王都の警備はより嚴重になり、周囲の村々には一定の腕を持った冒険者達が最低でも5人は付くようになっていた。

冒険者達はいっ現れるか解らない魔物の群れにピリピリとし、村には暗い雰囲気が漂っている。

そんな暗い雰囲気を払拭すべく、ギルマス支部長であるフューズは村を巡って冒険者達を鼓舞

していた。

「っあー。全く、どいつもこいつも陰気な顔しやがって」

そうボヤクフューズは、とある村で食事を取っていた。

一時的に訪れる休息の時間……だったのだが、にわかに入り口の辺りが騒がしくなってくる。

気怠げにフューズが視線を向けると、一人の冒険者が女の子の前に仁王立ちしている。

「何やってんだあの馬鹿は……」

憂さ晴らしか、何なのか。兎に角女の子相手に威圧するかのような男にため息を吐くと、叱りつけるべく席を立ち――

「――あん?」

一体いつ立ったのか。女の子の保護者らしい女性が、男に刀を突きつけている。しかも、男のツバアイヘンダーが両断されているというおまけ付きで。

「……おいおい、全く見えなかったぞ？」

フューズの背中に冷や汗が流れる。彼自身かなりの実力を持っているのだが、今の斬撃は予備動作すら見えなかった。

こいつはやばい手合いだ。そう直感的に感じ取ったフューズは、冒険者達を止めるために口を開いた。

……その口から、言葉が発せられることはなかったが。

【黙れ】

女性の方ではなく、女の子の方が放ったよく通る呟き。

しかし、その言葉は途轍もない重圧とともに場を支配した。

（——ッ！　なんだ、これは……！）

フューズですら毛先一本動かすことの出来ない空間を作りだした少女は、すつくと立つと冒険者達へ近づいていく。

フューズからは角度的に表情を見ることは出来ないが、冒険者達の表情は恐怖に染まっているだろう。

何故なら、当事者でないはずのフューズさえも少なくない恐怖を感じているのだから。

「あなた達が魔物をどう見ようと、私はどうでもいい」

女の子は男の前に立つと、真っ直ぐに男の目を見つめる。

女の子の方が遥かに小さいはずなのに、男を見下ろすかのごとく圧倒的な威圧感を放っている。

「でも、それで邪魔をするなら話は別。それ相応の覚悟はしてもらおうから」

吐き捨てるように、女の子がその言葉を男へと投げかける。

言いたいことを言い切ったのか、興味を失ったように背を向けると、テーブルの上から何かを取り上げて頭に載せた。

その時になつてはじめて、フューズはその魔物の存在に気がついた。

（魔物?! あれは、牙狼族か……? それにしては……）

流れ出ている魔素が洗練されている。

溢れ出ている絶対量は、意識しなければ気が付かないほどに小さいのに、その鋭さだけが量に反比例して研ぎ澄まされているのだ。

明らかにチグハグな関係。しかし、もしあの牙狼族が意図して力を抑えているのなら

……

「ほら、行くよシフ」

（やはり固有<sup>ネ</sup>名<sup>ム</sup>持ち<sup>ド</sup>か!）

名を持つ魔物は、個体の能力が飛躍的に上昇する。それこそ、魔王と呼ばれる連中は



皆名を持っていて。一部に例外がいるとはいえ、放っておけばいずれ力を付けて――

（――いや、待て。と言うことは、あの女の子はそれほどの魔物を手懐けているのか……？）

もし人の身でそれを為したのであれば、恐ろしいほどの逸材。

先ほどから続く重圧にしても、フューズですら動けないと言うことは少なく見積もつてもAランクオーバー。

――実力が能力に見合っているのかはともかく、魔物の大量発生が予想される現状是非欲しい人材なのだ。

「……いい、シロガネ」

女の子はそれだけ言うと、踵を返して宿を出ていった。シロガネと呼ばれた女性も刀をしまおうと、それに続く。

姿が見えなくなると、場を覆っていた重圧が消え去った。それと同時に、今まで動かなかった身体が動くようになる。

フューズは完全に腰を抜かしてしまっている冒険者達には見向きもせず、女の子の後を追って宿を飛び出した。



宿をでた後、私はしばらく無心で歩き続けた。

それで、しばらくした後にはびたりと足を止める。さて――

「――ああもう、シフ！　なんで私の料理食べちゃうかな！　私まだ一口も食べてなかったんだけど?!」

くるりと振り返ると、シロガネにそうやって泣きついた。

だってだって！　シロガネが美味しそうに食べるから期待してたのに！

なに、いじめなの？　私いじめられてるの?!

「落ち着いて下さい主様。またいずれ訪れて食べればいいでしょう」

「……それなんだけどさ？ ドサクサに紛れて出てきちゃったから、私お代払ってない……と言うより、ここの通貨持ってない……」

「ふむ、なるほど……では、お任せ下さい主様。そこらのものから少しばかり失敬して……」

「いやダメだつて！ それは犯罪、泥棒です！」

本当にシロガネつて考え方が物騒過ぎないかな！

いつか、目を離れた隙にとんでもないことをやらかしそうで私は怖いよ……  
なんて考えていたら、突然シロガネが刀を抜き放つて後を振り返る。  
つて、だから無闇に武器を抜くのは禁止だつてば！

《宿屋にあつた気配のうちの一つが、追いかけてきたみたいだね》

ま、まさか宿屋のおばちゃんが……？

まずい、さつきと此処から逃げないと！

《あー、うん。大丈夫だからすこし落ち着こうか……》

へ？ 大丈夫？

なんて思ったけど、その「妄想」の説明と同時に、建物の影から一人の男が姿を現した。

敵意がないのを示すためか、両手を少しあげてる。

「貴様、さつきの所にいたな。何のようだ？」

「ちよつとその女の子に用があつてね……良いかい？」

「えつと、なにか……？ お、お金は持ってないんですごめんなさい！」

「いや、別にカツアゲにしきたわけじゃなくてだな……さつきの今で聞き難いんだが、君は冒険者に興味はないかな？」

「はあ……興味があるというか、一応冒険者登録しようと思ってここまで来たけど」

私がそう返すと、男は驚いたような顔をした後嬉しそうに顔を綻ばせた。  
うーん？ どういうことだろう……？

私の訝しげな顔をみて思い出したのか、男は慌てて自己紹介を始めた。

「おっと、こりや失礼。俺の名はフューズ、ここの支部の支部長ギルマスを務めてるんだ」

ギルマス……？ ギルドマスターって事だよな。  
ってことは、さっきの質問ってもしかして……

「君さえ良ければ、俺の力でBランクまで取り立てることも出来る。どうだ？」

やっぱりそうだ！ なんと、ギルマスの目に止まって直スカウトに来てくれたらしい。  
い。

Bランクまで取り立ててくれるって言うてるけど、これって相当おいしい話なんじゃ

ないだろうか。

本当だったら冒険者になるためになんかの試験とか有るんだろうし、それを一気にBランクまでなんて、そんな美味しい話があり得るとは思えない。

これは、確実に何かの裏があるんだろうなあ。

「良いの？ 力もわからないような相手をそんなにランク上げちゃって」

「力については申し分ない。先程の重圧は見事なものだった、Bランクでも足りないくらいだからな」

「ふーん……じゃ、わざわざスカウトしてくれた理由を教えてください。何か裏があるんでしょ」

「うぐ、それは……」

「主様の質問に答えろ。隠し事をしたら斬るからな」

「はいシロガネは少し黙っててねー！」

「わかった、話すから落ち着いてくれ……実はな、暴風竜が消滅して以来魔物の大量発生が危惧されているんだが、人手が足りていないんだ。厄介な魔物が出現したら下手に低ランクの冒険者を送り込むわけにもいかん」

「だから、ある程度力のある私達に即戦力になれ、つてことだね？」

「まあ、ざっくり言うтそういうことだな」

冒険者つて意外と大変なんだ……なんか、もつと自由気ままなものなのかと思つてた。

でもまあ、それで冒険者になるのを止めるつもりはないけどね。

それに、シロガネの所を襲つたオークの集団つて言うのが、フューズさんの言う魔物の大量発生つて奴かもしれないし。

「それだけで冒険者になれるんだつたら、それで良いよ。どうせ今のところ目標とかも

ないしね」

「そうか……いや、助かる。君とシロガネの二人がいれば、相当の戦力強化に繋がるしな」

「あ、そうそう。魔物の大量発生是件だけど、なんかオークが凄い量ジュラの森にいたよ。私も見たし、シロガネの集落襲って壊滅させたのもそのオークみたいだよ」

「オークの大量発生……？ 何故奴らが群れる……というか待て、集落が壊滅だと？ そんな連絡は受けてないぞ？」

「え、そりやそうでしょ。何でここに連絡がくるの？」

「いや、何でつてなあ……」

どうにも話がかみ合ってる気がしない。

シロガネの集落が壊滅したところで、何でフューズさんの所に連絡がくると思ったん



だろう？

あれかな、密かにオーガの里を見はってたからとか？

なんにせよ、フューズさんはなにか勘違いして、つて……

あー、私はオーガとして見てるからなんとも思わないけど、シロガネってパツと見普通の人間っぽいなあ……

髪で角が完全に隠れちゃってるし、野蛮な性格さえ隠せばこれは人間として通用するね、うん。

取り敢えず、フューズさんの誤解を解いておこう。

「あーっと、シロガネは人間じゃないよ？　一応オーガだから」

「……は？　いや、オーガ……？」

「主様の仰るとおりだ。私はオーガ、主様に名を頂いて今の姿になったがな」

「ちよ、名前つて……はああああー……?!」

愕然とした表情で叫び始めたフューズさん。

え？ 私変なこと言った……？

この世界に新たな生を受けた少女は、同時期に産み落とされた男とにたような道をたどっていく。

この二人が初の邂逅を果たすのは、一人の魔王の誕生を巡る戦場。

第三の勢力が加わることによってより一層荒れる戦場にて、異世界からの転生者達は何を見るのか。

今はまだ、歯車が回り始めただけに過ぎない。

あとがきに転生する？

✓ Yes

No

## 奇妙な少女

「えつと、落ち着いたフューズさん？」

「落ち着けるものかよ……ただまあ、そんなことを考えるより先決なのはオークの群れだ。オークがそんなに多数群れること自体異例なのに、オーガに打ち勝つなんて……」

「そんなにおかしいことなの？」

「おかしいどころの話じゃない。そもそも戦いを挑もうとすらしないんだ」

「うーん……あ、そうだ。関係あるかは分からないけど、私達が倒した個体をほかの個体が食べてたりしたよ」

「食べた……？」

「あと……あれかな？ 族長を斬り殺したっていう黒い鎧着た——」

「ええ、奴は別格の強さを持っていました。もしかしたら固有名持ちネー ム ドかもしれません」

「固有名持ちネー ム ドか……だが、仮にそうだとしてもそれだけでほかのオークが従うものか？  
他になにかあるんじゃない？」

フューズさんは世話しなく表情を変えては、頭を抱えながらぶつぶつとつぶやき始める。

正直端から見たら近寄りたくない人に見えるんだけど、こうなった責任の一端は私たちにもあるみたいだから何とも言い難い。

しばらくその状態が続いたけど、大きなため息を一つ落としてフューズさんは顔を上げた。

「情報が少なすぎて結論付けには至らないが、無いよりは断然ました。礼を言う」

「この後どうするつもりなの？」

「そうだな、森に調査団を派遣してもう少し情報を集めてからでないと、行動は起こせんしな……」

「あ、なら森の調査は請け負うよ。さつきも言ったけど、今は特にやることもやりたいこともないし」

「そうか、そうしてくれれば助かる。だが、無茶はするんじゃないぞ。生半可なことでもうにかなりそうもないが、万一ということもあるしな」

冒険者になるっていう目標はフューズさんにBランクまで取り立ててもらえたことで達成できたし、オークの件に関してはシロガネの敵討ちがあるから私達が調査するのが妥当だね。

私はフューズさんの言葉に軽く頷くと、シロガネと一緒にもう一度ジユラの森へ行くことにした。



戻つてきましたジユラの森。

と言つても、そんなに距離を歩いた訳じやなくてあそこから此処までは丸一日歩いた程度だ。

……あれ？　なんか距離感狂つてきてる？　……まあいいや。

取り敢えず、きて早々出くわしたトラブルに対処しないと。

「キシヤアアアアアアアツッ！」

蟻、それももの凄い大きな蟻がなにかを追いかけてる。

なんとなくそれを眺めていたら、その追われてる何かがこつちに気が付いたみたいでこつちに向けて逃げてきたから、やむなく蟻の相手をする事になった。

数は、ひい、ふう、みい……四匹だけかな？

正直そんなに強そうには見えないんだけど、そのところどうですか「妄想」しんゆうさん？

《ジャイアントアント巨大妖蟻だね。かなり力が強いから、接近されたら厄介だけど……まあ、君ならどうにでもなるよ》

つまり、接近される前に倒せばいいと。よし、なら「黒雲招来」で……

《待つて待つて！ この状況で「黒雲招来」を撃つたら追いかけてる子まで巻き込むから！》

あ、そういえばあれかなりの範囲消し飛ばしてたもんね……

となると、接近するしかないのかな？

「黒雲招来」の範囲を絞って、なんとか周りを巻き込まないようにしたいんだけど。

『確認しました。エクストラスキル「天啓」を獲得しました』

どうやら、私の望みや状況を考慮して新しいスキルを作ってくれたらしい。何これ凄  
い便利。

……それで、このスキルってどういうの？

《「黒雲招来」の範囲を絞るっていう、君の望みをそのまま映したスキルだと思うよ。試しに撃つてみたらどうかかな?》

?  
それで追いかけてる子ごと吹き飛ばしちやったりしたら、元も子もなくな……

《大丈夫だって。ほらほら、発射用意》

うーん、まあいいかなあ……

一緒に吹き飛ばしちやったりしたらごめんね?

私はそう心の中で先に謝ると、ジャイアントアント巨大妖蟻に向けて手に入れたばかりのスキル「天啓」を放った。

ジャイアントアント巨大妖蟻達の頭の上に黒雲が立ちこめたかと思うと、そこから十字剣と思わしき巨大な剣が射出されて、ジャイアントアント巨大妖蟻達を地面へと縫いつける。

更に、追い討ちのように黒雲から剣に向けて雷が落とされ、ジャイアントアント巨大妖蟻四匹を一瞬で真つ黒焦げにしてしまった。



いやあ、それにしても……

「火力、アホみたいに高いなあ……」

周囲に被害が広がらない程度なら、もっと弱いスキルになると思っていたのに実際にはこの一撃必殺具合。

私は一体なにを倒そうとしているんだろうか……

そんなことを考えていたら、唐突に腹部に鈍い衝撃が走った。

何事かと思つて見てみたら、ジャイアントアント巨大妖蟻に追われていたらしき子供が私のお腹の辺りに抱きついていた。

「いやあ、助かりましたです！　ありがとうございます！　お姉さん！」

てつきり泣き出すものかと思つたら、笑顔さえ浮かべてそう言う子供。

みた感じ安堵の笑みと言うよりはどことなく楽しそうなんだけど、よくあんなのに追いかけて平気でいられるね、この子。

「別に良いよ。そんなことより、怪我とか無い？ 大丈夫？」

「大丈夫です。ちよつと逃げてる最中に足が変な方向にねじ曲がりそうになりましたですが、気合いで何とかなつたです！」

「ならないよ！ 普通ならないよ！」

「ふ、私のことを甘く見ていると痛い目遭うですよ？」

「それ何のキャラ?!」

突然変な方向に話がぶれそうになる。

一体この子はどこでこんなキャラを身につけてきたんだろう……？

ま、まあいいや。それはひとまず置いておこう。

「本当に怪我とかないんだね？ 痛むところとか無理してるところとか」

「あ、実を言うと件の右足がもげるように痛いです」

「え、あれ冗談じゃなかったの?!」

「ほら、甘く見るから痛い目にあうです」

「今痛い目に遭ってるの君だからね?!」

天然か狙ってかはわからないけど、ぼけ倒し始める子供に思わず全力で突っ込みながら傷の具合を確かめる。

「とうか何この子? 何でこんなにボケ慣れてるの? 素なの?」

まあ、どうやら本当に逃げている最中に足を変な方向に曲げて痛めてしまったらしい。

その足で逃げ切れたことにも驚きだけど、なんでこの子は痛がったりしないんだろうか。いや、痛がりはしていたけどさ。

あんな程度で済ませられる痛みとはとうてい思えない。関節部は真っ赤に膨れあがっているし、熱もすごい持っている。

今は取り敢えず、治療してあげることだけに専念を――

「ところで、お姉さんは傷を見てどうするつもりなんです？ 見たところ医療道具を持つてるわけでもなさそうですし、かと言って僧侶にも見えませんが」

――そういえばそうだね?!

しまった、特に考えずに話を進めてたけど私回復魔法使えないじゃん?!

……えっと、「妄想<sup>しんゆう</sup>」さん。今ほんと覚えられたりは。

《魔法となると、最低一回は見ないと覚えられないかなあ。残念だけど》

流石にそこまで万能じゃなかった!

え、それじゃこの状況どうしよう。なんか凄い不思議そうな目で見られてるし!

「あー、うんちよつと待って。今方法考えてるからちよつと待って」

「無計画だったんです……?」

「無計画でごめんなさい！」

やめて、あきれたような視線を向けなくて！ 自分でもあきれてるから！

うー、でも回復魔法は使えないし、使える知り合いもないし。

仕方が無い……この子を家まで送って、後の処置は家の人に丸投げしよう。

私が下手に何かするより、そっちの方が良いよね、うん。

「あー、えっと、ごめんね？ 私じゃ治せそうに無いから、せめて家まで送ってあげる」

「まあ、何となくそうなんじゃないかとは思ってたです……」

「主様にも出来ないことも有るでしょう。お気になさることは有りませんよ」

うう、耳が痛い。特にシロガネの私に気を遣っているのが丸わかりな言葉が、ザツクザツクと突き刺さってくる。

はあ、よく考えずに行動するものじゃ無いね全く……

「えっと、それじゃ送ってあげるよ。君は……」

「ふふん、聞いて驚くです。私はスーパーコボルドにして名を——」

「あー、コボルドだったんだ。確かにふもふしてそうだし、可愛いね」

「コボルドじゃないです！ スーパー！ す！ う！ ぱ！ あ！ です！」

「うんうん、それで君の家はどこなの？」

「聞いちやいないです……えっと、私は違うですが一応仲間は行商人をやっているから、決まった場所に長居するわけじゃないです。ただ、今からならリザードマンの集落のそばにいますと思うです」

「リザードマンか……それって結構距離有るのかな？」

「それなりに離れてるですから、無理に送って貰わなくても大丈夫です。私は自分できっとかかしてやるですから」

「あー、ううん。そんな状態で放っておけないし、ちゃんと送るよ」

治療するつもりだったのに出来なかったし、一度送るって言ったんだからせめて言葉には責任を持ちたい。

持ちたい……んだけど。

「いくら主様でも、それは流石に……私にお任せください」

「いやでも、私が送るって行ったんだから私が責任を持たないと……」

「ですが、それでは最早背負うと言うより引き摺っているだけです。やはりここは、私にお任せください」

そう、忘れられているかもしれないけど、異世界この世界に転生したらしい私の体は、見た

目十代にも満たない幼さなのである。

詰まるどころ、自称スパー<sup>こ</sup>パーコボルド<sup>子</sup>を背負うには圧倒的に背が足りないのだ。  
い、いや？　一応私の方が高いからね？

《コボルドは成人しても人間の幼子程度の大きさだから、張り合ってもむなしくなるだけだよ？》

その情報を聞かなければむなしくなることも無かったと思うんだけどな！

全く、なんで「妄想<sup>しんゆう</sup>」はこうも無駄に的確な情報を仕入れてくるんだか……

まあ実際問題、私が背負うことは不可能みだから諦めてシロガネに代わりに運んでもらうことにした。

本人が嬉しそうに引き受けてくれたのが唯一幸いだったりする。

「そういうえば、君はなんで巨大妖蟻<sup>ジャイアントアント</sup>に追われてたの？」

道中何も無いと退屈だろうと思って、ふと疑問に思ったことを聞いてみた。

行商人って、そんなに危険な仕事なのかな？



「聞きたいです？」

「うん。どうせ手持ち無沙汰だし、得られる情報なら集めておきたいなって」

「……後悔しないですね？」

「え、ちよつと待って。それってどういう……」

「あれは雨の降る日のことだったです——」

「って聞いてないし！」



コボルド、またはコボルトは全体的に犬と似た姿を持つ、ランクの低い魔物である。その起源はゴブリンと同一ともされていて、基本的には魔王の手先となる下つ端として描かれていることも多い。

ただ、ランクが低いために戦闘能力はお世辞にも高いとはいえない。

この世界もその例に漏れず、ごく一部のものを除いて戦える者は殆ど居ないらしい。

「森は危険で一杯ですから、行商人をやっている者以外は基本的に縄張りから出たりしないうです。幸い私達は強面では無いから、人間たちとも取引をしてなんとか生活して居ます」

で、この子はその行商人たちの護衛として森の中を歩いていたらしい。

ただ、ちよつとした手違いによつて巨大妖蟻ジャイアントアントの縄張りジャイアントアントに進入してしまい、戦えない商人達を逃がすために巨大妖蟻をおびき寄せていたところ、私と遭遇したということだった。

「その後の下りは知っているとおりです。おねーさんを守るために、私が獅子奮迅の活躍をしたです」

「うーん、その下りはこの世界線の話じゃないんじゃないかなあ……というか、雨の降る日関係なくない？」

「おねーさん、わかってないです。大事なのは雰囲気です」

いや、そんなやれやれみたいにため息吐かれても困るんだけど……

それに、しれっと巨大妖蟻<sup>ジャイアントアント</sup>を倒した功績を自分のものにするとは、油断も隙もない。

まあ、この子は仲間を助けるために自分を囿にしたわけだし、別に手柄云々は全然気にしてはいないんだけどね。

そんな取り留めの無い会話をしつつ一週間がたつて、目的の場所まで約半分の所まで来たときに、私達の進んでいる方向からざわりと嫌な気配が漂ってきた。

《前方に大きな魔素が複数と小さな魔素がこれまた複数感知できたよ。普通に考えれば、力のある魔物とその取り巻きってところかな》

「妄想」<sup>しんゆう</sup>がそう報告してくれるけど、どうにも嫌な予感がする。

それで、気配遮断をどうにかして皆に適用してそつと近づけないものかと悩んでいたら、「創造世界」スキルクリエイトによつてまた便利なスキルが誕生することになった。

『エクストラスキル「位相ずらし」を獲得しました。重複スキルである「気配遮断」及び「情報拡散」は消滅します』

なんとこの「位相ずらし」、「情報拡散」の能力に加えて物理的なもの以外の全ての影響を無効化することが出来るらしい。

例えば、「位相ずらし」を使っている間はどんなに騒ごうとも他人に声が届くことが無く、姿を見えなくすることも出来るらしい。

それに、好きな位置に任意の指向性を持たせて使うことが出来るから、他人に声だけ聞こえなくさせることも可能なわけだ。

流石「創造世界」スキルクリエイト、私の想像の上を行く性能を持つてるよね。たまに斜め上に行くのが玉に瑕だけだ。

そんなわけで、私達はひっそりと気配の発生源へと向かった。

態々嫌な予感がする方へ行つたのは、感じた気配の数が多かつたために魔物の大量発生と何か関係があるとふんだからなんだけど……

「あれ？ コボルドと……敵つい鎧を着た、オーク……？」

事態は、もう少しややこしいみたい。

あとがきに転生する？

✓ Yes

No

## VS 豚頭騎士団

目の前では丁度、厳つい全身鋼鎧フルプレートアーマーに身を包んだオークの一団がゴボルド達を脅している最中だった。

彼らの要求を纏めると、ありったけの食料を持って傘下に加われ、ゴ布林など交流のある種族達へ説得を行い仲間とせよ、そうすれば奴隷として命だけは助けてやる……  
と言うことらしい。

いやいや、何を仰るうさぎさん。うさぎさんって言うか豚さんだけど。

やけに上から目線で命令しているようだけど、その実そこまで力を持っているようには見えない。

鎧を着ていることと、相手が戦えないのを知っていて増長しているのかしらん。

「それで、如何しますかミク様？ 相手は雑魚ばかりですし、一息に殺つてしまいましよ  
うか」

「うーん……そうしても良いと思うけど、無駄に偉そうにしてるってことはそれなりに

立場がある個体だと思っただよね。だから、一人は生かしておこうと思っただけだ」

私の提案に、首肯を返しつつ刀を抜き放つシロガネ。本当に生け捕りにするつもりあるのかな……心配だし、生け捕りの方は私がやろつと。

そう考えてスキルを解除しようとしたとき、コボルドの子が慌てたような声を漏らした。

「ちよ、ちよつと待つです。まさかとは思いますが、二人だけで戦う気です？ 向こうは十人ほど居るですよ?!」

「何人居ようがああの程度なら問題ない。私一人でも問題ないくらいだ」

「お、お姉さんは……ッ」

「シロガネに任せちゃうとうっかり全員殺しちゃいそうだから、一人は確実に私が生け捕りにするよ」

「そういう問題じゃ……なんで二人共そんなに余裕そうなんです?!

寧ろ君がやけに余裕なさそうに見えるんだけどなあ……」

大体、あれくらいの強さだったら洞窟の中にいた魔物のほうが断然強かつたし、数もゴロゴロ……は流石に合わなかつたけど、それでもまだ少ないほうだ。

まあ、行商人達が戦えないんじゃないや危険はなるべく回避してきたんだろうし、実戦経験が少ないから余分に怯えちゃってるのかもね。

「それじゃ任せたまよ、シロガネ。私はあの一番偉そうな奴捕まえてくるから。えっと、シフは……あれ? シフは?」

「それでしたら、今しがた奴らの方へと駆けて行きましたが……」

「なんでそれを黙って見送っちゃうかな?! あー、もう取り敢えず行くよ!」

そうだった、シフもかなり厄介な存在なのに完全に忘れてた。

まあ、シフの場合遊びが優先になるだろうから、生け捕りにせず皆殺し、とはなら



ないんだらうけど……

私は万が一を考えて、足早に目標の方へと駆け出した。勢い余って、なんてことになったら折角情報が得られるかもしれないのに水の泡になってしまう。

「な、何だ貴様ら！ どこから現れた！」

スキルを解除したことでこちらに気がついた敵の一人が、戸惑いつつも剣を抜き放とうとする。

けれど、それに先んじてシフがそのオークへと牙を剥いた。

流石に全身フルプレートアーマー鋼鎧は硬かったのか、オークに傷を負わせることは出来なかったようだけど、金属特有の光沢のある表面にはくつきりとシフの歯型が刻まれていた。

って、え、うそ歯型付いてるの？ それってつまり、シフさんは金属よりも硬い歯をお持ちで。へ、へえ……

……あんまり、深く考えないほうが良さそうだなあ。

まあ取り敢えず、取り巻きははしやぎ回ってるシフと凄まじい剣技で敵を翻弄しているシロガネに任せて、私はわたしの仕事をしよう。

竜殺しの剣を片手に、恐らく司令官であろう周囲に指示を飛ばしているオークへと近

づいていく。

そのことに気がついたオークは私を一瞥し、小さく鼻を鳴らすとそのまま――

「――つて、ちよつと無視しないでもらえるかな?!」

「黙っている、ガキが。今貴様の相手をしている暇はない」

「いや、ほら。仮にも武器を持って近づいてきてるわけだし、あいつらの仲間だ――とかは思わないの?」

「貴様のようなガキが敵であろうと、何ら脅威を覚えんな」

「そ、そつか……」

見た目か、見た目がいけないのか。

まあ、見た目幼女な奴が剣持つてたつてそりや怖くはないだろうけどさ……もうちよつとこう、反応してくれても良いんじゃないかな……?」

「貴様、主様に……コロス」

「シロガネストーツ！ ダメだつて！ 生け捕りにするんだから殺しちやダメだから！」

そつちはそつちで反応しないでいいから！ もう、なんだかやる気そがれるなあ……でも、その言葉に反応したのか漸くオークがこつちをむいてくれた。やだ、なんか少し嬉しい。

「生け捕りだと……？ 随分と舐めた事を言ってくれるな。我ら<sup>オークナイツ</sup>豚頭騎士団の精鋭たる10人を於いて、生きて帰れると思わないことだな……」

「あー、うん。多分九割方生きて帰れないんじゃないかな？」

「ほう、無謀を承知で挑んでくるか。ならば我らが糧としてやろう。我らのさらなる躍進の基礎となるが良い！」

あ、九割方っていうのはそっちの話で……と訂正するまもなく、オークが剣を抜きつつ突進してくる。

やむなく私もアスカロンを手に応戦を始めたんだけど、正直言つてあまり分はよろしくない。

オークの振るう剣は、鎧を着ているのと慣れていないのとで凄まじくキレが悪く、難なくいなすことが出来る。

出来るんだけど、こちらからもフルプレートアーマー全身鋼鎧を着るオークに有効打が与えられていないのだ。

アスカロンは細剣に分類されるような刀身をしていて、突きに特化した形になっている。

だから、「竜を屠る」という因果を絡ませなければ、ただの打たれ弱い細剣になってしまうわけだ。

まあ、打たれ弱いって言ってもそんじよそこの武器じゃ破壊できなさそうな強度は持つてるけどね？

そんなわけで千日手となってしまった私は、取り敢えず相手が疲れるのを待つことにしたんだけど……

「どうした！ 攻撃をしなければ勝てんぞ！」

いなしてもいなしても全然怯む気配を見せないオークに、段々と苦笑いがこみ上げてくる。

おかしいな、思い切り重心が崩れるようにしてるから、相当体力に響くはずなんだけどな……

ええい、オーク共の体力は化物か！ っっておもわず叫びたくなってしまふ。

「我ら豚頭騎士団オークナイツを甘く見たな！」

烈帛とともに振り下ろされた一際力のこもった剣を、敢えてアスカロンで受け止めて反動で距離を開ける。

そろそろかな、とちらりと脇を見てみれば、とつくに終わっていたのかシフとシロガネが楽しそうに私達の戦闘を鑑賞していた。

……訂正、シフは楽しそうに観戦していた。シロガネは……うん。視線で人が殺せなくてよかったと言うしかない。

「よそ見か？ いい度胸——」

形勢有利と見たのかやたらと喋るオークは、釣られたように私の見ている方向へと視線をずらす。

その瞬間、今まで浮かべていた余裕の笑みに亀裂が入ったのを確かに感じた。

……まあ、それが味方が全滅していることに対してなのか、シロガネの視線に対してなのかはわからないけど。

「えっと、<sup>オークナイツ</sup>豚頭騎士団がなんだっけ？」

「ば、ばかな……ッ 我らは精鋭だぞ！ 数でも優っていた、それなのになぜ……！」

「なぜって言われても、私達が強かったからだとしか……！」

「嘘をつくな！ その程度の魔素で我らよりも地力が上だと?! 認められるか！」

泡を吹いてそう叫ぶオークに、私は内心してやったりとほくそ笑んだ。

私がやったことは単純明快。新しく覚えた「位相ずらし」で私達から流れ出る魔素を小さく見えるように偽装し、敵の油断を誘ったのだ。

まあ、逃げられちゃっても厄介だしね？　これはいわゆる頭脳戦であって、ズルとかそういうのでは断じてありません。

《まあ、スキルクリエイト創造世界とか完全にズルだけどね》

ズルじゃないもん！　たまたまそういう力を持つてたっただけで、ズルじゃないもん！

……ズルじゃないよね？　うん、違うはずだ。よし、よかった。

「それで、私としては大人しく投降してくれるとすごく嬉しいんだけど。そうしたほうが無駄な体力使わないしき」

「投降、だと……？」

「そうそう。悪いようにはしないから」

私は、という条件がつくけど。だって、シロガネが何かしそうななんでもん。流石にそこまで責任取れないし……

どうかな？ と尋ねてみても、帰ってくるのはよくわからないつぶやきだけ。

うーん？ どうしたんだろ……

「……………くひゅ、ぐははははははー 言ったぞ、俺は確かに……………」

え、怖い怖い。なんでいきなり笑い出してるの？

まさかとは思うけど、これからされる仕打ちに心躍ってるのか？ う、うわー……

「豚頭騎士団オーククナイツを舐めるなど……………言っただあアアアア！」

突然、オークの全身から黒いヘドロのようなものが飛び出し、周囲に拡散する。

慌てて距離を取ると、そのヘドロはかつてオークであったのだろう肉塊を飲み込み、消化していった。



それにしても、原型が留まってないってシロガネさんやり過ぎじゃ……  
 一体どれだけ憎しみをぶつけたんだろう。というよりも、どうやって刀であそこまでぐちゃぐちゃに出来るんだろ……

「は、はは……あ、はハハハ！ どウダ！ これが、我々の底力ダ！」

どうでもいいことを考えてたらいつの間にかオークが何かをやってたみたい。

感じる魔素の量も数倍に膨れ上がり、テンベストサルベント嵐 蛇よりも強そうなレベルにはなった。

確かに、豚頭騎士団オークナイツというのすごい集団の集まりかもしれない。

だけど……

「ゴロス。ゴロスコロズゴロズ！ ……ぎざまら全員ゴロして——や……？」

私が「位相ずらし」を完全に解除した瞬間、そのオークは呆けたような顔をした。

いや、まあ無理は無いと思うけどね。だってこの四人の中で一番弱い、確実にあのオークだし。

なんか殺すだの何だの言ってるみたいだけど、そろそろシロガネの我慢の限界が来る

頃だと思う。

だから、さっさと降伏を――

「貴様……そろそろその薄汚い口を閉じろ」

「ルツ――」

いつの間にかオークの背後に立っていたシロガネが、鞘からの一閃でオークの上半身を跡形もなく消し飛ばす。

って、遅かったあああああー?!

ちよ、情報源だつて言つたじゃん！　なんでそう躊躇なく殺しちゃうの?!

それに、一振りで上半身消し飛ばすって一体何があつたの?!　いくら何でも怒り過ぎじゃないかなつ！

はあ、はあ……ま、まあ半ば以上予想してたことだし、過ぎたことは忘れよう……

どうやら死体を吸収して強くなる能力も持つてるみたいだし、こんなのがいっぱいいたら流石に厄介だなあ……

「申し訳ありません、主様。言いつけを破ってしまい……」

「謝るくらいだったなら最初からやらないでほしかったんだけど……まあ、それはもうい  
らぬ」

そう、多少の失敗くらいで一々目くらまらなんて立てないのだ。多少の……多少かな、  
これ？ すっごい大きな失敗だと思っただけだ。

あーでも、あのオークが簡単に口を割るとも考えにくかったし、多少って言ったたら多  
少か。どっちにしろシロガネが殺してたんだろうし。

「それで、戦ってみてどうだった？」

「口ほどにもないですね。これだけならばたとえ万と居ようと恐れるに値しません」

「だよねー……結局何だったんだろ、今の」

「っていうか、ミク様ミク様！ 全然遊び足りないんですけど！」

「後でいっぱい遊ばせてあげるから、今はおとなしくしてて……」

シロガネの総評を聞きつつ、シフをなだめる。遊び足りないからといって、何かしでかされても困るもん。

「あ、そうだ。そういえばさつきオークたちに脅されてたコボルド達がいたよね。今どこにいるかな？ 彼らならなにか知ってそうだけど」

「彼らなら戦闘の余波に巻きこまれないよう、少しだけ避難させています。ご案内しましょう」

シロガネに案内された場所へ来てみると、数人のコボルドが身を寄せあつて震えていた。

私達を見てビクリと身を震わせたけど、私達だと気がついたのかそのうちの一人が恐る恐ると言った体で声をかけてきた。

「えっと、どうなったです……？　なんだか立て続けに凄まじい力を感じたのですが……」

「いや、ちよつと待って。なんで君も一緒に避難してるの？」

「あんな危ないところに居られるわけがないです！　巻き込まれたら余波だけで死んじゃうです！」

「そ、そうかなあ……まあ、オークは全員倒したよ。それで、あいつらは何者なのかなって話を聞きに来ただけだよ」

視線を脅されていたコボルド達へと向けると、それぞれが目を合わせたかと思うと口々に訴えかけてきた。

「や、奴らは私たちにに服従を言いつけてきたんです！」

「オークロードが！　オークロードがつ！」

「彼の伝説が、森に牙を剥いたんです！」

「オークロード、オークロードが！」

「力ある方よ、どうか我々をお救い下さい……」

「オークロード！ オークロード！」

「「「オーク！ ロード！ オーク！ ロード！」」」

なんだろう、コボルドってこんなものばかりなんだろうか。

オークロードがっているのは理解できたんだけど、オークロードって言うのがそもそもわからないし、なんで途中からオークロードの合唱になるんだろう……

それに、最後のオークロードコールではちやっかりシフも混じっていた。何やつてるこの子。

痛む頭を押さえつつ、私はコボルドたちにオークロードについて聞いてみた。

豚頭帝は、伝説ともいわれているオークの進化亜種だそうだ。

その力は敵対するものを恐怖に陥れ、逆に味方に対しては恐怖の感情を喰らうのだという。

眼に入るものすべてをむさぼりつくし、枯れ果てるまで止まらない災厄の権化。それがオークロードだというのだ。

「オークロードって、シロガネの里を襲った黒い鎧を着た奴のことなの？」

「いえ、オークロードともなればあんな程度では済まなかったでしょう。恐らく、私も生きて逃げ延びることは出来なかったと思います」

「ふーん……で、そのオークロードって今どのあたりにいるの？」

「我々が行くよう伝えられた場所はこの先です……恐らく、リザードマンの集落を目指しているものかと」

「この先かあ……うん、よし。それじゃ行こっか」

「で、では……？」

「倒してきてあげるよ、そのオークロード。シロガネの敵討ちもかねて、ね」

あとがきに転生する？

＼ Yes

No



## 突撃、隣の戦場模様

土を蹴立て、木々を躲しながら私達はかなりのスピードでリザードマンの集落を目指していた。

私達、と言っても実際に走ってるのはカイだけなんだけどね。

「ミック様、お急ぎならば私の背へ。一人二人乗せたところで、私の足が鈍ることは有りません」

私がオークロードを倒すと決めた直後、カイが影からひよっこり顔を出してそんなことを言ってきた。

そんなに足速いの？ とカイに訪ねてみたら、「この程度の距離なら、二日もかかりません」と自信満々に答えてくれた。

その視線が私のやや後方を向いていて、その方向から悔しげな歯軋りが聞こえたのは気のせいだと思う。

私が小さいからか、カイの背中の上には私が乗ってもまだ人が乗れるスペースが空い

ていて、シロガネともう一人が乗っても問題なくスピードが出せるみたいだ。

高速で後ろに流れていく木々を横目で見つつ、私はカイに便乗しているもう一人の人物へと話しかけた。

「で、君は付いてきて良かったの？ 多分、さつきよりも激しい戦闘になると思うけど」

「さ、さつきは突然のことですびっくりしただけです！ スーパーコボルドになった私に、最早恐怖の二文字はなしです！」

「その割にはぶるぶる震えてるけど……」

「武者震いです！」

そっか、武者震いか。なら何も問題はないね。

最初付いてこようとしたときには無理矢理にでも置いていこうとしたんだけど、本人が折れないのとシロガネまでもが連れて行ったらどうだと提案してきたから仕方なく連れてきたんだ。

怖いんだっいたらやっぱり置いてきた方が良かったかなと思っただけど、本人が武者震いって言うなら武者震いなんだろう。

「そういえば、なんで付いてこようと思っただの？ 別に心配しなくても、オークロードはちゃんと倒してあげるよ？」

「そ、そうじゃないです……ええと……」

答えにくい事だったのか、もごもごと口籠もってしまふコボルド。

それにしても、なんで私をちらちら見てるんだろう。別に言いたいことがあるなら聞くのに……

しばらくその状態が続いたんだけど、やがてガバツと顔を上げると私の目を真っ直ぐ見ながら思い切ったように言葉を漏らした。

「私は……私はもう只のコボルドじゃないです。スーパーコボルドになった今、いつまでも弱いままじゃ居られないです！ だから、お姉さん達の戦いを今度はしっかり見て、少しでも何か分かったら……そう思っただです」

この子はこの子なりに、いろいろ考えて起こした行動だったみたい。

そっか……スーパーコボルドになったからいつまでも弱いままじゃ居られない、か――

「――つて言ってもコボルドなんだから、あんまり無理はしないようにね？」

「だからッ！　私はコボルドじゃなくて！　スーパーコボルドですッ！」

突然なにかに激高したように叫ぶと、バツと立ち上がるコボルドちゃん。

でもね、今立ったら……

「おおう、です?!」

風の抵抗をもろに受けて後ろに吹き飛びそうになるのを、後ろのシロガネが難なくキヤッチしてくれた。

……キヤッチしてくれたのは良いんだけど、そろそろカイの背中に戻してあげても良

いんじゃないかな？ 風圧で顔が凄いことになってるし。

「カイもカイで、なんでこのタイミングでスピードあげるかな。なに、二人とも怒ってらっしゃる？」

「えっと、ナイスキャッチシロガネ。そのまま下ろしてあげてくれない？」

「地面にですか？」

「違うよ?! 今地面に降ろしたら大惨事だからね?! そうじゃなくて、カイの背中に

……」

「う、腕がー?! 腕がちぎれるです?! ちょ、そんなに強く握ったら……ひぎい、ですう

?!」

「すみません主様、雑音が酷くて聞き取れませんでした。このまま地面に降ろせば良いんですね？」

「シロガネは何に怒ってるの?! 地面じゃなくてカイの背中だってば!」

分かりました、と呟いて仕方なしと言った体でコボルドをカイの背中に下ろすシロガネ。

わからない。何が気に障ったのか全然分からないよシロガネ……

シロガネ本人に理由を聞くのは何か怖かったから、私はただよしよしとコボルドの背中をなでてあげることしか出来なかった。



最初は、何の音なのか分からなかった。

謎の一団の襲撃によって押していたはずのリザードマン達に押し返されそうになってから、おかしな音が連続していた為に感覚が麻痺していたのだ。

近付くだけで切り払われるうえに、そもそも近付きさえしなくとも死をもたらし続ける奴まで居る。

統率は崩れ、念話が混線し、今置かれている状況が分からない。

そんな中で、一匹のオークが不思議な光景を見た。

一際大きな牙狼族と、それに跨がる人間の子供とコボルド。

なぜこんな所に？ そんな思いは浮かばず、ただ餌が来たと歓喜するオーク。

思考を捨て、恐怖を捨て、只欲望のままに餌へと突き進もうとしたときに聞こえた音。

最初は、何の音なのか分からなかった。

しかし、その音を聞くとやけに胸がざわつく。

捨てたはずの恐怖が、悲鳴を上げて暴れている。

ふと、上を見上げたオークはその音の正体を悟った。

頭上に広がるは、厚き暗雲。

その中に瞬くは、「神成る力」のその一端。

「……………ア」

そして降り注ぐは、度を越えたネガイヨクボウを持ったものを断罪する聖なる光。

己の過ちを悟る時間すら与えられず、オークの視界は真っ白に染め上げられた。



音が静まるのを待つてから、私はそつと閉じていた目を開けた。

目の前に広がるのは先程みたオークの群れではなく、所々黒く焦げた真つさらな地面。

よし、無事オークの邪魔を排除できたようだ。

「ぬおおおおおー……め、めがあツです!!」

……約一名無事じゃないけど、まあ私が無事だからよしとしよう!

というか、ちゃんと撃つ前に目と耳は塞ぐように言っただけだな……

ゴロゴロとコボルドが地面を転がっていると、シロガネがひよいと持ち上げた。

そしてそのまま肩に引っ掛けると、くるりと振り向いて私に声を掛けてくる。

「邪魔も居なくなりましたし、参りましょう主様」



「う、うん……」

完全に荷物扱いされているのを、この子は気がつく余裕もないんだろうなあ……  
まあ、あんなの諸に見たらしばらく再起不能になるのも分かるけど。

「まあ良いや。それじゃ、シフは遊んできて良いよ。カイはその補佐をお願い。万が一  
一つてこともあるかもしれないし」

「はーい！ やった、ミク様の許可も貰ったからいっぱい楽しんできますー！」

「……分かりました。ミク様のおそばを離れるのは心苦しいですが、確かに心配ではあ  
りますし」

「主様のことは、このシロガネにお任せください。必ず、あなた以上にお役目を果たして  
ご覧に入れます」

「……やはり、私もミク様のお側に」

「何張り合ってるのか知らないけど、駄目だからね？　あと、シロガネも私とは別行動だから」

「えっ」

何処か勝ち誇ったような顔から一転、信じられないことを聞いたかのような顔をするシロガネ。

いや、「えっ」って言われてもね……

「な、何故ですか！　私の役目は主様を守ることで……」

「そう言ってくれると嬉しいんだけど、敵討ちをするところに私が居ても邪魔なだけでしょ。」

「邪魔などと言うことはありません！　寧ろ居てくださった方が！」

「兎に角！ 私とシロガネは別行動！ シフもいつの間にか行っちゃってるし、さっさとオークロード倒して戻る？」

「……分かりました。オークロードには、この世に生を受けたことを思う存分後悔してから消えて貰うとしましょう」

シロガネが静かな怒りとともに新たなオークの群れに突っ込んでいったのを確認して、私は周囲の状況を観察する。

オークロードを倒せば良いと思ってたんだけど、どうやら予想以上に取り巻きのオークが多い。

それに、遠くから時折物凄い音が響いてくるから、リザードマンか若しくは私達みたいな第三勢力がオークロードと争っているのかもしれない。

状況はイマイチ分からないけど、分からないなら確認すれば良いよね。取り敢えず、音のする方に行ってみよう。



戦場を小さな影が走り抜ける。

剣戟の間を、隊列の隙間を、オーク兵の股下を、それこそ縦横無尽に。それを煩わしく思ったか、オーク兵が影に持っていた剣を振り下ろす。

「——ガ……？」

だが、影はそれをするりと躲し、挑発するようにオーク兵の肩を踏み台にして後方へと飛ぶと、また戦場の中へと溶け込んでいく。

馬鹿にされたと思ったオーク兵は憤慨し、その影の後を追い始める。

その数は一体増え、二体増え、やがて百を超える数にまで膨れ上がる。その数は傍からしてみれば脅威的であり、また格好の的でもあった。

群衆の頭上で光が瞬いた瞬間、幾筋にも分かれた黒い稲妻が彼らの頭へと降り注いでいく。

宛らの絨毯爆撃のように地表にあるものをことごとく蹂躪して降り注いだ稲妻は、

オーク兵達の姿が完全に消えてもしばらくの間止まらなかった。

収まった後には、文字通り草木すら残らず所々焼け焦げた地表が顔をのぞかせていた。

その光景を、カイは最後まで見ることなくシフへと視線を移す。

主人ミッヅから言いつかつたのは、シフに万が一がないように配慮すること。

ならば、虫けら共がどう死んでいこうが関心のないことだった。

戦場を攪乱し、またも大量のオーク兵に追い掛けられているシフを見て内心ため息を吐きつつ、カイは支援に徹すべくゆっくりと影に潜っていった。

カイが行った攻撃は、ごく単純もの。

『黒き稲妻』に加えて、先ほど手に入れたばかりの『粉塵操作』によつて稲妻の通り道を作っただけのこと。

先ほど、シロガネに煽り紛いのことを言われたカイは静かに闘争心を燃やしていた。ミクから言い付けられた事を完璧に成し遂げ、シロガネを見返すために。

そして、その闘争心がカイに新たな力をもたらしたのだ。

『粉塵操作』は、空气中に飛散している細かな物質を自在に操ることの出来るスキル。

使い道は限られども、カイにとっては相性の良いスキルと言えた。

稲妻は、空気中に飛散している物質に導かれるようにして軌道を変える。

それを利用し、カイは『黒き稲妻』を点の攻撃ではなく面の攻撃に作り替えたのだつた。

『黒雷之豪雨』は、範囲は狭いながらも連続で使用することが可能であり、無差別に降り注ぐ稲妻を回避するのは不可能。

一旦範囲内に入れば、逃げることは叶わない攻撃だった。

その頃シフは、更なる遊び相手を求めて戦場を彷徨っていた。

先程から飽きるほど居るオーク兵は、一度は興味を示してちよつかいを掛けてみたものの、すぐに興味を失った。

脆すぎる。それがシフの抱いたオーク兵への感想だ。

少しじやれつけばすぐに崩れ、囲まれ攻撃されようともそれぞれの攻撃のスピードはあくびが出るほど遅い。

後ろにたまった敵はカイが排除してくれることを理解したシフは、既にオーク兵などには目もくれずそこそこ楽しめそうな遊び相手を探しているのだ。

「ん……」

ふと、オーク兵達のおいに混じって別のにおいがシフの鼻に届いた。

そのにおいは、どうやら脆いオーク兵達とは違うらしく、周辺では多くのオーク兵が命を落としていると悟ったシフ。

楽しめるかもしれない遊び相手が居る、それはシフが動くには十分すぎる理由で、敵か味方かなどと言う考え方はなかった。

すぐさまにおいのした方角へとシフは走り出し、すぐにおいの元にたどり着いた。

そこには、間の抜けたような顔をしたゴブリンと、中々腕の良さそうなりザードマンの姿があった。

二人とも、オーク兵の処理に追われシフには気がついていない。

けれども、二人はまるで気の合う戦友のようにお互いの死角をカバーし合い、着々と周りのオーク兵を排除し続けていた。

それを見たシフは確信する。

——この二人は、自分を楽しませてくれるだろう、と。

嬉しくなったシフは、こちらに完全に背中を向けているリザードマンの背へと飛びか

かっていった。

「ブギイ、たった一人で俺達に勝とうなんて——」

全く迫力もない脅し文句を喚き散らすオークに、シロガネは内心辟易しつつ刀を振るった。

まるで力の籠もっていないその一振りは、しかし触れたオークを豆腐のように滑らかに切断した。

被害はそれだけにとどまらず、シロガネの正面に居たオーク十数体が刀が届いていないにもかかわらず同じ末路をたどっていた。

それには目もくれず、シロガネは再度戦場を歩き出す。

彼女がやるべき事は、仇のオークロードを手早く殲滅しきつさと終わらせて帰るところ。

そのためにオークロードを探し回っているのだが、出会うのは雑魚というのすら憚られるほどの只の肉の塊のみ。

ここに来る前にも出くわした豚頭騎士団<sup>オークナイツ</sup>が多少居た事には居たのだが、そのもの達は



既上半身と下半身が別れを告げていた。

「はあ……探せど見つかるのは豚ばかり……いつになったらオークロードが見つかるのやら」

まあ、オークロードも所詮豚でしょうけど。と呟きつつ、またも一振りでオーク兵達をなぎ払うシロガネの耳に、ふと聞こえてきた声。

何処かで聞いたことのあるような……否、確実に聞いたことのある、懐かしささえ覚えるその声の主は、探すまでもなくシロガネの前に姿を現す。

「生きていたのか？ ……まあ、意外って事もないか。無事に逃げられたんだな」

死んだと思っていた友の姿が、そこにはあった。

あとがきに転生する？

✓ Yes

No

## 僕と遊ぼうよ

「ちよ?! よ、避けるっす!」

シフの爪が、牙が、今まさにリザードマンへと掛かろうかと言うときに、そんな声とともにシフの視界からリザードマンが消える。

空を切ったシフが振り返ってみてみれば、案の定と言うべきかもう一人のゴブリンにリザードマンが突き飛ばされていた。

「ぬ……また助けられてしまったようであるな」

「礼には及ばないっすよ! そんなことより……」

「そうであった。今は襲撃者を……」

阿吽の呼吸と言うべきか、直ぐさまシフへと警戒の意識を向けてきた二人はしかし、

シフを見ると呆気にとられたような表情をした。

自分たちを襲ってきたのが仲間だと思っっている牙狼族で、しかもその子供と有っては驚くなど言う方が無理な話ではあるが。

しかも、向けてくる視線には敵意などの感情は殆ど読み取れず、二人はそれにいつそう混乱した。

「が、牙狼族の子供つすか……？ 一体何で攻撃なんか……？」

「むう、それに攻撃をしてきたにしては敵意のようなものを感じないのである。今のはじゃれついてきたただけであるか……？」

「いやいや、こんな戦場でじゃれつくとかちよつとおかしいです。と言うよりも、この子供は何処から湧いてきたつすか？」

目の前の二人が何事か話している間、シフはその様子をじっくり眺めていた。

只眺めているだけではなく、会話中に隙が出来るかどうかを窺っているのだが。

しかし、そんなシフの思いとは裏腹に二人は会話中にもしつかりと周囲に警戒を張つ

ていた。

攻撃する機会がないわけではなかったが、シフは敢えてその機会を見過ごした。

それは、そこで仕掛けても面白くないから。待つていれば面白いことが待つていと確信したからだ。

やがて、二人の会話が途切れ自分に視線が集中したのを感じ取り、シフははやる気持ちを抑えながら二人に問うた。

「ねえねえ、打ち合わせは終わり？　ならもう遊べる？」

否、全然抑え切れていなかった。

満点の笑顔で尻尾を振りつつ、二人へと催促の言葉を投げかけたシフだったが、それが余計に相手を驚かせたようだった。

「け、結構はつきりと喋るっすね……と言うか、ここは戦場つすよ？　何処から来たかは知らないっすけど、遊び感覚なら帰った方が良いっす」

「うむ、戦場に女子供は似合わないのである。戦いは我々に任せて、さっさと安全なところ

ろに逃げるのである」

「えー……でも、僕二人よりも強いと思うよ？ 強かったら戦場に居ても問題ないでしょよ？」

シフのその言葉に、ゴブリンが何か応えようとした瞬間、隣に居たりザードマンがそれを遮ってシフの方へと歩みを向けた。

その顔は何処かむっとしていて、明らかにシフの言葉が癪に障ったようであった。

「それは聞き捨て成らないのである。リザードマンの頭領である我が輩が、牙狼族の子供に負ける？ 万が一にもあり得ないことである！」

自信満々にそう宣言するリザードマンの耳には、隣のゴブリンが呟いた「いや、でもガビルさん自分に負けたっすよね？」と言う言葉は届かなかつたらしい。

しかし、そう言われればシフだって引き下がれないものだ。

より正確に言えば、そこまで自信があるならとより一層喜びを深めたのである。

それを見て焦ったのはゴブリンだった。このまま自分も巻き込まれてはと、シフの説

得に掛かる。

「まあ待つつす。こんな血なまぐさくて狭い戦場で、態々遊ぶ必要もないつす。終わつたらもつと広くて静かな場所で遊んであげるつすから、今は大人しくするつす」

今は駄目だが、と言う前置きをして後々改めて遊んでやると約束をするゴブリン。

これなら今遊ぶのを断る口実にも成るし、何より遊ぶのを否定したわけではないのだから乗ってくるはずだ、と考えた。

シフはそれを聞き、周囲を見回してから一つ納得をしたように頷いた。

「うーん、確かにいっぱい遊ぶには狭いかも」

「そうつす。だから、今は一旦引いて——」

「よし、なら広いところに行こう！」

まるでさも当たり前のことのようにそう言うシフに、ゴブリンが何かを口にしかけ

る。

しかし、それが声となって出てくる前に、シフが行動を起こした。

突如、シフやゴブリン達の周囲の空間が歪み始め、景色がぼやけていく。

その事に嫌な予感を覚えたゴブリンが、慌てたように歪みの外に出ようとかけだした。

しかし、あと一步というところでゴブリンの手は届かず、一瞬の後にはそこに三匹の魔物が居た痕跡は一切残っていなかった。



少し目を離れた際に……そう、本当に少しだけ注意を逸らした瞬間に、カイの視界からシフが居なくなった。

視界から見えなくなった程度ならば、再度見つけることもそう難しいことではないのだが、一体何があったのかカイがどれだけ周囲に気をはっても、シフの気配が見つからない。

シフの身にそうそう何かがあるとは思えなかったが、そんなことは今のカイには関係がなかった。

主人から任されたシフを、そして何よりも我が子であるはずのシフを戦中にて見失ったのだ。

焦りもするだろう。心配もするだろう。そして、怒りもするだろう。

「グルルル……」

カイは、様々な感情を込めた声色で低くうなり声を上げた。

バチリ、とカイの周囲に火花のごとく電流が走り、それと同時にカイを囲っていたオーク兵達が一步後ずさる。

今のこいつには近づかない方が良い。そう本能的に悟ったのか、オーク兵達がカイの周りから逃走しようとして動きですが、それよりも早くカイが天空へと吠えた。

「アオオオオオーン………ッ！」

自分にも非があることは認めつつ、しかし此奴等さえ居なければという思いから発せ



られた怒りの声。

それと同時に地上から幾柱もの雷光が天へと駆け上り、巻き込まれたものをことごとく蹴散らしながら破壊の波を広げていく。

それは、制御も何も無い純粹な力の奔流。

カイが怒りにまかせて放った攻撃は、手の届く範囲に居たオーク兵達を皆塵へと返し、遠巻きにそれを見ていたオーク兵達を恐慌へと陥らせた。

しかし、その程度でカイの気は収まらない。

複雑な光を湛える瞳をギラリと動かし、カイは次の破壊をもたらすために戦場を彷徨いでした。



「おわ、ととと……！ な、何が起こったつすか?!」

突然謎の現象に襲われたゴブタが、悲鳴じみた声を上げながら己の置かれた状況を把

握しようとする周囲を見渡す。

すると、目に飛び込んできたものは一面の草原。

先程まで居たオーク達の姿もなく、今ここに居るのはゴブタとガビル、それに目の前の牙狼族の子供だけだった。

「い、一体何が起きたっすか……？」

思わずそう口走るゴブタ。

そう、見回してみたところで何が起きたかなどさっぱり分からず、無意識のうちに犯人であろう目の前の牙狼族に聞いたのだ。

しかし、その牙狼族の仕草を見てゴブタの動きが止まる。

「……なんで首をかしげてるんすか？」

「え？ いや、ここ何処なのかなって」

「へ？ いや、だってここは……知らないんすか？」

「うん、全然」

良い笑顔でそう返す目の前の牙狼族に、じゃあ誰がこんなことをと頭を抱えるゴブタ。

そして、有ることに思いが至って体を硬直させる。

「え、なら一体誰が元の場所に戻してくれるっすか……?」

最悪、もう二度と戻れないのではないか。

そんな考えが頭をよぎり、思わず身を震わせる。

しかし――

「考えても仕方がないし、今は遊ぼう!」

「遊ぶ? 正気っすか……て、うわあっす?!」

声に反応し顔を上げたゴブタへ、牙狼族が一直線に飛び込んでくる。

咄嗟に持っていた騎乗用の槍でその攻撃をいなすも、槍はその衝撃で真つ二つに折れてしまった。

「ちよ、待つつす！ 本当に洒落になつてないつすよ?!」

「元々洒落にするつもりはないよ！ ええと……名前なんだっけ?」

「ゴブタつす！ って、そんなことよりも今はこんなことしている余裕は……ッ」

「ゴブタね！ 僕はシフ、同じ固有<sup>ネー</sup>名<sup>ム</sup>持<sup>ド</sup>ち同士、楽しもうね!」

「楽しむ余裕なんてないつす?!」

再度襲いかかってくるシフに悲鳴を上げつつ身構えたゴブタだったが、ゴブタへとその爪が届く前にシフの体が飛んできた水によって吹っ飛ぶ。

ゴブタが驚いて水が飛んできた方を見れば、丁度ガビルが魔法<sup>エン</sup>の武器<sup>チャン</sup>を片手<sup>トウ</sup>に立ち上<sup>エ</sup>

がるところだった。

槍の先に魔力を集中させ、一発の弾丸のようにそれを打ち出したのだ。

槍に備わるエンチャントによって放たれた魔力は水という実体を得、シフを横合いから吹き飛ばしたのだった。

「た、助かったつす、ガビルさん」

「なに、我が輩は二度も助けられたのだ。礼には及ばないのである。そんなことよりも、あれで倒せたとは思えないのである。注意を……」

「ふ、あはは！ その槍、面白いね！ 水が出るんだ？ もう一回やってみせてよ！」

ガビルの言葉が終わらないうちに、攻撃をまともに食らったはずのシフが何事もなかったかのように起き上がりはしやぎ出す。

それを無視してガビルがゴブタへと目配せをし、ゴブタもそれに頷く。

無視されたのが不満だったのか、その様子を見たシフが口を少しとがらせながら言う。

「少しくらい反応してくれたって良いじゃないか……まあ、打ち合わせならいっぱいして良いよ。その方が僕も楽しめるし、ね！」

魔法の武器を持つガビルの方がやっかいだと感じたのか、今度はゴブタではなくガビルへと突進を始めるシフ。

しかし、熟達の戦士であるガビルにとってその単調な突進は脅威にすらならず、槍でいなすように突進のエネルギーを分散させる。

体勢の崩れたシフに槍による追撃を行ったが、すんでのところでシフは横に飛びそれを回避した。

着地した後、今度は姿勢を低くして足を狙いにいくシフに対して、ガビルは躊躇わずに槍を突き出す。

「残念、外れだよ！」

が、シフはそれを軽く体をひねるようにして回避してみせた。

ガビルの槍は対象を見失い、その矛先を地へと埋める。

その隙にシフは懐に潜り込むと、ガビルに向けて牙をむいた。

「残念ながら、外れではないのである」

「——ッ?!」

しかし、その牙をガビルに突き立てることはなく、シフは唐突に後方へと待避した。

その瞬間、シフが居た地面から渦巻く水の槍が幾本も飛び出る。

警戒したのかそのまま距離をとったシフに対して、ガビルもまた追わずに距離をとったために、両者はにらみ合う形で動きを止める。

「ふむ、確かに動きには目を見張るものがあるが、戦いには向いていないのであるな」

「そんなこと言っても、さっきの不意打ち以外で僕に攻撃を当てられていないみたいだ  
けど……」

「それを言うならお互い様である。それに、戦いに向いていないというのはそういう意味ではないのであるが」

「そうなの？ それじゃ、一体どういう——」

余裕そうにガビルを見て笑うシフだったが、その言葉は途中で途切れた。

突如として後ろから何者かに切りつけられ、衝撃を殺すために地面を転がるシフ。

見れば、ゴブタが小刀を片手にシフの後ろをとっていた。

どうやったかは分からないが、何かしらの方法で気が付かれないように隠れていたのだろう。

そういえば途中から姿を見てなかったなあ、などと考えつつ切られた箇所から僅かに血を流しながら、シフは面白そうに笑い声を上げた。

「うえ?! 完全に意識外から切ったはずなのに、なんでそれしかダメージを負わないんですか!」

「あはは! 後ろをとつても完全に気配を消してないんじゃないやバレちゃうよ! って言っ



ても、切られる瞬間まで気がつけなかったけど。ねえ、今のどうやったの?!

「それは企業秘密つす! 教えたら不利になるつすからね!」

「えー、けちん坊……ところで、企業秘密ってどういう意味?」

「それはリムル様に聞いてほしい、ツス!」

ぐつとためを作った後、ゴブタはガビルと共にシフへと攻撃をしかける。

ゴブタの切り払いを避けてお返しとばかりにかみつこうとしたシフだったが、邪魔をするようにガビルの槍が割り込んできたためにやむなく回避に移った。

そして、体勢を立て直せば既にゴブタが小刀で切り込んでくるために、シフは一方的な防戦を余儀なくされた。

小回りのきくゴブタが敵を攪乱し、ゴブタに生まれる隙をガビルが埋める。

事前に何の打ち合わせもなかったが、ゴブタはライダーとして牙狼族と、ガビルは戦士として同族と連携をとる練習を積んでいたために、二人は息の合った攻防でシフに反撃を許さなかった。

一方のシフも、反撃こそ出来ないものの全ての攻撃を避け続け、未だに不意打ち以外で受けた傷は一つもない。

互いに決め手に欠けるまま打ち合いは十分にも及んだが、ガビルの槍による薙ぎ払いをシフが柄を踏み台に回避し距離をとったために、両者は再び睨み合う形になった。

「ちよつと！ 僕にも攻撃くらいさせてよ！」

「冗談じゃないっす。なんで態々敵に有利になるように仕向けなきやいけないんすか！」

「だって避けてばっかりじゃ面白くないんだもん！」

「あんたは駄々っ子っすか！ 大体、まだ遊び感覚でやってるんすか!？」

「最初に遊ぼうって言ったよね？」

「よね、じゃないっす！ こっちは最初っから必死っすよ！」

ふんすか怒るゴブタと、その横で未だ油断なく槍を構えているガビルを見つつ、シフはじやあと口を開いた。

「もう遊びは終わりにする？ 僕は遊び足りないんだけど……」

「……で、出来れば穏便に済ます方法はないっすかね？」

「うーん……まあ、仕方がないよね！」

「何がっすか?! っていうかおいらの話聞いてないっすね!」

ぎやあぎやあと騒ぐゴブタを尻目に、シフはそつと目を閉じて立ちすくんだ。

それに対してゴブタが更に何かを言いつのろうとしたとき、その肩をガビルが掴む。

「待つのである。少々様子がおかしい……警戒した方が良いのである」

「様子つすか？ 特に変なところはないと思うつすけど……」

「先程あのものは遊びは終わりと言ったのである。と言うことはつまり、先程までは本気ではなくこれから本気を出すかもしれないと言うことであろう。ならば、警戒した方が良いのである」

「う……確かにそうつすね……」

ガビルの言うことももつともだと思ひ、ゴブタはシフに対して警戒を怠らないように努める。

仮に突然攻撃してこようとも、それに対処できる程度には警戒をしていると考えていた。

だが――

「ちよ……なんすか、それ。反則じゃないつすか……？」

異変はすぐに訪れた。

シフの周囲の空気がはじけ、体毛がざわりと逆立ち始める。

小さかったはずの体は徐々に大きくなり、体の成長に伴い眉間から角のようなものが生える。

更に体毛の色が眩い金の色となり、その体毛をほとばしる電流が覆った。

変化が完全に止まった頃、そこにシフの面影は残って居らず、ゴブタ達の前に立つのは何か別の生き物。

ゆらり、とその生き物が目を見開いた瞬間、ゴブタとガビルの体は何か縛られたように動かなくなった。

そして、二人は察する。彼我の圧倒的な力の差を。

(なっ……あり得ないっす！ なんすかこの力の大きさは……下手したらリムル様よりも……?!)

圧倒的な力の差。それはかつて、リムルが初めてゴブタ達の前に姿を現したときのよう。いや、更にそれ以上の絶望的な格差。

鋭い眼光に射竦められ、ゴブタの中からは完全に戦意というものが喪失していた。

襲い来る虚無感。そしてこの絶望感。

寧ろ、氣を失わないだけでも褒められて良いレベルなのだ。  
最早、戦うなどと言う道は――

「ぬ……おおおおお……ッ！」

「――え？」

突如聞こえてきた声に、ゴブタは慌てて振り返った。

そこに立っていたのは、正に戦士としてのガビル。

死を前に、彼我との圧倒的な戦力の差をしっかりと把握しながらも、それでもなお立ち向かわんとする心意気。

声を張り上げ、己を鼓舞してまで屈しまいとするその姿を見て、ゴブタの中に再び戦意がよみがえる。

（そうっす……やられる前に、せめて一矢でも報いるっすッ！）

ガビルに奮起され、ゴブタもまたシフへと身構える。

その様子を見ていたシフは、ずっと目を細めると低い声で何かを呟いた。

その声は、直後に轟き始めた雷鳴によってゴブタ達の耳に入ることにはなかった。

しかし、注意深くシフのことを観察していた二人は気が付いた。その口角が釣り上がっていたことに。

そして、何を言わんとしていたのかも。

「ありがとう。また遊ぼうね……」

シフの体を覆っていた電流がはじけ、その威力と音を増していく。

そして、地面を砕かんばかりに踏み出された力強い一步は、その身を視認すら困難なスピードで前へと押しやる。

雷をまとい、一直線に進む様は一筋の雷いかづちを彷彿とさせ、それ故にゴブタ達も己の出せる最高を持って迎え撃つ。

「ツ!!」

均衡は一瞬も続かなかった。

元々力の差は歴然。誰が見ても、ゴブタ達に勝ち目などなかったのだから。雷いかづちが二人を飲み込んだ。その圧倒的な力で、何かを考える暇すら与えず。二人の視界が白く染め上げられる。色が抜け落ちていく。そして――

あとがきに転生する？

∨ Yes

No



## 二つの戦い 1

時は少し巻き戻る……

オークロードを探し戦場を彷徨い歩いていたシロガネの前に、一人の男が立っていた。

人の姿をとっては居たが、その額に生える一本の角がその男の種族を物語っていた。元はシロガネと同じオーガであり、今戦場で暴れている数人と同じ、鬼人であると。

「その姿を見るに……お前も、誰かから名を授かったのか？　もしや、ゲルミュツド様か？」

「……………」

「おっと、違うな。なら誰だ……？　ふむ、戦場におかしな連中が居るし、そいつ等の仲間と言ったところか」

「……はあ？」

「ふっ、隠したって分かるぜ。なんたってお前とはつきあいながかつたしな！ お前のことは手に取るように——」

「——すまんが、誰だ貴様は？」

目の前で得意そうに話す男に対し、シロガネは訝しげにそう尋ねた。

その言葉に、男の動きが固まり場に沈黙が訪れる。やがて半笑いと共に男は再起動すると、口元を引きつらせながら再びシロガネを見やった。

「は、ははは。随分冗談が上手くなったな。一瞬本気なのかと思つたぜ……」

「冗談？ いや、私は至って真面目だが」

「うおおい！ ちょ、そりやいくら何でもあんまりだろ?! 俺みたいなイカす奴の顔を忘れたって言うのかよ！」

「知らん。第一、私にはオーガの上位種などに知り合いはいない」

「いや、そこはさあ。ほら、気配とか？ なんかそんな感じなのでわかるだろ？ んでもつて、感動の再会と行くところだろ？ ここは」

「成る程、気配か」

シロガネはそうぼつりと呟くと、手に持っていた刀の切っ先をぴたりと男に突きつけた。

そして、ブレのない真っ直ぐな視線で目の前の男を射貫く。

「生憎、貴様のようなどす黒い気配を持つものに、知り合いなど居ない」

そう言い切るシロガネに対して、男は醜く顔を崩し顔に手を当てる。

体を震わせ、手の隙間からいびつな笑い声を漏らし始めた。

「く、くはははは……そうか、どす黒い気配か。俺の妖気オーラは、そこまで黒くなってるのか？」

「ああ、見ていっただけで反吐が出そうなほどにはな」

「おいおい、辛辣だな……お前も上位種になって性格変わったんじゃないか？ 主に攻撃的な方向に」

「さあな、少なくとも今の貴様に優しく語りかけるような感性は持ち合わせていないことだけは確かだ」

「いや、今も昔も優しく語りかけられた記憶なんてないんだが……」

シロガネの言に僅かにあきれつつそう返した男は、やがて気を取り直したようにシロガネに向き直った。

その顔には他人を見下すような笑みが浮かんでおり、己の力に対して相当な自信を  
持っていることも窺えた。

「どうでも良い。そろそろ行って良いか？ 私はさっさとオークロードを始末しなければならぬんだ」

「おっと、駄目だ。俺はゲルミュッド様からオークロードを守るように言われているからな。折角再会したんだ、もう少しゆっくりしていこうぜ？」

「邪魔をする気か？ なら良い、排除するだけだ」

シロガネは僅かに腰を沈ませると、神速の踏み込みによって男との間を詰め一気に切り上げる。

重い手応えを確かに感じたシロガネはしかし、それに違和感を覚えた。

「おいおい、再会の挨拶がそれかよ？ 過激にも程があるぜ」

果たして、頭上から聞こえてきたのはいかにも元気そうな男の声。

その声と同時に顔の目の前に突然現れた膝を冷静に防ぎつつ、シロガネは一旦男との距離をとった。

見れば、男は怪我を負っている様子もなくにやにやとした笑みを浮かべてシロガネを見ている。

周囲には当然手頃に斬れそうなものはなく、男以外に一体何を斬ったのか。シロガネにはそれが分からなかった。

「今、確かに貴様を斬った筈だが……一体なにで防いだ？」

「おいおい、そう簡単にネタをばらすと思うか？ そんなことしたら、折角の楽しみが台無しだろうが」

「貴様の楽しみなど知ったことか。さっさと話せ」

「はあ、話す訳ねえだろってのに……」

「なら良い、そのまま死ぬ」

シロガネは先程よりも深く腰を落とすと、本気の斬撃を放った。

なにで防ごうとも、それごと男を叩き切るつもりで放たれたそれを、しかし男は触れもせずに避けてみせた。

先程の攻撃を受けたことで此は避けられないだろうと判断していたシロガネは、想定外の空振りにバランスを崩す。

そこへ、男のつま先が襲いかかってきた。

なんとかそれを肘で受けたシロガネは、勢いに逆らわず後ろに飛ぶことで男との距離を再度離す。

僅かに痺れた肘をさすりながら、シロガネは目の前の男に注視する。

初めに会ったときは、其処らのオーク兵みと同じにしか見ていなかったが、相対して評価が変わったのか、それとも別の理由があるのか男から侮れない雰囲気きが漂ってきているのを感じる。

「あくまで邪魔をするつもりか。手加減はもうしないぞ」

「いやいや、お前さっきの二つとも手加減なんてしてなかっただろ。明らかに殺しに来てたよな？」

「そんなことないぞ？　只ゴミを掃除しようとしただけだ」

「うおおい?!　俺はゴミ扱いかよ！　仮にも相当期間一緒に居たのに?!」

「ゴミはゴミだろう」

「鬼かお前！」

「大鬼<sup>オ</sup>族<sup>ガ</sup>だからな。仕方があるまい」

「そういうことじゃねえよ……」

大きくため息を吐いた男は、仕切り直すように咳払いをするとシロガネへと邪悪な笑みを向ける。



そして、両の手を広げると歌うように、高らかに言い放った。

「さあ、少しばかり語り合おうぜ。折角こうして出会えたことを、世界に感謝しつつな」  
 「生憎、貴様と語り合う言葉は持たない……オークロード共々、剣の錆にすらせずに殺してやる」

そして、シロガネの神速とも呼べる踏み込みを合図に、戦場にて新たな戦いが始まった。



地上から様子をうかがうには限界があると思っていたら、「妄想」しんやうがまたも魅力的な提案をしてくれた。

座標軸を固定するだのなんだのって、私にはよく分からないことを説明してきたんだ

けど、ようはスピードは出ないながらも空に浮けるようになったらしい。

人が空を飛べない時代は終わったんだな、なんてどうでも良いことを考えながら、私は空から戦場を見下ろした。

すると、やつぱりというか何というか、リザードマンでもオークでもない第三の勢力が戦場にいるみたい。

でも、なんていうかその……あの勢力、強すぎない？

カイやシロガネ達も結構なペースでオークを倒してるんだけど、向こうの勢力はその倍近いペースでオークを駆逐していた。

正直言つて、あんなのと敵対して勝てる連中居るのかしら。なんて思わせるくらいには凄まじい戦いぶりだった。

うーん、出来ればこの勢力とは仲良くしていきたいな……よし、一番偉い人の所に行つて、なんとか友好的な関係を築こうつと。

そうと決まれば、まずは一番偉い人を探さないと……

戦場をじーつと見回していたら、ふと私みたいに空を飛んで戦場を見下ろしている存在に気が付いた。

見た目こそ子供みたいだったけど、私と同じようにしている以上指揮官クラスの人物に間違いない。

仮に一番偉くなくても、彼女に案内して貰えば良いわけだしね。

そんなわけで近づこうと思って前に進もうとしたんだけど、ふとこのまま気配を垂れ流しにして近付くのはどうなのだろう、なんて考えが頭をよぎった。

ここは戦場な訳だし、下手に気配を感じられたら問答無用で攻撃されかねない。

よし、ここは気配だけを消して無害アピールをしておこう。いくら何でも、圧倒的に格下に見える相手をいきなり襲ったりはしないでしょ。

よし、これで近付けば……って、そんなことしてるうちに地面に降りていつちやった。「妄想」、今の子早く追い掛けて。

《また無茶を……だから、あんまりスピード出せないんだってば》

全く、使えるんだか使えないんだかイマイチ分からないよね、「妄想」しんゆうって。もうちよつとスピード出すくらい、なんとかならないの？

《……よし、オーケー分かった。そこまで言うなら存分にスピードだしてあげるよ》

なんだ、やっぱりなんとかなるんだ。

よし、このまま目標へ全速前進！



「死ね！  
死者デスマーチ之チ行進演舞！」

ゲルミュツドと名乗った男が放った無数の魔力弾が、リムル達に殺到する。

しかし、それが破壊をもたらす前に全てがリムルの差し出した手に吸収され、何ももたらさずに終わる。

それに驚愕しているゲルミュツドに対して、リムルはすかさず反撃に出た。

その後は、一方的なリンチ。

ゲルミュツドの攻撃はことごとく通用せず、逆にリムルの放つ攻撃はその殆どがゲルミュツドに対して有効だった。

最早、勝負は見えた。そう誰もが思ったときだった。

「ちよ……妄想しんげうのばかあああああ……ッ!!」

空から何かが……いや、空から少女が降ってきた。

その少女は、呆然と見守る皆の前でひとしきり何かを叫びながら、ゲルミュツドのそばに着弾する。

その光景を見たリムルの頭に、一つのフレーズが浮かんだ。

「親方、空から女の子が……って、そんなこと言ってる場合か！ おい『大賢者』、今の子は無事か?!」

《解。息はあるようです。ただ、どれ程の傷を負っているかは不明です》

「生きてはいるのか……だが、何でよりもよってあんな所に落ちるんだ!」

少女が落ちたのはゲルミュツドのすぐそば。

案の定、リムル達が行動を起こす前にゲルミュツドが動いていた。

「ふはははは！ まだ俺にもツキは残っているようだな！ おい、貴様！ 散々色々やってくれたな。この無関係の此奴を殺されなくなかったら、大人しくしている！」

無関係の少女を見捨ててまでゲルミュッドを攻撃できるほどリムルは非情になりきれておらず、苦々しい思いでゲルミュッドの言うとおりに攻撃を止めた。

リムルの配下も同様で、大人しく言うとおりにするほかはなかった。

「ふん、漸く黙ったか。本来ならばこの俺自ら殺しているところだが、良いことを思っていた。おい、オークロード！ 此奴等を喰って力をつけるのだ！」

威勢良く言い放つゲルミュッドのその言葉に、リムルは内心歯がみする。

もし今女の子さえ降つてこなければ、お前なんかすぐに食べてやっていたのに、と。

苛立たしげにゲルミュッドを睨み付けたリムルは、とある光景を見てふと今自分で思ったことに疑問を持った。

「う、ん？ 空から降ってきた……んだよな？ じゃ、なんであの子は無事なんだ……？」

ゲルミュツドの腕に収まる、今しがた空から降ってきた少女。

その不思議な少女は怪我一つ負うことなく平然としており、状況が理解できないのかしきりに首をひねっていた。

そして、ゲルミュツドが散々オークロードに向かつて喚いているとその何かに反応したのか、ふとその動きを止める。

そして――

「……ッ?! な、がああああああああー!!」

手に持った剣でもって、ゲルミュツドの腕を切り飛ばしたのだった。



確かに私は全速って言ったし、速かったのも確かだけども……突然の自由フリーフォール落下は止め

てくれないかな「妄想」さん。

《君が無理を言うから仕方なくやってあげただよ。感謝されこそすれ、文句を言われるなんて心外だね》

うーん、それはまあ、そうなんだけど……もしかして、怒ってる？

《それなりにね……なんて、冗談だよ。それより、この状況をどうするつもりだい？》

あー、うん。どうしよつか……

私は「妄想」に言われてもう一度自分の置かれている状況を確認する。

私の後ろには、何かを喚きながら目の前の魔物にがりたてる男が一人。

そして、目の前の魔物はさつき見つけた指揮官クラスとおぼしき人物と、強そうなオーガが数人。

どうやら、私が入質に取られていて手が出せないらしい。ご迷惑をお掛けします。

しかし、私にはアスカロンしか武器がないし、アスカロンじや斬ることに向いてないから自力での脱出は難しい。



「オークロード！ 此奴等を喰って力をつけるのだ！」

うーん、この男。さつきから百面相並みに顔が切り替わって面白いっちゃ面白いんだけど……

「おい、聞いているのか？ 何で動かない！」

大声を出すなら、せめて耳から離してやってほしい。耳元で叫ばれると五月蠅いし耳がキーンってする。

「おい、この木偶！ 返事をしろ、うすのろめ！」

あー……まあ、うん。そうだね、無視されたら頭にくるね。でもさ、もうちよつとボリユーム下げて……

「くそが！ 力を与えたのは誰だと思ってる！ 俺のために働けうすのろが！」

……だあああーっ!!

うるさい、耳元で叫ぶなって言ってるよねさつきから！ 言葉には出してないけど！  
「妄想」、これどうにかならないかな？ と言うかどうにかしてくれない？

《まあ、気持ちは分からないでもないけど……うーん、そうだね。なら一つ助言をあげるよ。アスカロンは君が作り出した武器だ。だから、用途に合わないなら用途に合ったものを作れば良い》

……そういえばそうだったね。

あれ、でも今新しい武器を造つたらさ、光とか諸々でバレちゃうんじゃない？

《その心配は要らないよ。あれ、盛り上がると思って光らせただけだから》

そういう無駄なところには無駄に力入れるよね、「妄想」って……

まあ、今はそれは置いておこう。そんなことより武器はどうしようかなつと……

……特に思いつかないから、よく斬れる刀つてことで。

抗議のために伝説級の武器を造り出すっていうのもなんかあれだし……

咄嗟に思いつかなかった言い訳を誰に聞かせるでもなく悶々と考えていたら、アスカロンを持っていった手に少しずつしりとした重みが伝わってきた。

アスカロンは細剣だったけど、今回は漠然と刀って思っただけだから、思いのも当たり前か。

さて、それじゃ抗議の意を示させて頂きましょうかと。

「ぐ……この。おい、オークロードよ！ 貴様名を与えた恩を忘れたか！ さっさと此奴等を殺して魔王に——」

うん？ オークロード？

そういえば、私たちってオークロード倒しに来たんだっけ。

つまり、そのオークロードに命令しようとして無視されてるこの悲しい男は、ついでに倒しても問題ない相手だよな？

それじゃ、遠慮なく！

「……ッ?! な、がああああああああー!!」

変な体勢だったからあんまり力が入ってなかったにもかかわらず、殆ど抵抗もなく男の腕を切り飛ばせた。

何この刀凄。今なら何でも斬れそうな気がする。

私は刀の切れ味に感服しながら、拘束を解かれたために男から数歩距離をとった。

それにしても、さつき腕を切り飛ばしたときこの男、確かに私が刀を振ろうとしていたのを見ていたはずだ。

それなのに何も対策をとらなかつたなんて……もしかして、マゾヒストだったりするんだろうか。

《かもしれないね。まあ、物理障壁みたいなものをいくつか張ってるし、それで防げると思っただんじやないかな?》

ふーん? それだけしてて刀一つ防げないんじや、どうしようもないかませ犬って訳ね。

さつきと倒した方が私の精神面的にも良さそうだなあ。



それがどれだけの威力を出すのかは、目の前の男が身をもって教えてくれた。

オークロードの攻撃は目の前の男の脳天を直撃し、そのまま断ち割ってしまった。

と言うか、威力も凄いんだけど……なんというか、グロい。

見えちゃいけないような赤黒いものがびちゃびちゃと飛び散ってるし、更にそれを

オークロードが食べ始めるものだから……うえ、吐きそう。

『——成功しました。個体名：ゲルドは豚頭魔王へと進化完了しました』

あまりにあんまりな光景に参っていたら、あの例の声が聞こえてきた。

成る程、豚頭魔王ね……えっと、つまりどういうこと？

《難しいこと言っても分からないと思うから、簡単に。オークロードがあの上位魔人を食べて力を吸収したことで、『魔王種』に進化したんだ。まあ、単純に魔王が生まれたと考えれば良いよ》

ま、魔王………ところで「妄想」さん。

配慮は嬉しいんだけど、その一言はなかった方が嬉しかったかな……

いや、確かに難しいことは分からないんだけどさ。

それでその、魔王ってあの魔王でしょ？ 勝てるの……？

《可もなく不可もなく……いや、今の君には少し厳しいかな？ ただ、やられることもな

いから戦ってみたら良いと思うよ》

ふーん……思えばまともな戦闘って今までに経験してないし、良い機会なのかな……  
？

よし、ならやれるところまで……

「おい馬鹿、下がれって！」

「うわっ、なにごと?!」

いざ勇ましく魔王と対峙しようとした私の肩を、誰かが掴んで引き戻した。

その横を、先程女の子の周りにいたオーガや牙狼族がすり抜けていき、魔王に攻撃を

しかけ始めた。

それを見つつ、私は肩を掴んで行かせまいとしている女の子に声を掛ける。

「えっと、なんで肩を……？」

「いやいや、お前さつき止めてなきやあれに突っ込んでただろ？」

「え？ それはまあ……私はオークロードを倒してくるように頼まれた訳だし」

「はあ？ 一体誰に」

「コボルド達にだけど……そろそろ肩を離してもらっても？」

「……離れたとたんに突っ込んでいたりしないよな？」

「……し、しないしない」



「目が泳いでるぞ……」

あきれたようにため息を吐かれつつも、なんとか離してもらうことが出来た。

改めて向かい合ってみると、身長はどっこいどっこいか向こうの方が少し上。

変な仮面をかぶってるからわかりにくいんだけど、声や姿からすると女の子かな？

それにしても、変な仮面だ……こう、隠されてるのを見ると、無性に正体を暴きたくなってくる。

具体的に言えば、この子の素顔を見てみたい。

「んで、なんで君みたいな子がこんな所に？ いや、頼まれたって言うのは聞いたけどさ。と言うか、どっから降ってきたんだ？」

「え？ うんと、どこからって聞かれたら空からだけど……あ、私はミク。貴女の名前は？」

「そっか、自己紹介がまだだったな。俺の名はリムルだ。……ん？ ミク？ なんだか、日本人っぽい名前だけど、もしかして……」

「私は日本人……いや、元日本人かな？　って、リムルさん日本人のこと知ってるの？」

「ああ、俺はこの世界に転生してきたクチなんだ。そして、俺も元日本人だった。名前は変えてるけどな……まあ、こんな所でまた同郷と会えて嬉しいよ」

「またって事は……もしかして、他にもこの世界に来てる人っているの？」

「あー……まあ、そうだな。まだちらほらいるんじゃないか？」

「ふーん、そっか……いつか逢ってみたいなあ」

「はは、そうだな……つと、それで話しは戻るわけだけど、あれがどんなものか理解して戦いを挑もうとしたのか？」

「え？　うん、魔王でしょ？　流石に勝てるとかは思っていないけど、今の自分がどうなのか確かめてみたいなって」

「そうか……あ……」

リムルさんはなにやら仮面の奥で私のことをじろじろ見ているようだ。

不快なわけじゃないんだけど、そう探られるような視線を受けると居心地が悪い。

やがて、ついと視線をあげたリムルさんは、静かに首を振りながら私に言葉を投げつけてきた。

「同郷をみすみす死なせに行かせたりは出来ないな。考え直してくれないか？ 別に、無理して君があれば倒す必要なんて何処にも……」

リムルさんが口にしたのは諫めの言葉。

私じゃ魔王に対抗できないと分析して、私の身を気遣ってくれたんだろう。

でもね、違うんだよリムルさん。

私がやるのは、人に言われたからじゃない。……いや、人に言われたからきつかけが出来ただけ、それでもこのやろうという意思は私のものだ。

だから――

「喰らい尽くせ！ 混沌喰！」  
カオスイーター

「な……全員、その妖氣オーラに触れるな！ って、おい?！」

リムルさんの気が一瞬それた隙に、私は魔王へと突っ込んだ。

黄色い妖氣オーラが私をめぐらして伸びてくるけど、その動きはそこまで俊敏なものじゃなかった。

普段あんなものより速いものを追い掛けている私にとって、それをかいくぐることはそれほど難しいことじゃない。

下がっていくオーガ達とすれ違うように魔王の前へと辿りつくと、私は刀で魔王に向けて斬りかかった。

私には劍の才があるわけじゃないから、当然魔王の隙を突いて体に一太刀、とは行かない。

当然のように肉切包丁ミートクラッシャーを間に挟み、私の攻撃を防ごうとする。だけど――

「――ッ?! ぬぐッ……!」

見るからに非力な私の攻撃を弾くはずのその武器は、まるで豆腐を裂くかの如く私の持つ刀によって両断された。

魔王自身は辛うじて身を捻り回避したけど、今の事実には戸惑っているようだ。その様子を確認しつつ、私は一つの検証を開始するべく動き出した。

あとがきに転生する？

✓ Y e s

N o

## 二つの戦い 2

「おい?! ……くそ、気を逸らせた隙に!」

制止の声もむなしく、魔王ゲルドに向かって突き進む少女を見やり、リムルは悪態を吐いた。

「大賢者」で解析をした結果、ミクにはなんの力も備わっていないという事が分かったのだ。

つまり、ミクは力も持たない只の人間。その人間の脆さは、一度その身を破滅させているリムルが一番よく分かっていた。

ミクを救出するべくリムルも前に出ようとするが、その前にゲルドの混沌食カオスイーターが立ちふさがる。

「くそ……邪魔だ!」

リムルは『多重結界』に任せてそれを突破しようと試みたが、混沌食カオスイーターはまるで意思を

持つかのようにリムルの体にまとわりつく。

『多重結界』によって実害はないとはいえ、そのなんとも言えない不快感によってリムルの動きは阻害される。

そして、その間にミクはゲルドのもとにたどり着いてしまい、手に持っていた刀を振り上げた。

しかし、相手は馬鹿力を更にブーストさせたシオンでも敵わない程の怪力。簡単に弾き返されてしまう光景を夢想したリムルは、何かを叫ぼうとして口を開いた。

「……は？」

しかし、そこから出てきたのは間抜けな一音のみ。

ミクはリムルの想像など鼻で笑い飛ばすかのように、ゲルドの肉切包丁ミートクラッシャーを両断してみせたのだ。

あんなまね、出来るのか？ そう唾然とするリムルを置いて、戦況は刻々と変化する。

ゲルドに一太刀入れようと接近したミクに対し、ゲルドは先程ゲルミュツドが使用した『死者之行進演舞』デスマーチダンスに、腐食の効果を付与し更に凶悪にした『餓鬼之行進演舞』デスマーチダンスを放つ

た。

しかし、ミクはそれを意外なほど俊敏な動きで避けていく。まるで魔力弾と一緒に舞っているかのような動きで、気が付いたらゲルドの喉元まで迫っていた。

「くそ、混沌食！」  
カオスイーダー

ゲルドは慌てたように妖氣オーラを放出させたが、驚くことにミクはそれすら斬ってしま  
う。

返す刀でゲルドを切り伏せようとするミクに対して、ゲルドは腕を交差させて防ぐ姿  
勢をとる。

ミートクラッシュヤー  
肉切包丁すら両断してしまうミクの攻撃をその程度で防げるわけもないのだが、リム  
ルはゲルドの口元が釣り上がっているのを見逃さなかった。

「——うえ?!」

ミクが刀を振り下ろし、宙に舞ったのは……刀の刀身。

よく見てみれば、刀身は至る所に腐食の跡があり、ボロボロになっていた。



先程ミクが妖氣オーラを斬ったときに、密かに刀身に纏わり付いたものが刃を腐食させ、脆くしてしまっていたのだ。

「ぐはははは！ 武器を斬られた時は些か驚いたが、最早その武器も使い物にならヌ！  
先ずは貴様から喰ってやろう」

「うーん、食べられるのは勘弁したいかなあ。ここは引き分けて事で、終わりにしない？」

「馬鹿なことヲ。この状況で、貴様とオレが互角だと？」

「まあ、互角と言えば互角かな……？」

「戯れ言ヲ……ッ！」

ゲルドは腐食喰カオスイーダーによって、今度こそミクを捕食しようとその手を伸ばす。  
しかし、今度はリムルがその行く手を阻んだ。

黒炎を刀身に纏わせてゲルドの腕を切り飛ばし、ミクを守るようにその背に隠す。

「ナイスアシストだ、『大賢者』。さてと、魔王ゲルド。お前に、俺の同郷は喰わせたりしないからな？」

「ぐぐぐ、オレとお荷物を抱えた状態で戦うというの力？」

「そうだ。これくらいが丁度良いハンデなんじゃないか？」

リムルの挑発するような言動に、ゲルドの表情が引きつる。その会話を聞いていたミクの「あれ？ 私お荷物扱いされてる？」と言うつぶやきは、二人の耳には入らなかった。

「後悔するゾ……混沌喰！」

カオスイーター

「お前じゃ、勝てないよ。やれ、『大賢者』！」

そして、両者がぶつかり合った。



「おい、どうした？ 最初の威勢が見る影もないぞ？」

「余計な……お世話だ……ッ！」

リムルとゲルドがぶつかり合っていた丁度その頃、戦場の別の場所では激しい戦闘が続いていた。

いや、それは戦闘と呼べる代物ではないのかもしれない。

只管シロガネが斬りかかり、その全てを男がいなして反撃をする。

何故か男からは攻撃せずに、不利なはずの受け身に徹し、それでもなお未だにシロガネから有効打を受けていないという事実は、最早戦闘と言うより遊びに格が下がっていると言っても過言ではないだろう。

——最初、この男からは何ら脅威を覚えなかった……

シロガネは考える。

大凡凡人では認知すら出来ないスピードで刀を振るおうと、この男はまるで見えていくかのようになす。

ならばと体勢を崩させてみても、驚くような挙動で攻撃を躲し直ぐさま反撃をたたき込んでくる。

——それに、時間が経つ毎に動きのキレが増していつている……？

シロガネが疲れて反応が鈍くなったというのもあるだろうが、それを除いても男の動きは時間が経つ毎にそのキレを増していく。

戦いにおいて、時間経過と共に動きが良くなつていくなど反則に近い能力だ。

それはすなわち、無限にも等しい体力を持っていることになり、粘れば誰にでも勝てるというおかしき性能を發揮することとなる。

「……あり得ない」

故にこそ、シロガネはそれであり得ないことだと断じる。

何故かは分からないが、男は手こずれば手こずるほどその力を増していくようで、既に純粹な力比べではシロガネに勝ち目は無い。

だが、それならば何かカラクリが隠されているはずだと、シロガネは刀を振りながらも思考を続けた。

「おいおい、邪魔者は排除するんだろう？ そんなちんたらした剣速で俺をとらえられるのか？」

「……少し調子が悪いだけだ。すぐに葬り去ってやる」

今し方浅く切り裂かれた頬を拭い、シロガネは男へと言葉を返す。

未だに男から仕掛けてくることはないが、反撃として繰り出される剣がシロガネを浅く傷つけていく。

数度刃を交えたのみだが、既にシロガネの全身には無数の切り傷が走っており、見た

目にはぼろぼろと呼ぶしかない状況だった。

まさに圧倒的と呼ぶしかない状況。そんな中で男は余裕の笑みを浮かべており――

――その実、背中には冷や汗を浮かべていた。

「(おいおい、もう力の差は十分離れてるはずだろ……？　なのに、何で此奴は立っていられる……ッ!?)」

圧倒的な力の差。それを見せつけた男は、シロガネの命を刈り取るつもりで反撃を行っていた。

自身の攻撃を逆にとられ、絶望の色を浮かべて死んでいく……

そんな光景を望んでいた男の反撃は、そのどれもがシロガネを浅く傷つけるばかりで致命傷には至らない。

それはまるで、軽くあしらわれている気がして。

「(……下手にこだわったら死ぬかも知れないな。そろそろ勝負をつけるか……)」

男は切り替え、片をつけるべく刀を構え直す。

戦場では下手にこだわらない。その切り替えをスムーズに行える男は、流石に戦闘慣れしている元オーガと言ったところか。

「おい、いい加減お前も飽きてきただろ？　そろそろ決着と行かないか」

「……何を企んでいる？」

「別に、何も企んじやいないさ」

不敵な笑みで僅かな焦りを覆い隠し、男はシロガネへとそう囁いた。

大丈夫だ。奴にはこのカラクリは分からない。仮に分かったところで、既に如何することも出来ない。企んでいるのはお前の方じゃないか？　と聞きたくなるのを抑え、男は表情を取り繕う。

そんな男に対して、シロガネは少しばかり逡巡した後、わかった、と頷きながら言葉を返した。

「……良いだろう。貴様の力が持つカラクリも大体分かったしな」

「……は？」

シロガネの言葉に、男が反応する。

本当に見破られたのか、シロガネの表情からは嘘の気配はしない。

しかし、見破ったところで。自身の力にそう自信を持っていた男は、一瞬の動揺を押し隠してシロガネを見やる。

対するシロガネも、未だに気力を漲らせながら男を射貫くように視線を交差させる。

「カラクリが分かった。なる程、それは凄いな。それで、分かったところでどうにか出来ると思っているのか？ 戦いは力だ。力が開いてる時点で、お前に勝ち目はないだろうか？」

「力、か……そうだな、戦いは力だ。そこは貴様に同意しよう。私も、力を求めて主様に名を頂いたのだからな」



だが、とシロガネは続ける。

きっかけは似たようなものだったのだろう。両者共に、力を求めて名を受け入れた。

それが、決定的に捻れたのは……きつと、名付け親の差故。

「身体能力、反射神経。そういったものばかりが力な訳ではない。今の貴様は、強化された身体能力と反射神経の上にあぐらを掻いているだけの、只の猪武者だ」

「戯れ言を……ッ！ その猪武者に一太刀も入れられていないお前が、何を吠えてやがる！」

「そう思いたいなら、勝手に思っていれば良い。貴様も、うすうす感づいているのだろうか？」

「……ッ！」

シロガネの問いかけに、男は答えることが出来なかった。

殺すつもりで放った太刀筋。そのどれもがシロガネを浅く切り裂くのみでとどまつたのは決して偶然などではなく、意図的に逸らされていたのだと確信してしまったために。

「貴様と刃を交えるたびに、私の力が衰えていくのを感じた。詰まるところ、貴様のそれは相手から力を奪い我が物とする系統なのだろうか？　それが相手の技まで奪えるものだったら脅威にもなっていたが、只力を奪うのみならば手こずるほどでもないな」

シロガネはそう言い放ったが、実際の処この男の能力は途轍もなく相手にし辛い類いのものだ。

戦いが長引けばそれだけ相手を弱体化させ、その分自己は強化される。生半可な技術など、圧倒的な力の前には毛ほどの意味もなさない。

結局、この二人の勝敗を分けたのはその保有する技術の差。

自分の力に驕り鍛錬を怠った男と、主を守るために常に研鑽を絶やさないうしろガネの差。

「決着、つけるのだろうか？　今度は貴様に攻め手を譲つてやる」

「……ッ！　くそ、があああああああ!!」

明らかな挑発を受けた男は、それを正面から突破するべく全力を解放する。

叫ぶ男から滲み出すのは、黒い靄のようななにか。

それは男を覆い隠し、さながら鎧のような役目を果たす。更に男の刀にもそれは纏わり付き、禍々しいばかりの大剣へと姿を変貌させる。

ぎらり、と男は目を光らせると、シロガネとの距離を一瞬で詰めた。

それはまさに、瞬き一回分にも満たない一瞬の出来事。瞬時に予備動作を終えた男は、シロガネへとその大剣を振り下ろした。

「砕ける——<sup>アウトレイジ</sup>暴虐なる奔流ッ！」

正真正銘、男の全てを込めたその一撃は、音すら置き去りにしてシロガネへと迫る。

謂わば剛を極めたともいうべきその一撃を正面から受け止められるのは、恐らくこの世界において竜種くらいのもものだろう。

そう、正面から受け止めるならば。

男の剣がシロガネを両断する寸前、その腹にシロガネの刀が添えられた。そして、そのまま絡め取るように巻き付くとその軌道を横に逸らされる。

結果、男の剣はシロガネを捉えることはなく、足場を砕くにとどまった。

「な……ッ」

決めるつもりではなつた攻撃が空振りに終わったことと、足場が崩れたことで男の動きが一瞬止まる。

その男の胴に、地面に刺した刀を軸に空中に逃れていたシロガネの足がたたき込まれた。

しかし、それは黒い霧に阻まれて男には届かない。それを見て勝ち誇つたような顔をした男に、しかしシロガネも笑みを見せて応じた。

黒い霧に触れた足を軸とし、シロガネは体を回転させる。空中という足場のない中で、実体を伴つた妖気を足場に見立て姿勢を制御する。ともすればバランスを崩し致命的な隙を生んでしまうそれを意図もたやすく行つたシロガネの刀が、脳天から男に迫る。

それでも、男の余裕の表情は崩れなかつた。迫り来る刃すら、己の妖気は弾いてみせ

ると自負していたから。

刃が迫る。

男の妖氣オーラがそれに呼応するように、密度を増していく。

男の妖氣オーラと、シロガネの刀が触れる。

そして――

――シロガネの刀は、まるでそこに何も無いかのように男の妖氣オーラを切り裂き、そのまま男を肩から両断した。



ありのまま、目の前で起こっていることを話そう。

オークロード……うん、魔王ゲルドとリムルさんの戦いは、完全な肉體戦へと移行してた。

最初こそ、ゲルドが弾幕を張ったりしてリムルさんを牽制してたんだけど、それが効

果が無いとみるなり手足に腐食の妖気オーラを纏わせてリムルさんと格闘戦を始めた。

驚くべきはリムルさんかな。だってその見た目の何処にそんな力があるの？ っていうくらいの手力で、ゲルドに拮抗してるんだもん。

まあ、ゲルドの攻撃はリムルさんの手前で何かに阻まれるし、リムルさんの攻撃はゲルドの再生力に追いついていないから完全に千日手みたいだけど。

「リムルさん。何か手伝うことあるかな？」

呼びかけてみるも、反応なし。

なんか、聞こえてないっていうか聞く気が無いって感じで、さっきまでのリムルさんとは様子が違うような……

《今、彼は自分で自分の体を操作してるわけじゃないからね。ほら、一回洞窟でやって見せたみたいな感じに》

あー、そうなんだ……。それじゃ、今リムルさんの体はスキルが主導権を握ってるって事ね。

それにしても、何だか魔王との戦いなのに、肉弾戦ってなんか地味だね……

《いや、確かに地味だけでも。所詮ゲルドは生まれたてのなんちやって魔王だし、彼も武器らしい武器は持ってないみたいだから仕方ないんじゃないかな》

なんかこう……魔王との戦いっていつたらさ、聖剣携えて魔王の張った結界毎相手を叩き切るとか……そういうものじゃないの？

《うん、それは君の世界の物語の話しであって、こつちの世界とは違うんじゃないかな。それにしたって偏った知識な気もするけど》

そうかな……あ、そうだ。アスカロン出したみたいに、聖剣を持ってきたりは出来ないの？

こう、約束された勝利の聖剣みたいに！

《うーん、今の状態だとエクスカリバーはちよつと難しいかな……。というより、一応いっておくけどアスカロンも聖剣のカテゴリに入ってるからね？》

呆れたような「妄想」<sup>しんゆう</sup>の声に、寧ろなんでそんなことを知っているのかと激しく問いたい。

私よりもあつちのことに詳しいんじゃないの？

「——しまっ……おい、逃げろ！」

突然そんな声が響いてきて、私の意識が引き戻される。

そうだ、ぼーっとしてたけどこっつてまだ戦場だったんだ。

えっと、ところで逃げろって誰に言ったんだろう？ リムルさんとゲルド以外、この辺りにはもう居ないはずだけど……

不思議に思っただけをキョロキョロしてたら、立て続けに声が響いてくる。

「いや、なにキョロキョロしてんの?! お前だよお前! お前以外に誰がいるんだよ!」

どうやら下手人はキョロキョロしているらしい。

そんな特徴的ならすぐに見つかっても良いようなものだけど、それらしい姿は見えない。



いような……?」

《いや、君のことだから。何処をどう考えても君しか居ないから》

え、私のことだったの？ 全然気が付かなかった……

というより、逃げるって何からだろう。

声のした方を見てみたら、何だかりムルさんが面白いモニュメントみたいになってた。

肩から地面に埋められているのか、必死に抜け出そうとして左右に揺れているのが何だか笑えてしまう。

あれ、でもおかしいな。なんで埋まってるんだろう。

「……あれ、ゲルドは?」

そうだ、リムルさんと戦ってたはずのゲルドの姿が見えない。

小首をかしげると、リムルさんが必死にもがきながら叫んだ。

「上だ、上！ 早くそこから逃げろ！」

「上？」

なんで上？ と思うまもなく、突然周囲が暗くなる。

ふと上を見たら、丁度ゲルドが覆い被さるように私に向かって突っ込んできているところだった。

え、なに？ ジャンプして攻撃してきたの？

咄嗟に後ろに転がって回避したら、寸前まで私が居たところにゲルドの拳が突き刺さった。何あれ怖い。

ゲルドが舌打ちをしながら身を起こすと、なぜか見下したような笑みを浮かべて私を見てくる。

「ふん、運良く避けられたカ。だが、いつまで逃げられると思っっているの？」

「いつまでって言われても、わかんないけど………というか、リムルさんと戦ってたんじゃないの？」

「カカカツ、馬鹿メ！ 折角目の前に弱い餌が居るのに、それを見逃す手はないだろう！」

どうやら、目の前のお方は私がご飯に見えるらしいです。

どうしよう「妄想」、私美味しそうに見えるんだって。

《相手が相手だったら事案発生だね……なんて、巫山戯てる暇はあんまり無いよ。素手でやり合ったら、いくら何でも脅力で勝てないから気を付けてね》

確かに、素手でやりたいとは思わないかなあ……

でも、武器を造れば良いんでしょう？ それっぽく武器を適当に持つてくれば良いんじゃないかな。

そう思いながら、腐食に強い刀を想像する。さつきは腐食されて刃が折れちゃったからね。

すると、私の手の中には一振りの刀が収まっていた。刀の善し悪しは私には分からないから、特に感想は無いけど。

《適當について……あのね、本当ならそんな適當に持つてきたりは出来ないんだからね？  
事象っていうのは、名を残して初めて力を得るんだ。そんななんとも言えない、無銘  
の刀なんて本来出せる力の一端すら引き出せてなくて……》

え、でもよく切れる奴はよく切れたよ？

《あれだって、本来だったら腐食なんてしなくて……うーん、それは今はいつか。兎に  
角、魔物と一緒にモノにも名前をつければ強くなる、そう考えれば良いよ》

えーっと、つまり本当の名前を思い浮かべて召喚したり、振るときにその武器の名前  
を叫んだりしたら、その力が解放される……みたいな？

なんだろう、そんな話しを前の世界で見たことがある気がする。

《流石にあんな感じにはならないからね？ でも、名前を思い浮かべながら召喚するつ  
て言うのは正しいかな。ほら、アスカロンは条件が限定的だったけど、それでも普通に  
業物として使えていたでしょ》



「……金剛？」

ぽつり、と呟いたに等しい私の声。

その声に反応したかのように、私の手の内で刀がどくんと一回跳ねる。

どうやら、今のが名付けという認識をされたらしい。まあ、下手に変な名前になったわけじゃなかったから一安心、と言ったところだ。

それにしても、外見的には変わったところなど一つもない。

なんか、カイ達みたいに見た目に変化するものだと思ってた私は、少しばかり肩すかしを食らった気分になる。よく考えれば無機物の形態変化ってなんだよって話しなただけだね。

『エクストラスキル「魔剣命名」を獲得しました』

何となく聞き慣れてきた例の声が響いてきて、私に新たなスキルが備わったことを知らせる。

魔剣命名……スキル名的に、武器に名前を付けて魔剣にする、みたいなもののかな

?

まあ、武器に態々名前を付ける使用者も少ないだろうし、私もそんなに多用するスキルじゃないんだろうけど。

「……あれ？」

ふと、回りが静かだなと思って顔を上げる。

そういえば、ゲルドに襲われそうになってた筈なんだけど、私のことを待っていてくれたのかな？

だとしたら、色々とよく分かってるな、なんて思いつつゲルドの姿を見て、目を丸くする。

……なんか、すつごく脅えられてない？

あとがきに転生する？

✓ Yes





## そして決着へ

——オレは、負けられぬ。

魔王となったゲルドには、一種の矜持のようなそんな思いがあつた。

——オレは、同胞を喰らつた。様々なものと一緒に。だが、まだ満たされぬ。だから、まだ喰らうのだ。

常に飢える状況。ゲルドの支配下にあるオーク達もまた、似たように飢えている。それは、弱肉強食のこの世界において何ら不思議なことではない。

弱いものは飢え、そして淘汰されていくのだ。

——認めぬ……ッ！

だが、弱きものにも弱きものなりの矜持が、意思がある。

大人しく淘汰されるのをよしとするほど、彼等は己を見失っていないかった。だから、力の強い餌を前に狂喜した。

倒すべき敵を見て、己を鼓舞した。

倒せば、力が手に入る。その力でもって、更なる餌を喰らうのだと。

——なんなのだ、こいつは……ッ！

だから、ゲルドは目の前の存在が理解できなかつた。

さつきまでは、確かになんの力もなかつたはずだ。

だから、敵を倒すべく己の糧としようとしたのだ。

多少なりとも、力が増えるだろうと思って。

だが此は……

——敵……いや、脅威……ッ！

そう、敵などという言葉は生ぬるい。

脅威という言葉ですら、何かが足りない。

仮にこの場にある餌を全て喰らったとしても、尚勝てる気すら起きぬほどの圧倒的な力の差。

何故、こんな少女が、などという考えは無駄でしかない。この世界において、姿とは力を表すものではないのだから。

ゲルドは絶望する。

勝てるはずがない、と。

こんな化け物相手に、戦えるはずが――

「――違う」

一瞬浮かびかけた思考を振り払うように、ゲルドは呟いた。

対面で、少女の皮を被った化け物が「えっ？」などと間拔けな声を漏らしていたが、ゲルドは気にもとめなかった。

そう、違う。

勝つか、勝たないかではないのだ。

同胞すら喰らい、他者を糧とした自分は。

罪深きオレは。

「俺は、負けるわけにはいかないんだ！」

そう、勝つために咆吼する。

途端、力が漲る。

勝て、そう言われた気がして、ゲルドは一層力強く吼え猛った。

「喰らい付け！  
カオスマーチダンス  
虐食之行進演舞！」

先程までとは違い、より濃く、より力強い魔力弾を放つ。

触れた瞬間になにも溶かし喰らうほどの攻撃を前に、しかし目の前の脅威は逃げようとしなない。

不思議に思ったが、手を緩めることはしなかった。

ならば、正面から堂々とたたきつぶしてやる！

そう意気込んで、より力を入れ。

不意に、脅威が動く。

それは、たった一瞬。体を揺らしただけのような、それだけの動作。

だというのに、その一瞬で目の前の脅威は、全ての魔力弾を切り捨ててみせたのだ。まさか、とゲルドは己が目を疑った。

だが、同時にほくそ笑む。

これは、先程の焼き直し。腐食の効果を持った魔力弾を切ったのだ。ならば、奴の刀はなまくら同然。

「今度こそ、喰らってやる！」

奴が何処から代わりの武器を出したのか、それは分からない。

だが、今度は邪魔する奴は居ない。ならば、代わりの武器を出す前に片を付ける！  
腐食の妖気オーラを纏わせた腕を脅威へと伸ばす。

脅威が刀を構え直す、そんななまくらで何が出来る！

そうあざ笑ったゲルドは、ふと脅威が持つ刀の輝きに違和感を覚える。

それは、全く褪せずに輝いており、まるで打ち立てのよう……

——腐食、していない……?!

驚愕すると、腕の先の感覚がなくなるのはほぼ同時だった。

見ればいつ振ったのか、脅威のもつ刀が己の腕を切り飛ばしたところだった。

どういう仕掛けか分からない以上、近くに居るのは得策ではない。そう考えれば、ゲルドは一步後ずささろうと身を引く。

「——ッ?!」

そして、バランスを崩した。

何が起こった……?! そう混乱し、己の足を確認したゲルドは顔を青ざめさせる。

そこにあるはずの足は、いつ切られたのか無残にも身体から切り離され、地面を転がっていた。

早業、どころの話ではない。腕を切られた感触はあった。だが、足は？

ゲルドは身体が震えるのを感じながらも、再生した腕で何とか後退る。

幸い、斬られても再生しないということはない。

ならば、何も恐れることはないのだ。

——本当に？

ゲルドは自身に問いかける。

本当に、この目の前の化け物に勝てるのか、と。

答えなど、とうに出ていた。しかし、ゲルドはそれを認めようとはせずに再生した足を踏みしめて立ち上がる。

まだだ、相手がいくら化け物だろうと、俺は負けられない。負けてはならない！  
手を伸ばす。

瞬時に肩口から切断され、返す刀で右足を切断される。

咄嗟に、斬られていない方の腕でがら空きに見える胴を狙う。

当然のように、斬り飛ばされる。

再生した腕で身体を庇いつつ、押しつぶそうと突進する。

腕ごと身体を切られ、後ろへと弾かれる。

斬られ、再生し。

斬られ、突撃し。

斬られ、地面を転がる。

それを幾度となく繰り返し、いつ果てることなく続く。

永遠にすら思われるその戦いにも、しかし終わりというものが訪れる。

先に根を上げたのは、ゲルドの方。いや、正確にはゲルドの魔素の方だ。

再生するたびに消耗していたゲルドは、遂に満足に再生する余力すらなくなってしまうていた。

「ぐ……ぐああ……ッ」

「よ、漸く終わった……いくら何でもタフすぎない？　魔王って全員こんな感じなの？」

息も絶え絶え、と言ったゲルドの横で、言うほど疲れて居なさそうなミクが呆れたように言葉を発する。

それを見たゲルドが、悔しげにうなり声を上げる。

しかし、そんなことは意に介さないミクは、ゲルドに刀を突きつけた状態で考えるような仕草をする。

「どうしよう……勢いでここまで追い詰めたのは良いけど、オークロードってシロガネの仇なんだよね……このまま放置するのは格好悪いし、かと言って……」



当然、ゲルドには何を言っているのか理解できなかった。

だが、目の前の化け物に自分を殺すつもりがないと悟ると、悔しさに歯を食いしばる。だが、同時にチャンスだとも思った。

最早自分は助からない。この騒ぎの責任を背負って死ぬというのなら、従おう。だが！ 同胞達にそれを背負わせる事は出来ない。

背負うのは、俺一人で十分なんだ！

「……強き者よ。どうか、一つだけ約束してもらえないか」

「うん？ 約束？」

「そう、約束だ。俺はこの騒ぎを收拾するために、大人しく命を差しだそう。だが、同胞達の命は救ってくれないか。奴らに、罪はない」

「他のオーク達って事かな？ うーん、私の一存じゃないけど……私はオークロードを倒してとしか言われてないし、命を取る気はないよ？」

「……そう、か。感謝する」

「……？ うん……」

ゲルドは、ほつと安堵の息を吐いた。

これで、同胞の命は救われた。

ならもう、高望みはすまい……

これで、良いのだ。これで……



シロガネは、無表情に男を見下ろしていた。

目の前の、今にも死にそうな深傷を負っている男のことをシロガネはよく知っていた。

かつて、同じ里にて共に研鑽し高めあった、無二の親友。

馬鹿だが、馬鹿故に真つ直ぐな氣質で嘘などという器用なことは出来ず、その劍筋も只管愚直。

そんな男が、敵として出てきたときシロガネは深く失望した。

あれだけ真つ直ぐだったのに、何故。何故、醜く曲がつてしまったのかと。

故に、シロガネは最後の一刀まで手を抜くなどということはしなかった。

全ての太刀を、全力で振り抜いた。

そして――

「――馬鹿は馬鹿だった、か……」

男が根本の所では何も変わっていないなかったことを知って、何処か安堵する自分を感じていた。

最後の、一連の攻防。

本当なら、男はあれを避けられていたはずだった。

それを敢えて正面から受け止める者を……馬鹿以外になんと呼べばいい？

「……貴様、手を抜いたな」

「つは、ばか……言うなよ。俺は、いつ……でも、全力だった、ぜ……」

息も絶え絶えながら、男はそう不敵に笑う。

結局、歪んでしまったのは性格と望のみ。

根本の、深いところでは。男は何処までも真つ直ぐな馬鹿だったのだ。

それに気が付いたシロガネは、ため息を吐きながら男のそばへとしゃがみ込む。

そして、たった一つだけ。男に質問をした。

「……貴様、名は？」

「……ガルドド、と。そう名を、頂い……た」

「ガルドド、か。覚えておこう」

「……お前は、なんて……貰ったんだ……？」

「これから死ぬお前に、教える意味があるのか？」

「おい……堅いこと、言うなよ……めい、どの土産……くらい、いいだ、ろ……？」

「……シロガネ、だ」

「……は、シンプルだな……覚えて、おく……」

「必要ない。忘れてしまえ」

男が苦笑する気配を無視し、シロガネは只そこにしやがみ続けた。  
やがて。

男の呼吸が止まる。そして、だんだんと熱が逃げていく。

暫く、シロガネはそんな男の顔を見続け、やがて腰を持ち上げる。

最早、別れは済ませた。なら、もう居座る理由はないだろう。

男は——ガルドは、逝った。仇など、存在しなくなった。

ならば、もう向かう場所は一カ所しかなかった。

シロガネは、己が主のもとへ向けて歩みを進めた。

ミクがゲルドを討伐してから、十数分。

未だ奇妙な緊張が残るその場に、シロガネがゆっくりと姿を現す。

ミクの姿を認め、次いでゲルドを見ると、状況を察したように一つ頷いてからミクに近付いた。

「流石主様。オークロードなど、ものの数でもありませんでしたか」

「うーん、かなり苦戦はしたけどね？ 斬っても再生するから、大変だったよ……」

どの口が。

その場にいる全員がそう思ったが、それを声に出していった者は居なかった。

「あ、そうだ。シロガネ、オークロードが仇だって言ってたよね。煮るなり焼くなり好きにして良いみたいだよ」

「いえ、私の仇討ちは終わりました。ですから、どうぞ主様のお好きなように」

「あれ？ 終わったの？ えーっと、なら……り、リムルさん。どうしよう……」

困ったように、漸く土から這い出してきたリムルにそう問いかけるミク。

一瞬虚を突かれたような顔をしたリムルだったが、すぐに表情を戻すと呆れたような口調で返す。

「いや、そこは俺に聞くところじゃないだろ？ 魔王を倒したのは君なんだ、君の好きなようにすれば良い」

「ええ……好きなようにって言われても。まあ、いいや……それじゃ、流石に倒してって言われてるのに許すことは出来ないから。覚悟は良い？」

「……ああ。俺の命一つで済むなら、覚悟などとうに出来ている」

「……そっか。うん、わかった」

静かに目を閉じるゲルドに、ミクは一つ頷くと刀を構える。

心の臓に切つ先を押し当てられる感触を感じながら、ゲルドは己の成したことを思いやり、苦笑する。

我ながら、大それた事を考えたものだ、と。

全ての罪を喰う。そのつもりだったのに、結局何一つとして喰うことは出来なかった。

その身に余る願いを抱いて、神の怒りに触れたのだろうか……

そんな益体もない事を考えながら、静かに沈められてくる刃の冷たさをじつと受け入れた。

ああ、冷たい。

俺はきつと、地獄の業火で焼かれるものだと思っていたが、実際はこんなに寒いんだな。

同胞達よ、俺は謝ることはしない。

俺は只、己の成したいことを成そうとしたまでだ。だから、許しを請おうとも思わな



い。

だが、俺は何も成すことなく果ててしまった。

願わくば、お前達の未来に障害がないよう。

ふ、寒さも大概、悪いものではないかも知れないな……

ゆつくりと身体を包み込んでいく冷たさに、ゲルドはそう強がつて笑う。

ああ、もうすぐだ。もうすぐ迎えが来る。

感覚でそう悟ったゲルドは、いよいよだと身体をこわばらせた。

しかし、ふと有ることに気が付く。

それは……声。

寒さを吹き飛ばしてしまうような、全身を暖かく包み込んでくれる声。

呼んでいるのは、知らない名前で。

しかし、自分が呼ばれているような気がして。

「俺は」

一匹のオークは、冷たい場所から這い上がって、ゆつくりとその瞼を開いた。



新しい武器を手に魔王ゲルドと対峙する私に、あちらさんは開幕早々面制圧を仕掛けてきた。

目の前を覆い尽くすのは、威力速度共に向上している先程の魔力弾。

明らかに押しつぶす気が見え見えの攻撃に、内心やるせない気持ちになる。

というか、これどうやって躲せば良いのだろうか。全然避けられる気がしないんだけど。

《残念！ ミクの冒険は、ここで終わってしまった！》

縁起でもないこと言わないでくれるかな、「妄想」しんゆうさん?! まだ終わらないから! 多分!

《冗談だよ。まあでも、ちよつと危ない状況ではあるね。見た感じ避けられそうにないし》

だ、だよね……。ねえ、これどうしたら良いかな？ 刀振り回したら消せたりしないかな。

《まあまあ、落ち着きなよ。折角腐食しない武器を手に入れたんだから、斬つて防いでみれば良いんじゃないかな？》

すつごい無茶言われた！ ……うん、無理。あれきるとか絶対無理?!

《スペック的には出来るんだけどなあ……それじゃ、指示するからそれに従つて無心で振り抜いてみて。そうすれば感覚で覚えると思うから》

それもかなり無理難題なんだけど！ というか、もう前みたいに私の代わりに……

《ぐだぐだ言わない。ほら、構えて!》

うう、失敗したら許さないから！

「妄想」に怨嗟の声を投げて、半ばやけくそで言う通りに刀を振るっていく。

初めは半信半疑だったけど、状況に即した的確な指示を聞いているうちに、私もだんだんと何かをつかめてきた。

相手の視線。身体の傾け方。筋肉の膨らみ具合。

目に入る情報を読み取って、相手が次に何をしてくるかを予想する。

気が付いたら、「妄想」の指示がなくても自然とゲルドを返り討ちにするくらいまで、私の実力は上がっていた。

《上がったって言うか、元々素質があつたのを引き出しただけなんだけどね。いくら何でも、一からやってこんなに早くは上達しないよ》

そうなんだ。でも、私的には強くなった気がするからよしとしよう。

なんとなく嬉しくて、何度も起き上がってくるゲルドを相手に更に鍛えようと、次々と剣撃を繰り返す。

どれくらい経ったか、段々永遠にこれを続けなくちゃいけないのかなとか思い始めて

きた頃に、ゲルドの再生のスピードが落ちてきているのに気が付いた。

もう一押し、と斬り飛ばした腕が再生せずにそのままになっているのを見て、私は漸くかため息を吐いて攻撃の手を止めた。

そのままとどめを刺すことも出来ただけで、シロガネの事を考えて待つことにした。

別れたときに仇を討ってこい、なんて言つたのに、それを私が邪魔しちや悪いもんね。そんな風にしてシロガネが来るのを待っていたら、ゲルドが苦々しい顔をしながらも私に一つの約束を求めてきた。

他のオークの命は助けてほしいって、自分の命を引き替えに。

元々、他のオークをどうこうするつもりもなかったから、頷いて約束する。

それにしても、仲間の命の救いをこうなんて。魔王つてもっと卑劣なものだと思つてたけど……

シロガネが合流してきたから、ゲルドの処遇をシロガネに一任しようとした。

だけど、シロガネは何かを振り切つた表情でそれを辞退すると、私に丸投げしてきた。困つてリムルさんに聞いても、答えは同じ。

私になんとかしろって言われてもなあ……

……そうだ。「妄想」<sup>しんゆう</sup>、名前の上書きみたいな事って、出来ないかな？

《上書き？ それは、新しい名前を与えるって事？》

うん。ちよつと思うところがあつて。

《ふーん……？ まあ、名付け親が既に死んでいるか、力関係で優位に立ってれば出来るんじゃないかな？ 試した事例を知らないから、なんとも言えないけど》

よし、それだけ聞ければ十分。

私はゲルドに向き直ると、心臓に金剛を押し当てる。

それを静かに受け入れるゲルドを見守りつつ、その切っ先を沈めていく。

いくら再生能力が高くて、既に力が尽きかけているのに加え、破壊するのは心の臓。金剛に刺し貫かれたゲルドは、血を吐き出してゆっくりと倒れ込む。

傷が癒えないことを確認してから、私は少し待ってゲルドの耳元に口を寄せる。

]

眩くのは、新たな生を生み出す魔法の言葉。

正直言つて、成功するかどうかは半々といったところだ。

死の淵から、対象を呼び戻すことが出来るのかどうか。そもそも成功するのかどうか。

じつと見守る中で、徐々に胸の傷がふさがっていくのが分かった。

うん、よし。なんとか成功してみたいだね。

見る見るうちに傷は癒え、やがて完全にふさがる。

それと同時に、目の前のオークが僅かな身じろぎと共に目を覚ました。

「――俺は」

戸惑いと共にこぼれ落ちたその言葉を聞いて、私は静かに言葉を紡いだ。

「お帰り。そして……初めまして？」

あ  
と  
が  
き  
に  
転  
生  
す  
る  
？

Y  
e  
s

N  
o



## 願いは紡がれ

「一体、何をしたんだ……？」

たった今、目の前で起きた不可解な現象にリムルは必死に頭を働かせて考える。

そう、確かにあの少女にはなんの力も備わっていないなかったはずだ。少なくとも、リムルが調べたときはそうだった。

それ故に、ゲルドに狙われた少女を庇うように立ち回り、満足に戦うことが出来なかったのだ。

だが、だったら今日の前に居るのは。

この、空間すら軋ませるほどの妖気オーラを垂れ流しているのは……一体、誰だ？

いや、とりムルはかぶりを振る。

別人に成り代わっているなどと言うことはないだろう。ならば、あれは先程までの少女のその人。

考えられることは、何らかのスキルで自分の力を隠していて、本気を出すためにそれを取り払った……とか、そんな感じだろう。

もしそうだとしたら、あの子は相当食えない相手ということになる。

俺の解析能力でも看破できない能力を有し、目の前の魔王すらかすんで見えるほどの妖気オラを持つ。

一体、どういう存在なんだ？

「つて、今それはどうでも良いか。そんなことより、早くこつから抜け出さないと……ふんぎゃぎゃぎゃー！」

リムルは埋まってしまっている身体をなんとか引き抜こうと、左へ右へと身体を振る。

しかし、相当ずつぱり埋められてしまったのかいっこうに抜ける気配がない。

戦闘中、隙を突いて接近し捕食者にて左腕を奪ったは良いものの、残る右腕一本で地面にずつぱり埋められてしまったのだ。

幸い、障壁と痛覚無効で特になんとも感じなかったけど、埋まつてる感触というものはなんとも形容しがたい。あの野郎、引っこ抜けたら同じ目に遭わせてやる！

己をこんな目に遭わせたゲルドに怨嗟の念を送りつつ、リムルは更に激しく身体を振り始める。

それがモニュメントのようで面白いと思われていることを、本人は知るよしもなかった。

「……俺、なんでこのことに気が付かなかったんだ？」

暫くして、漸く変身能力のことを思い出したリムルは、お馴染みスライムの姿になって無事脱出することに成功した。

元々スライムなのに、焦るとどうもその事を忘れてしまう……というのは、本人の言である。

リムルが抜け出してきた頃には既に勝敗は付いており、転がるゲルドに切っ先を突きつけているミクの姿が見えた。

「それにしても、仮にも魔王だつていうのにそれをあつさり下すとか。本当に人間か、あの子？」

《解。魔素の量は圧倒的に凌駕していますが、見た限りは人間のようです。勇者と呼ばれる類いのものかも知れませんが》

「はー、勇者か。確かに勇者なら魔王なんてやつつけそうだけど、あの子が勇者ねえ……」

納得出来ん。と言うのがリムルの正直な気持ちだった。

あんな何処か抜けた子に倒される魔王も不憫である。

まあ、実際の戦闘能力はとも高いみたいだから、なんとも言えないけど。そのため息を吐いたリムルは、二人のもとへと近付いていく。

ミクの仲間らしき鬼人と何事か話しているのを見つつ、リムルはふと疑問に思う。

上位種って、そうぼんぼん出てくるものなのか？

《解。本来であれば、上位種が複数同時に存在することは非常に希です。自然発生したものではありません、名付けによって進化したものと推測できます》

ふむ、とリムルは大賢者の答えを聞いて考える。

もし仮に自分のように名前を付けていたとして、あの鬼人は何処まで強化されているのか、と。

力の強いものが名を与えれば、それだけ名を付けられた側は強くなる。

それは詰まり、目の前の魔王を遙かにしのぐ少女が名付けを行えば、とんでもなく強い鬼人が生まれても不思議ではないということだ。

《告。しかし、名付けを行えばその分力を消費します。特別な事情がない限り、名付けを行っていただければ相当の弱体化をしているはずです》

ん……それもそうか。俺が特別仕様なだけで、名付けって自分の力を分け与える行為だもんな……

成る程確かに、トリムルは納得する。

よくよく見てみれば、ミクの隣にたっている鬼人もそこまで強くは……いや、紫苑と一対一なら良い勝負か？ 等と考察していると、ミクがゲルドの胸元に刀を突きつける。

何かを思う暇もなく、その切っ先がゲルドの胸に沈んでいった。

当然の帰路か、トリムルは無感動にそれを眺める。

オーク<sup>豚</sup>デイズ<sup>頭</sup>スター<sup>魔</sup>として暴れ、森を荒らし、他種族を食い荒らしたのだ。それがどんな理由であれ、生かされる理由にはなり得ない。

終わりだな、そう思い未だ続く戦闘を集結させようとミック達から意識を逸らしたとき

「——ツ?!」

周りの空気が震える。

《告。対象の魔素が大幅に上昇したことを確認しました。警戒してください》

そんなの分かってる！ あいつ、まだ奥の手を残していたのか！

ゲルドの魔素量が急に上昇したのを察して、リムルは慌てて振り返る。

ゲルドがミックを油断させ、奥の手を行使したと思ったのだ。

相対しているはずのミックは、何があったのかその力を大きく減じてしまっている。

このまま襲われたら。そう思いミック達を視界に収めたリムルは、この日何度目か分からない惚けた声を上げることとなった。

映ったのは、その身を縮ませ人間大としたゲルドと、その目の前に立つどことなく青白い顔をしたミック。

一体何があったのか。それはゲルドの種族を解析したことで理解する。  
オイクエンペラー  
 猪人皇帝。

多少劣るものの、オイクデイザスター  
 豚頭魔王にすら迫る力を持ち、記録にすら残されていない伝説中の  
 伝説。

そんな存在を生み出したのは……目の前にふらふらと立っているあの少女なのだろ  
 う。

「……もう、何があっても驚かない自信があるよ」

そんな悲しい自信を得たリムルは、ため息を吐きつつ戦闘の終結を声高らかに宣言し  
 たのだった。



「——何故だ。何故俺を助けた？」

唾然としながらそう訊ねられて、私はその言葉の意味を考える。

そして、考えるまでもない解答に行き着いた私は、何でもないかのように告げる。

「別に私は、誰も助けてなんてないよ？ 私は、すっかりきつちり魔王ゲルドを殺したわけだし」

「だが、俺はこうして生きている」

「うん、君はそうして生きてるね。だけど、魔王ゲルドは死んだ。これは確かなことだよ」

「……」

そう、私に心臓を貫かれて魔王ゲルドは確かに死んだ。ゲルドという名を持つ魔物はもうこの世におらず、そして輪廻に帰ることもない。

今私の前にいる魔物は、私が名を与えたゲルドではない別の命。



私は命を救ったのではなく、産み出しただけなのだから。

これなら、オークロードを倒して欲しいって願いも叶えられてるし、実際一回殺してるし、そして仲間にも出来るっていう素晴らしい寸法な訳ですよ。どう「妄想」、私の素晴らしさに声も出ない？

《いや、なんとというか……時々君がアホなんだか、そうじゃないんだか分からなくなるよ。因みにいうけど、そろそろ君も声出せなくなるからね？》

え？　なんで？

《名付け。魔素低下。導き出される答えは？》

……あつ。

そういえば忘れてた、なんて事を思う暇すらなく、私の膝から力が抜ける。

ストーン、となんの抵抗もなく地面に膝をついた私は、勢いそのままに倒れ込む……寸前で、目の前の新しい仲間に使われた。

「疲れたのか？ いや……力を使いすぎたのか。暫く休むと良い」

「あー、うん。そうするね……」

私を支えてくれた、元魔王……そして、これからはソキウスと名乗ることとなる仲間の言葉に従って、私はゆっくりと意識を闇に沈めていった。

完全に沈みきる前に、ふと疑問に思う。

あれ？ 私、名付けする度に気を失ってない？

返ってくる答えは、なかった。



こうして、オークロードによる種の存続を掛けた戦争は幕を閉じ、過程で生まれた新

たなる魔王やそれを打ち倒した少女を置き去りに、戦場だった場所には喜びや悲しみが満ちあふれる。

途中、小さな牙狼族の子供が光とともにガビルとゴブタを引き連れて現れ、それをみつけた巨大な牙狼族が暴れるなどの一悶着があつたりしたのだが、それを深く触れる必要はないだろう。

そして、戦場に着いてからひっそりとその消息を絶つたコボルドの少女についても触れる必要はないだろう。何故かって、戦場の異様な光景に泡を食つて気絶してしまつただけなのだから。

兎にも角にも、争いは終結し、その事後処理をのこすのみとなつたわけだった。

「さて、と……」

次の日、湿地に張られたテントの一つにて、とある会議が進められていた。

そこに居並ぶは、オーク側の生き残り、リザードマン達、ドライアドや鬼人、果てはスライムに至るまで、実に混沌とした顔ぶれだ。

中でも異彩を放つスライムが発したその言葉に、会議の場に緊張が走る。

そう、スライムことリムルがこの会議の中において最も発言権を持つており、誰もが

その言葉に注目した。

「オークに対しての賠償の請求だが、俺としてはこれは行わないものとしたい。理由は色々あるが……昨日から調べてみた限り、オーク達には侵略をおかさなければいけないくらいに重大な問題があったみたいだ。勿論、それで侵略が正当化されるわけじゃない。されるわけじゃないが、全ての罪を背負ったと豪語したゲルドはもう死んでいる。俺としては、ゲルドが責任をとって死んだって形にしたいんだけど……」

そう言って、リムルは周りをぐるりと見回す。

リムル配下の者達は、主であるリムルの言葉に反論など有ろう筈もなく。ドライアドやリザードマン達も、特に異論はない様子だった。

驚いているのは生き残ったオーク達。

根絶やしにされても文句の言い様がない程のことをやったという自覚があったために、オークジエネラル等は己の命一つでどうか許してもらえないかと算段を付けていたほどだった。

それが、無罪。

オーク達は如何して良いのか分からないといったようにお互いに顔を見合わせ、それ

からリムルから視線を外しその後方を見やる。

「……」

リムルも同じ方向に視線を送ると、そこに居たのは今回の戦いにおける真の立役者。本来なら、彼女こそが会議において最も発言力をもつて然るべきなのだ。

そうなっていないのは、彼女自身がそれを辞退したから。

一度眠りについた彼女が目を覚ました時、リムル等は真つ先にそのもとを訪れ会議への出席とオークの今後について決めるよう頼んだ。

初めは面倒臭がり、会議への出席すら拒んでいたのだが、何度か頼み込むとある条件と引き替えに会議への出席を受け入れた。

「……これで、良いんだよな？」

「うん。ありがとうリムルさん」

やや眠たげな顔をリムルに向け、少女はそう微笑む。

それを見て、この決定が夢ではないと漸く実感したのかオーク達の間には安堵と喜びの感情が渦巻く。

厳正な会議の場だと心得ているのか騒ぎはしないものの、初めと比べて重苦しい雰囲気は一転し、それぞれと落ち着きのない様子のもので存在した。

それを眺めながら、リムルは今回の決定について考えを張り巡らせていた。

『オーク達に戦争の責を問わない』ミクがリムル等に提示した条件がそれだった。

それを一度引き受けたものの、オーク達が完全に悪だった場合は今後の関係共々考えなければいけないと、リムルは独自に今回の侵攻の原因を探った。

その結果が、大飢饉と税による飢えの恐怖。

食べるものを失い、身を守ってくれる庇護も失い、タイミング良く生まれたオークロードという旗印の下に、何かしらの行動を起こさなければならぬ状態だったのだ。

生きるための行動。その手段はどうであれ、必死に生にすがろうとしたもの達を厳罰にするつもりなどリムルにはなかった。

寧ろ、それを助けたいとまで考えていた。

「……さて、みんな聞いて欲しい。賠償などは一切行わない。だからこの話はこれでおしまい。それで、次にオーク達の今後についてなんだけど……」

だから、少しばかり融通することに決めたのだった。



「なあ、本当にもう行くのか？ もうちよつとゆつくりしていても良いんじゃない……」

「ううん。リムルさんも皆も忙しそうだし、邪魔しちやったら悪いよ。それに、私も冒険者として色々報告したりしなきゃいけないからね」

「そうか……俺達は今町を作ってるんだ。もし良かったら、そのうち訊ねに来てくれよ」  
「町作り？ 結構おつきな事やってるんだね……うん、そのうちお邪魔させてもらおうことにする」

それじゃ、と手を振ってリムルさんに別れを告げると、そのまま背を向けて歩き出す。結局あの戦いから三日もお世話になっちゃったけど、色々と慌ただしそうな雰囲気だったし、なにより結構切羽詰まっているようすの食料をわけて貰うのは忍びない。私は食べなくてもなんとかなるんだけど、他の面々はそうもいかないから早々に離れることに決めたのだ。

私が意識を失った後、たった数時間で意識を取り戻すことが出来た。

なんでも、私の体がこの世界に馴染んできた証拠らしいんだけど、そういった実感はあんまりわからないからいまいち納得いかない。

「ほんとに、ほんとーに。あの時は頭がどうにかなったんじゃないかと思っただです！  
漸く周りが見えるようになったら、おねーさんも誰もいないですし……」

「本当にごめんって……うっかり君のことを忘れちゃったんだ」

「うっかりで済むレベルじゃないです?! そのうっかりで貴重な命が一つ散るところだったです！」



出発してからこの方、こんな感じでコボルドの子にずっと文句を言われ続けている。いやまあ、置いてっちゃったのは正直悪いと思っただけ。連れて行つてたとしても逆に危なかったかも知れないし……

対応に困って、適当にあやしなからシロガネ達へと救援を求める視線を送ろうとする。

皆で対応すればなんとかなるはず、さあ共に猛る小狼を宥めよう。

「さて、と。貴様は主様の配下の中では一番の新顔な訳だ。それは理解しているな？」

「ふむ……？　まあ、つい先日仲間になったわけだから、そうなるだろうな」

「よろしい。主様の温情により特別に名を授かったんだ。今までの貴様に対する色々は全て水に流してやる」

「お、おお……？　助かる……？」

「それで主様をお世話する順番についてだが、貴様は私とカイ殿の後に三日だけ手番を

譲つてやる。その間に精々主様のお世話に励むことだ」

「は……？ いや、世話つてなんの話しだ？」

「貴様……三日は不服だと言いたいのか？」

「いや、そういうわけではなくてだな……」

「いいか？ 本来なら貴様などに主様のお世話など務まるはずもないところを、主様が仰る家族となったために特別に時間を割いてやっているんだ。もし貴様の世話が至らぬものであったなら、即座に切り捨てるからそのつもりで居ろ」

「待て待て、俺の話しを……いや、悪かった。わかったからその刀をしまえ」

駄目そうでした。

何故か先輩顔のシロガネが、新人いびりじみたことをしている光景を見てしまい微妙な顔つきになる。

その後ろに控えるカイも、当然といった顔でそれを眺めるにとどめているし。

「えつと……そう。君にはまだあの戦場ははやかったと思うんだ。まだ戦い慣れしてないでしょ？」

救援を求めることは出来なさそうだと判断して、私は仕方なくコボルドの子に向き直り説得を試みる。

シフはどうしたって？ 私の頭の上で気持ちよさそうに眠ってるよ。

大丈夫。私なら出来るに決まってるさ。

「そんなことないです。コボルドの中で貴重な戦力として、それなりに場数は踏んでるです」

「あー……いやでも、オーク兵達が怖くて竦んでたんじゃないの？」

「オーク共はそんなに怖くなかったですが、あつちこつちでどーんどーんとオーク共が吹き飛んでいて、そつちに巻き込まれたらと思つた方が怖かったです……」

「そ、そっか……」

巻き込まれたら、なんて思ったら確かに怖いなど納得する。

なにせ、至る所でリムルさんの配下達やシロガネとカイが暴れ回っていたわけだし、コボルドを巻き込まないようになって配慮などしてるとも思えない。

そう考えると、文句を言いたい気持ちも分かる気がする……

「まあでも、何事もなく良かった。ところで、この戦いでなにか収穫はあった？」

「収穫ですか。置いてかれた上に、敵にも味方にも攻撃されかねない状況でなにを収穫するんだって話ですが……」

「あ、あはは……それもそうだね……」

「……でも、一つだけ分かったことがあるです。世界はまだまだ広くて、自分の力に驕ってるだけじゃ越えられない壁もあります」

そういつて、少しだけ寂しそうに笑うコボルドの子。

きつと、この子はコボルドの中では相当強い部類だったんだと思う。

それがこの子の自信となつて、同時に枷にもなつてるのかも知れない。

ここまで付いてきたのも、色々なものを見るため。コボルドの行商について行つてるだけじゃ、決して見ることでできないものを。

「……どうだった？　ここまで付いてきてみて」

だったら、これだけは聞いておこう。

この子が己で見たものをどう捉えたのか。

広いと評した世界を見て、どう思ったのか。

「……おねーさんも、他の皆も。なんというか凄くて、とても太刀打ちできないなつて思つたです。というより、滅茶苦茶過ぎです。なんなんですか、あれ。あんなの、コボルドつていう種族が一生を掛けたつて、足下に及ぶかも分からないくらいです」

ジト目で見つめられ、苦笑いするしかない私。  
多少というか、物凄くずるしてるから、この子にはとても申し訳なく思う。

「——でも、楽しかったです。いつか並び立ちたいって、超えてみたいって思っただです。それが、叶うことのないことだって分かっていてもです」

「……そっか。叶うといいね？」

「おねーさんに言われると、嫌みにしか聞こえないです……」

「え？ あ、えつと。そ、そんなつもりじゃ……」

「分かってるです。ほんの冗談です」

くすくすと笑いながらそう返すコボルドの子を見て、私も少し頬をほころばす。  
ふっ、上手く話題を逸らすことに成功したわけですよ。私って実は天才だったり。

《何言ってるんだか……結果的にそれただけで、狙ってやってるわけじゃないくせに》

あ、そういうこと言う？ 言っちゃうんだ？

私が狙ってやったわけじゃないって、「妄想」しんゆうはそういいたいわけですか。

《違うの？》

いや、まあその通りなんだけどね。

適当に話し繋げてどうしようか考えてたら、いつの間にか話題の方向性が変わってたんだ。

でも、変わったことには違いないんだし、別にいいよね。終わりよければ全てよし。

「後ろの喧噪は置いておいて、さっさと戻ろっか」

「あれ、そのままでもいいんです？ 物凄い勢いで斬りかかられてるですが」

「大丈夫大丈夫。いくらシロガネだつて本気で殺しにはいかないだろうし、近くにはカ

イも居るから」

「はあ……そうですか」

「そうなの」

コボルドの子を促して、足早にその場を去ろうとする。

だって、このままここに居たら絶対あれに巻き込まれる気がするもん。

まあ、私が巻き込まれるならいいにしても、この子まで巻き込まれたら何が起きるか分からない。

だから、さっさと立ち去るのが吉なのだ。

シロガネ達も、飽きるか満足すればあとから追いついてくるだろうし、それを待ちながらゆっくり歩いていけば良いや。





大きく、また様式と外観に重きを置いた屋敷の中。その中でも、特に贅をこらして整えられている部屋。そこに数人の影が集められている。

正に豪華絢爛、その部屋に集められた美術品、嗜好品の総額だけで一体幾人の人間が一生を遊んで暮らせるのか。

その中であつて、しかしその雰囲気にもまれないのが今この部屋に集められている人物達だ。

それぞれが独特の、そして確固たる威圧感を放つ者達。周りの者から『魔王』と呼ばれる存在。

そんな彼等が集まって何をしているかといえ、只一心に水晶を覗き込んでいる。といつても、別にそろいもそろつて水晶占いをしているなどということではない。

彼等が覗き込んでいる水晶には、なんらかの映像が流れていた。

やがて、集まっている魔王達の中でも比較的小さな体躯を持つ者が、興奮したような声を上げた。

「なんだ、やるではないかゲルミュツドの奴！ 最期にこんな面白い見世物を残すなんて！」

「確かに、な。計画が失敗したって聞いたときは、なんて無能な奴だと思っちゃったが……はん、これだけ上位魔人がいちや、奴には荷がかちすぎだな」

「ええ、オークロードがこの後どうなったか、それは分かりませんが……」

「……生きていれば、確実に魔王に。負けていても、この上位魔人達を引き込めばいいという訳ね」

背に羽を有する魔王がそう指摘すると、水晶を用意した魔王が鷹揚に頷いた。

彼等にとつて、ゲルミュツドを失ったことはさしたる損害ではない。

ゲルミュツドが負っていた任——新たな魔王を誕生させるといふ、その仕事さえ完遂していれば生き死になどどうでもいいような取るに足らない存在なのだ。

オークロードがどうなつていようと、彼等にはうま味しかない方向に転んだのだから、ゲルミュツドはよくやった方だろう。

「しっかし、わかんねえ。上位魔人達はいいにしても、あの人間は一体何者なんだ？」

「……それは、わかりませんね。彼女からは特に強さというものを感じませんでしたが。ミリム、あなたはどうでしょう？」

そう言いつつ、ちらりと視線を動かす魔王。

問われた小さな魔王——ミリムは、その顔に大きな笑みを浮かべて、その場にいる魔王達に向けて楽しそうに告げるのだった。

あとがきに転生する？

✓ Yes

No

## 幕間の物語

## 一 悶着

カイが二日で駆け抜けた道を、ゆっくり歩きながら一週間が経過した。

一向にたどり着かないばかりか、道中の三分の一にも到達してないと聞いてカイの足の速さに感心したりしたけど、流石にこれ以上ゆっくりしても居られない気がする。

と言うわけで、カイにお願いしてさっさと向かおうとしてるんだけど……

先程から聞こえる悲鳴と打撃音から目を逸らすよう、カイに話しかける。

「えっと、カイ？ 流石にかわいそうだから、背中に乗せてあげられないかな？」

「無理です、ミク様。背に三人も乗せているので、流石にスペースがありません。奴は新人ですし、硬いので大丈夫でしょう」

「うーん、そうかも知れないけど……うーん……」

悩んでいると、後ろからドスンと一際大きい音がして悲鳴が響く。

後ろに目をやれば、丁度一抱えほどもありそうな太さの木がへし折れて倒れるところだった。

カイから伸びるロープ。その先から悲鳴は聞こえてきて、打撃音も同様の方向から聞こえてくる。

まあ、それもそうなんだけどね。だって、カイが結構なスピードで走ってるのに、このロープの先にはソキウスの身体が繋がってるわけだし。

カイが木を避ける度に、ソキウスの身体が遠心力に振り回されて木とか地面に打ち付けられて、それはもう悲惨なことになってる。

本当にごめん。でも、私にはどうにもできないみたい。

「ちよ、とまつ！ 砕ける！ 身体砕ける！」

「何を言う。それくらいならば、貴様の耐久力と回復力でどうとでもなるだろう。此方にはか弱い女子供しか居ないんだ。貴様が身体を張れ」

「か弱い?! 馬鹿言うな、そのコボルドは良いとしても、お前とミクはか弱いとはほど

とお痛い?!」

「ふん。貴様には女を尊重するという考えがないのか？　そもそも、主様をそんな目に遭わせられるわけがないだろう、戯けが」

「いや、ならお前が代わってくれ！」

「断る。ああ、それともうそんな目に遭わなくても済むぞ。主様を呼び捨てにした貴様には教育が必要だからな」

「は？　何で刀を振り上げて……いや、待てロープは斬るなああああ……」

叫び声が遠ざかっていき、直後なにかにぶつかつたような鈍い音を響かせて辺りが静かになる。

知らない。後ろで何があつたかなんて、私知らない。

まあ、数日くらいしたら追いついてくるでしょ。この辺りにはソキウスが勝てないよ  
うな魔物も居ないことだし。

「ふう……お騒がせしました、主様。これでしばらくは平和になるでしょう」

「あ、うん……えつと、あんまり虐めちゃダメだよ?」

「虐めるなんてとんでもない。奴には良い薬となったことでしょう。第一、主様に対してあんな態度をとる奴には、仕置が必要ですから」

さも当然、といった顔でそんなことを言うシロガネに、やや諦めの念を抱きながら曖昧に微笑む。

なんとというか、シロガネの反応は過剰に過ぎる気がする。

いつか、この反応がなにかに災いしそうだけど……まあ、そのときになったらそのと  
きに考えればいいか。

取り敢えずは、ソキウスが無事に追いついてこられることを願いつつ、コボルド達の下へと帰らなきやね。



ソキウスがはぐれてから一日と経たずに、ゴボルド達が一時の拠点としてある場所まで帰ってきた。

私達を見るなりにわかにはざわつきはじめたゴボルド達をなんとか纏め、説明するために主要な数人を連れて会議を始める。

「——と言うわけで、色々あったけどオークロードの討伐には成功したよ。だから、もう脅える必要はないからね」

「おお……！　ありがたい、これで我々も脅えることなく過ごすことができる！」

「これも、ミック様のお力あつてのもの。我々にできることなれば、何なりと」

「え？　いや、別に報酬が欲しくてやったわけじゃ……」



「いいえ、それでは我々の面目が立ちません。我らは商人を生業とするもの、欲しいものがありましたら何なりとご用意致します！」

勢い込んで言ってくれるのは嬉しいけど、本当に欲しいものなんてないんだよね……でも、なにか要求しないと納得しないみたいだし、どうしよう……と、ふとあることを思いついてコボルド達を振り返る。

「それじゃ……この子を、暫く私達と一緒に行動させてくれない？」

「ルトを、ですか？」

ここで驚愕の事実。なに、この子固有ネーム名持トちだったの？

あ、でもなんかそれらしい発言はちらほらしてたし、スーパーコボルドって単純な自称だと思ってた……

お互い戸惑いで硬直してたけど、私の方が先に立ち直る。

このままだとずっと見つめ合ってそうだし、名前があるなら呼びやすさこそあれ、別に不都合はないからね。

「うん。この子は、もつと世界を見て回ったそうだったし……大事な護衛役かも知れないけど、どうかな？」

「成る程。そういうことでしたら、是非連れて行ってください。幸い、ルト以外にも戦える者は僅かながらですが居ます。ですので、護衛役には困りません」

「ま、待つです！ 私には別に、いきたくないなんて一言も……」

ルトが慌てたように口を挟むけど、集まったコボルド達に視線を向けられると、もごもごと口籠もる。

それに呆れたようにため息を吐いたコボルドが、少しジトツとした目でルトを見据えた。

「ああ、言い間違えたな。寧ろ無理矢理にでも連れて行ってほしいくらいだ」

「へ……な、なんでです……？」

「いや、だってお前。強いのは認めるけど、お前が護衛に付く時つてろくなこと起きないし」

「そうそう、余計なところに首突っ込んでくから寧ろ危ないし」

「この前だつて、ショートカットだなんだつて巨大妖蟻ジャイアントアントの縄張りに突っ込んだし」

「護衛が付くと逆に危険とか、なんだよその矛盾」

「あう……」

凄い。ここまで散々に言われるとか、どれだけ問題児だつたんだろう。

まあ、聞いている限りだと明らかにルトが悪いんだけどね。というか、巨大妖蟻ジャイアントアントに追われてたのつて自業自得だつたんだ……

何も言い返せないルトが、殆ど涙目になった頃に漸く言いたいことを言い切ったのか、コボルドたちが良い笑顔を浮かべる。

もうなんの憂いもない、そんな笑顔のコボルド達のうちの一人が、私に視線を移すと深々と頭を下げる。

それに倣うように、その場にいたコボルド達がそろいもそろって頭を下げると、下げた視線を上げないまま言葉を発する。

「問題しか呼び込まぬ厄介者ではありませんが、ミク様の下に居れば少しは更正もするでしょう。ですから、どうか宜しくお願い致します」

口には出さないけど、その態度でどれだけルトのことをこのコボルド達が想っているのかが分かった。

ルトもそれに気が付いたのか、違う意味で言葉を詰まらせながら私とコボルド達を交互に見る。

「本当に……本当に、いいのです?」

「ああ、行ってこい。本当に腕を上げるまで、帰ってこなくて良いからな」

「いや、腕を上げなくても良いから、その性格を改善してこい」

「元気でやれよ。お前が居ない間にこっちは平和を謳歌してるからな」

口々にそう言いつつ、ルトをばしばしとはたくコボルド達。

はたかれてるルトはというと、ただ感極まったような表情でこくこくと頷いてる。

そして、ぱつと私に向き直ると真剣な面持ちになる。

「不肖ルト、おねーさんの元で世界をみたいと思ったです！ ですから、今後も宜しくですー！」

「うん、よろしくね。そう言えば名乗ってなかったけど、私はミク。それで……」

「私の名はカイだ。よく覚えておくように、小さきものよ」

「主様に、シロガネという名を授かった。くれぐれも主様に無礼は働くなよ？」

「シフだよ！」

それぞれ名乗り終わると、ルトは改めてコボルド達の方を振り返り、何事か話し出す。それを眺めながら、なんだかんだで大所帯になつてゐるなと思いつつ、これからの行動指針を立てていく。

フューズさんに調査報告というか、色々と報告しなきゃいけないわけだし、人の多いところに行くならカイには影に潜つてもらおうとして、ルトとソキウスはどうしよう……まあ、ルトはコボルドだからそんなに問題はないと思うけど、ソキウスは人間って言い張るには微妙な体躯だし、そもそも顔が人外でしかない。

まさかソキウスも影に潜れるとは思えないし……あれ？　これ、ソキウス置いてった方がはやくない？

い、いやいや。流石にそれは仕打ちがかわいそうだし、他の手が何かあるはず……  
……うん、全然思いつかないや。なんか目深にかぶれるフードかなにか渡しておけば良いかな。

肝心のソキウスは今居ないけど、追いついてきたら渡せばいいか。顔が隠れるフード付きのマントでも後で作っておこう。

そんなことを考えてたら、いつの間にか話を終えたのか、ルトが一人のコボルドと共

に近寄ってくる。

「おねーさん、隊商の皆が色々祝いたっていつていつてですから、祝われてくれないですか？」

「祝い、といつてもささやかなものですが。何分手持ちがないため、ありつただけの食料で  
ごちそうを作ります」

「それは、有り難いけど……でも、そんなに食料使っちゃったら君たちが食べる分がなくなるんじゃないの？」

「ご安心を。空腹には慣れていきますから」

にこりと笑いながら言ってるけど、いやそれ安心できる情報じゃないよね？

あんまり気が進まなかつたけど、是非にと言われて断るのもあれだし、後でルトがあれはコボルトなりのジョークだと教えてくれたから安心した。でも、本当に空腹慣れしてそうジョークとしてはどうなんだろう。

取り敢えず、今日は大人しく祝ってもらうことにして、腰を落ち着けることにした。よく考えればソキウスが合流してくるまでここから動かない方がいいし、結局は彼らのお世話になっていたから今更なんだろうけど。

コボルドたちが腕を振るって作ってくれた料理を食べながら、ソキウスはいつ頃合流できるかなとそんなことを考えたりしていた。

コボルド達は手先が器用なのか、出される料理は全部美味しいし、心配してた食料もシフとシロガネが率先して獲ってきてくれたから問題は無かった。

でも、だからって周囲の動物を根絶やしにするくらい捕ってこなくてもいいんだよ？ 渡されたコボルド達も最初は笑顔だったけど、どんどん渡されるうちに笑みが引きつってたし。

何故か暴走気味だった二人を適度にたしなめつつ、コボルド達が催してくれた小さな宴会は夜が更けるまで続いた。

あ、結局ソキウスが合流したのはそれから二日後だった。

シロガネは遅いと文句を言ってたけど、十分早いほうだったんじゃないかな……





ソキウスが合流してきてから一週間とちよつと、私たちはブルムント王国に到着していた。

まあ、ブルムント王国っていつてもただ単にその領地だつてだけで、今居るこの場所はど田舎もいい方だけどね。

見た限り、野菜を栽培したり動物を飼つていたり、のどかな農村つて雰囲気の所だ。田舎が悪いっていうつもりはないし、実際良いところなんだけど、私はここに用事があるわけじゃない。

取り敢えず、フューズさんはここブルムント王国の支部にいるみたいだから、顔を出して報告をしなきゃいけないんだ。

うん、それなのにどうしてこうなってるんだろう？

「嬢ちゃん！ どうだ、うちで一泊してかねえか！」

「あ、えつと……宿は間に合ってますというか……」

「馬鹿野郎、まだ昼時だつてのに宿の話なんざするな！　ここは一つ、俺たちと依頼をこなしちゃくれないか?!」

「依頼と言われても……」

「そんなことより昼時といったら飯さね！　どうだい、うちで食べてかないかい！」

「行きますー！」

「うおお?!　嬢ちゃんの連れが食いついたぞおおおお！」

掛けられる言葉を適当に流しつつ、私は大きなため息を一つする。

ここに着いたときに、フューズさんのいる支部の場所を聞こうと冒険者っぽい風貌の人を探したんだけど、田舎ゆえか全然見つからなかった。

粘って探し続けた結果、漸く依頼クエスト帰りらしい人を見つけ話を聞くことが出来た。

そのひとから色々聞いて、ここがブルムント王国でフューズさんはもつと首都の方にいるってことを知った。

「ここからその首都って、どのくらい掛かります?」

「馬車で五日ちよいつてところじゃないか? 詳しいのはちよつと分らんが」

「そつか……ありがとうございます」

「いや、良いけどよ。ところで、お嬢ちゃんみたいな歳の子が支部長なんかになんのよう  
だ? 連れに、コボルドまでいるみたいだが」

「あ、えつと。フューズさんから頼まれごとをされてて、その報告に。この子はその……  
知り合い?」

「コボルドの知りあい……つてか、支部長直々に頼み事……? あー……お嬢ちゃん、ラ  
ンクはいくつだ?」

「ランク?」

「証明書貫ライセンスつたときに、EだのFだの言われたらどろ？」

「ああ……えつと、Bランクだったかな？」

「……わるい、よく聞き取れなかった。エビがなんだつて？」

「エビじゃなくてBつて言ったんだけど……」

「聞き間違いじゃない、だと……ッ Bランクつて、マジかよお嬢ちゃん！」

私の言葉を聞いたその人が、大声で素っ頓狂な声を上げると周りの人がなんだなんだと集まってきた。

その人達に向けて、私のした説明をオウム返しのように話したとたん、さっきの勧誘やらなんやらが始まったわけだ。

なんでも、Bランクの冒険者なんて辺境のここでは滅多に見られるものではなく、色々話を聞きたいそうなのだ。

まあ、適当にソキウスとの戦闘周りの話でもしてればいいか……

「おいおいおい！　ちよつと待てよ、そのちまつこいのがBランクだ？　なんの冗談だよー！」

取り敢えず、食事の話になったとたん目の色を変えて返事をしたシロガネには後でお説教かな、なんてことを考えていたら、突然周囲の声を上回る大きさでけんかを売られる。

まあ、こんな見た目で冒険者ですつて言われて素直に信じる方が変なのかも知れないけど。

というか、なんでこの人達はあつさりと思ってくれたのだろうか。

そんなことを思っただけなら、その言葉で落ち着いたのかざわざわと声を潜めて喋りはじめていた。

聞き耳を立ててみるに、どうやら私が本当にBランクなのかどうか、という憶測を飛ばし合ってるみたいだ。この人達、ちよつと純粹すぎじゃないだろうか。

「本当にBランクなら、ライセンス証明書を見せてみる！　そうしたら、信用してやらんこともな

「い

「えっと、その証明書？　って言うの、私持ってないんだけど……」

「……ッ　ほら見ろ、本物の冒険者が大切な証明書を置いてくるわけがない！」

「えと、置いてくるって言うか、貰ってないんだけど……」

その一言で、私にけんかを売ってきた人は一瞬惚けたような表情をした後、安堵の雰  
囲気を漂わせながらその顔に笑みを貼り付けた。

「はっ。貰ってない、だ？　こんないい加減な嘘は初めてだ！　誰だって、きちんと発行  
してもらってるだろう?!」

そう叫び、大仰に群衆に振り返る。

それに、冒険者らしい人たちが何人か頷くのを見て、けんかを売ってきた人は笑みを  
浮かべて私に向き直る。

「どうだ、といわんばかりの笑みを見せつけられても、私はどうにも……」

「というか、フューズさんこれどういうこと？ 証明書とか初耳なだけど。」

「そんなものを発行してる時間があつたかと言われればそんなことはないんだけど、それでもなにか応急措置的なものが欲しかった。」

「まったく、冒険者はお前のようなガキが語って良いものじゃないんだ。大方、持てなしのただ飯でも期待してたのか？」

「貴様……言わせておけば、主様のことを好き勝手に……良いだろう、そんなに死にたければ今すぐ叩っ切ってやる」

「シロガネ、いつもいつてると思うけどすぐに事を荒立てようとすの止めてね？ あと、殺しちやだめだからね？」

「しかしミク様、奴の愚慮は万死に値するものです。シロガネにサクツとさせた方が良いのでは」

「カイも落ち着いてね? なんにしても駄目だからね?」

シロガネや、影の中のカイを慌てて宥めながら、私は他の仲間達にも気を配る。

流石に、全員を宥められる自信は無いんだけど……

幸い、ソキウスとシフは若干怒気を滲ませながらも、自制してくれてるようだった。これならカイとシロガネを宥めるだけで事足りるや。

え、ルト? シロガネ達の殺気に震えて、私の影に隠れてるよ。

「は、はん。仲間の程度も知れるな。これ以上の痴態を晒す前に、去った方が良いんじゃないか?」

「出来るか。今すぐ主様に非礼をわび、悔い改めて地面に這いつくばれ。それを見届けてから去るとしよう」

「悔い改めてだ? なんで冒険者を語る偽物にそんなことをしなきゃいけない?」

「……ふむ。よし、そこを動かすなよ。今からそつ首落として——」



「はいはい！ シロガネはちよつと黙ってて！ どんどん事が荒立ってるから！」

本当にやりかねない雰囲気、シロガネを押し留めて、私は一步前に入る。

なんかもう、放っておいたらシロガネが殺しちやいかねないから、多少手荒でも話に決着を付けなきゃいけない。

私は正面からじつと見つめると、一つ提案を持ちかける。

「えっと、証明書は持つてないんだけど、腕を見せることなら出来るよ？ だから、模擬戦で勝負して勝ったら信じて貰う、じゃだめかな？」

「は、はあ？ なんで俺がそんな面倒なことしなきゃ……」

少し慌てたように言葉を重ねようとするけど、その前に周りの人垣から同意を示す言葉が漏れ聞こえてくる。

「それなら、良いんじゃないか？ 腕が良ければ、たとえ今冒険者じゃなくなつてすぐな

れるだろうし」

「そうだそうだ、強けりや冒険者を騙ってようが一向にかまわん」

けんかを売ってきた人が、少しだけ困惑したように周囲を見回す。

まさか周りから同意の言葉が漏れるとは思ってなかったんだろう。

まあ、実はこれにはちよつとしたずるが含まれて、私の思念操作で人垣の何人かの意識に介入して、意図的に同意の方向に話を持っていったのだ。  
マインドコントロール

流石に元々否定的な意識を持つてる人には意味ないけど、どっち付かずで迷ってるのを片方の意見に寄せるくらいなら出来る。

数人が同意してしまえば、後は集団心理だ。

たちまち周りの人達は模擬戦をするべきだという方向に話を流してしまい、けんかを売ってきた人がぱくぱくと口を開いてる。

「皆もそれでいいみたいだけど……どう？」

「……ッ　ち、分かった。だが、万一のことを考えて、鞘を使う上に寸止めを——」

「あ、大丈夫。そつちは真剣で寸止めなしで良いよ。戦いにくいでしょ？」

「は…………？ お前、俺をなめてるのか…………？」

「ううん…………？ 正当な評価だと思ってるけど…………」

「…………そうか、よおくわかった」

あれ、なんか怒らせちゃったかな？

流石に条件を対等にしたら虐めも良いところだろうから提案したんだけど、なにかが気に障ってしまったらしい。

《いや、あんな言い方されたら誰でも怒ると思うよ？ 完全になめてかかれてるって》

なめてるって言うか、向こうに気を遣ってるんだけど……

《その二つ、この場合同義だから》

そっか……どうやら悪いことをしてしまったみたいだね。

まあでも、実際問題それくらいが丁度良いと思ってるし、下手に手加減したつていう逃げ道を残したくないもんね。

「それじゃ、いつでもどうぞ？」

「……お前は、抜かないのか？」

「危なくなったら鞘を使うけど、今は徒手空拳で良いかなって」

「……直ぐに吠え面かかせてやる」

怒り心頭、といった感じで目を怒らせて、私の方に踏み込んでくる。

間合いの詰め方も、一切の迷い無く振り下ろされる剣筋も中々のものだと思っただけ  
ど、生憎私の動体視力を超えられるほどではない。

余裕を持つて構えると、刃が私に触れる寸前に劍の腹に真横から衝撃を与えて軌道をずらす。

盛大に空振りをして体勢を崩したその人のあごに向けて、軽めのジャブを放つ。

当たれば儲けもの、と思つたんだけど、咄嗟に劍を手放すことで回避されてしまった。流石に楽に勝たせては貰えなさそうだね……

「つて、早速武器を手放しちやつてるんだけど、大丈夫？」

「はっ、これで条件は対等だろ？」

不敵に笑うと、私のギリギリ届かない場所からリーチをいかしてけりを放ってくる。それを避け、間合いを詰めようとする私の進路上には既にもう片方の足が置かれてい

る。

間合いを詰めようにも中々詰められず、私は一旦距離をとった。

強引に詰めようとするればいくらでも詰められるんだけど、それをやるとどうにも力の加減が出来なさそうだから他の方法を考えなきゃ。

「ははは、どうしたんだ?! その程度の腕で、Bランク冒険者を名乗っていたんじゃないだろうか!」

「うん……手加減するには難しいなって思ってた」

「……」

あ、また怒らせちゃった。

事実を率直に告げるのはあんまり相手にとっては良くないみたいだね……

なにはともあれ、相当ご立腹の相手は右手にそつと左手を添えると、掌を私の方に向けてくる。

……いや、よく見ると私の足下かな?

ともあれ、そのよく分からない行動に私は小首をかしげる。

「そこまで舐めるなら、相応の覚悟を持っているんだろうな!」  
灰と化せ、『フレイムダンス業炎乱舞』

!」

突如私の足下に大きな魔法陣が展開されると、そこから幾条かの炎の柱が立ち上る。そして、それがうなりを上げながら互いに捻れ合うと、私めがけて一直線に突っ込んできた。

私になにかするまもなく、視界が赤一色に染められてしまった。

あとがきに転生する？

✓ Y e s

N o

## 厄介なもの

天高く上がった炎の柱が捻れ合うと、地表に向けて一直線に振り下ろされる。

その矛先が向かうは、年端もいかないうような外見をした少女が一人。

その少女は、己に向かつて伸びてくるその炎の柱を無感動に見つめつつ、逃げようともせずにその場に立ち尽くす。

逃げられないと諦めているのか、そもそも逃げる必要も無いと考えているのか。

そんな少女の考えなどお構いなしに、炎の柱は無慈悲に迫る。

やがて、それら全てが少女のそばに着弾し、周囲に爆炎が巻き起こった。

「お、おい……いくら何でも、それはやり過ぎだろ?!」

「直撃だ……生きてるかどうかも怪しいぞ!」

「お前、なんのつもりだよ!」



そのときになって漸く、我に返った人々——二人を取り囲んでいた野次馬達が、ざわめきとともに男を糾弾する。

しかし、男はいかにも涼しげな顔で周りを見回すと、野次馬達の声を遮るように片手を上げる。

「安心しろ、お前らの目は節穴か？ 流石に直撃したらまずいと思つて、至近距離で炸裂するにとどめておいたさ」

その言葉に、野次馬達はお互いの顔を見合わせると恐る恐るといった顔で男を見て、あの少女は無事なのかと訊ねた。

「さあな、生きてはいると思うが……酷いやけどでも負つてるんじゃないか？」

未だに爆炎の名残と土煙によつて視界が閉ざされたそこを見ながら、薄ら笑いを浮かべてそう言う男。

その言葉に野次馬とは少し離れた位置にいた、少女とともにいたコボルドがかみつく。

「なにが……ッ　自分が何をしたか分かってるですか?!」

「は？　おいおい、散々煽ってきたのはそっちだろ？　寸止めしなくて良いとまで言われてたのに、わざわざ直撃させなかったことを感謝してほしかったくらいだ」

「それは、剣での話しだったはずです！　魔法なんて、そうそう対処できるはずが――」

「おい、その辺にしておけルト。それ以上言ったところで無駄なだけだ」

「なッ……何でそんなに淡泊なんです?!」

「いや、何でと言われてもな……」

「そんな豚に意見を合わせるのはしやくだが、私も同意見だ。余り騒ぐと、主様の評判が落ちる」

「いやまて、何でお前俺にそんな当たりきついのか？　心当たり無いわけじゃないが、それにしたってあんまりじゃないか？」

「黙れ豚。主様の評判を落とすつもりか？」

「ひでえ……」

「つて、何遊んでるです?!　そんな場合じゃないです!」

「いや、遊んでるように見えるか？　どう見たっていじめだろこれ?」

「もういいです!」

コボルドの少女は怒ったように二人から視線を逸らすと、未だ視界が不明瞭な爆心地へと歩を進めようとする。

しかし、一歩踏み出すか踏み出さないかというところで肩を掴まれると、ぐいと引き戻されてしまう。

少女は、自分を引き戻した存在——シロガネに向けて、怒りを込めた視線を送った。

「邪魔しないでほしいです。私はこれから、おねーさんを助けに行くところです」

「邪魔は貴様だ、コボルド。主様の決闘に水を差す行為は認めん」

「そんなこと言っつて、おねーさんに何かあつたらどうするです?!」

「口を慎め。我らが主様が、あの程度のことを対処できないとでも思っているのか?」

そう言うと、シロガネは土煙へと視線を向ける。

それにつられ、ルトもまたそちらへと視線を送った。

もうもうと舞い上がっていた土煙は段々と薄らいでおり、随分と視界も明瞭になってきた。

その中であつて、未だに不透明さを持つ部分。

人型のシルエットが浮かび上がっているのを見て、ルトは漸く悟る。

この場において、あの人の仲間として……

未だに理解できていなかったのは、自分一人。  
共に戦い、又は対峙した彼等は知っていたのだ。

「……本当、でたらめすぎです」

土煙が収まる。

そこには、先と変わらない姿で男を見据える少女の姿があった。



漸く晴れた土煙にため息を吐きながら、突然の暴挙に出てきた相手の人にジト目を送る。

模擬戦と言っているのに、突然魔法をぶつ放してくるのはいかなものなのか。

いや、真剣な上に寸止めなしな時点で模擬戦かどうかは怪しいけど、だからっていきなり魔法に対処しなきゃいけないなくなったこっちの身にもなってほしい。

ばんばんと服に付いてしまった砂埃を払うと、嘩然とした表情で此方を見ているその人に肩をすくめてみせた。

「えっと、なんか格好良さそうな技を無傷で乗り切ったけど……まだやる？」

その言葉に、漸く我に返ったのか悔しそうな表情を浮かべると、静かに首を横に振った。

「流石に、今のですら届かないんじゃないや俺に勝ち目はない。大人しく引き下がるが、一つだけ教えてくれないか？ どうやって今の攻撃をしのいだんだ？」

「私のスキルに、便利なものがあるから」

それだけ言うと、ごまかすように曖昧に微笑む。

実は私がしたことといえば、「妄想」に全部対処を丸投げしてそれを眺めていたくらいだ。

ぶっちゃけてしまうなら、私も何をしたのかよく分かってない。

まあ、そういうのは「妄想」が勝手になんとかしてくるから、私が理解してる必要は無いよね。

《ねえ、自己防衛機能かなにかと勘違いしてない？　そういうの諸々含めて、自分で出来るようになっておかないといざって時に困るよ？》

う……仕方ない。今度それぞれのスキルについて、もつと深く理解するように努めよう……

「妄想」が吐いたと思しきため息を敢えて無視して、私はそう決意を固める。

「じよ、嬢ちゃん……怪我はねえか？」

「あ、はい。特になんとも」

「凄え……本人はB級っていつてるけどよ、ありや少なくともAはあるぜ……」

「ああ……なんにしても、D＋程度の俺達とは格が違うな……」

「全くだ。上の連中は果てしないなあ……」

なにやら呆れたような、感心したような、そんな微妙な視線が突き刺さってくる。しまった、完勝しちゃうのはまずかったのかも知れない。

わざと苦戦した体を示しつつ、ギリギリのところまで勝っておけば変に注目されなかったかも知れないのに……

《ここに来た時点で注目はされてたから、それは無いと思うけどね》

それもそっか……

「おねーさん、お疲れ様です」

「流石主様です。奴自慢の技を無傷で凌いでみせるとは、見えてスッキリしました」

周りで大人しく見守ってくれていたらしいルト達が、そんなことを言いながら私をね



ぎらつてくれる。

実は私は何にもしてないんですなんてことを言えるはずもなく、ルト達にも曖昧に微笑んでおく。

「そういうえば、食べに行くとかなんとか言ってた気がするけど、今から行く?」

「主様がかまわないのでしたら、是非」

「いや、そんなこと言っておきながら、さつき即決で行こうとしてたよね……」

呆れたようにそう聞くと、あからさまに目を逸らそうとするシロガネ。

ごまかしにくる辺り、さつきのこととはなかったことになっているらしい。

でもまあ、ごはんを食べることに反対する理由はない。

ここは、お言葉に甘えさせてもらおう。

あの後食べたご飯は、肉と野菜が豪勢に盛り立てる野性的なものだった。

味付けも所々偏りがあつたけど、素材そのものが良いのか全く気にならないで食べられた。

肉は、森に生息してる透明山羊インレシフルゴートから獲っているらしい。

名前通りの透明なわけじゃなくて、警戒心が強すぎて滅多に人前に姿を現さない上に、逃げ足がとんでもなく速くて捕獲するのが途轍もなく難しいかららしい。

捕獲ランクだけでいえばBにも迫るとか。

「逃げるのに特化してる動物っていうのも、珍しいよね」

《なにか一芸に特化してたほうが、生き残りやすいんじゃない？ 人間だって、所詮知恵に特化した動物な訳だし》

「それもそうだね……」

「妄想」の割ときわどい言葉に苦笑して、私は何の気なしに空を見上げる。

澄んだ空に光るは、どれだけ離れた場所にあるか分からない星々のきらめき。

決して手が届かないのに、その煌びやかな姿を私たち下々にまざまざと見せつけてくる。

そんな星々を眺めているうち、ふとこの世界に来る前のことを思い出す。

掃除の手が行き届いていない壁を見つめながら、ただ暗々と日々を無駄に過ごしていただけの人生。

人生でたった一人の理解者であつた婆が居なくなつてからは、私は一層に自分の殻に閉じこもり外と己を遮断した。

だから、こんな風に星空を眺めたことなんて無かつたし、私のことを慕ってくれる仲間と旅ができるだなんて考えもしなかつた。

私の知らない世界、もの、そんな一杯を教えてくれる皆には、感謝しても仕切れないね。

「——なんて、一人で考えててもしょうが無いか。そろそろ私も休もつかない」

何となく柄じゃないことを考えてしまった気がして、苦笑交じりに声に出してそう宣

言する。

うん、夜更かしは身体に毒だからね。この身体にそれが適用されるかどうかは置いておいても。

さて、と宿の屋根から飛び降りようと視線を下げたら、空だけでなく地上にも光るものがあるのを発見した。

人の携帯できる光源の光り方ではなく、しかし森林火災などではないもの。

ぼやーっと光っているそれは、ふっと瞬いたかと思うと直ぐにかき消えてしまった。

「なんだろう……変な光。「妄想」しんゆうあれなんだとおもう？」

《うーん、あれは……なんの光かは分からなかったけど、あの方向からおつきな魔力反応がしたね》

「ふーん？　魔力反応ってことは、何かしらの魔法を行使してたってことだよね……ちよつと、見に行ってみよっか」

腰掛けていた宿の屋根からひよいと飛び降りて、私はもう一度光が見えた方角に視線

を向ける。

もう一度光つてくれなかななんて思つて暫く見てたけど、さっきの一回だけで用事は済んでしまったのか光を見ることはなかった。

まあ、大体の場所はつかめたから別に良いんだけどさ。

「それじゃ、深夜の探索といつてみよつか。こういうの初めてだから、何だかわくわくするよ」

《ろくなことにならないと思うけどなあ……》

「それもまた経験つてことで。さあ、しゅぱーっ！」

その場ののりで、何となくかけ声をして森へと足を踏み入れる。

かけ声に「妄想」しんゆうが反応してくれなかったのが少しだけ残念だと思つたのは内緒だ。さてと、いったい何が見つかるかな……



深夜の森に、低い地響きが響く。

その音自体は決して大きいものではないが、寝静まっていた森の動物たちを起こすには十分なものだ。

ある者は音が聞こえるやがばつと身を起こし、一目散に音から逃げていく。またある者は、自らの縄張りに不快な音とともに侵入してくるものに敵意をむき出しにして威嚇する。

気怠げながらも身を起こし、こんな時間にはた迷惑な音をまき散らす不届き者に殺意すら混じった不愉快げな唸り声をあげるこの一角熊ホーンベアもまた、睡眠という至福の一時を邪魔された被害者だ。

この辺り一帯を縄張りとしている彼は、多少の幸運こそ混じっているものの生まれ持った強靱な肉体と自慢のドリルのような角で、本来一角熊ホーンベアが区分される推奨狩猟ランクより一ランク高く設定されている。

事実、彼を倒そうと襲ってくる冒険者はそれなりの数いたのだが、その悉くが振り返りに遭ってしまっている。

幸いにも死者こそ出ていないものの、一角熊らしからぬ強さに固有名持ちではないかと噂されるほどだ。

無論彼は固有名持ちなどではなく、純粹に強いだけなのだ。

それはともかくとして、今彼の縄張りに侵入してきている存在に対して、彼は今までに無いほど殺気を迸らせている。

その原因は、地響きが大きくなるにつれて聞こえてくるようになってきた、やけに甲高い耳障りな音だ。

のっしのっしと苛立たしげに地面を踏みならしながら、彼はその何処かで聞いたことがあるような不快な音をはて、何処で聞いたのだらうかと首をかしげる。

その疑問は、とうとう間近に迫ってその甲高いだけだった音が意味を成すようにはつきりと聞こえるまでになったとき、漸く氷解した。

あれは、生意気な二足歩行をする連中を少し撫でてやったときに出る音とよく似ている。

つまり、これから来るのはニンゲンであり、そいつらはなにかに追われているということ。

俺の縄張りに面倒ごとを持ち込みやがって、と鼻息も荒く憤慨した彼は、追い掛けているであろうもの共々串刺しにしてやろうと息巻いた。

そして、遂にニンゲンがその姿を現す。

甲高い音をまき散らしながらなにかから逃げるがの如く必死の形相で走っているのは、メスが一匹とオスが二匹の計三匹。

豊富な経験と天性の勘から、彼はその三人組がそれなりの実力者だということを看破する。

彼をして、下手をすれば手傷を負わせられかねない手練。この観察眼があつたからこそ、彼はこの辺りを縄張りにできたといつても過言ではない。

そんな手練が脇目も振らず逃げるとはどういう相手なのかと、彼は手を出すことを一旦諦めて見に徹する。

「ぬあああああ！ つぶねえ、マジ危ねえ！ 旦那に貰つた装備無かつたらぼっくり逝つてたかも！」

「縁起でも無いといたいところでやすが、あながちで間違いでもないでやんす！」

「ちよつとお！ 魔法が効かないのは反則じゃない?!

カバル、ちよつと試しに殴つてきなさいよお！」



「馬鹿いうなよ?! さっきはなんとかなったが、あんな目は二度とごめんだぜ! つか、それなら宝箱の代わりにあんなもの引き当てたギドが行くべきだろうがあ!」

「嫌でやんす! それに元はといえば、エレンの姉さんが何かありそうだって言うから!」

「悪かったわよう! もう、こんなのばっかり!」

彼には人語を理解するほどの能力は無かったが、それでも相当に焦っているということは理解できた。

ただ一つ、分からないのが何に追われて逃げ惑っているかということ。後ろを見て、特になにかが追い掛けてきているというわけでもない。するのは精々地響き程度。

姿が見えない類いの相手か、と彼が首を捻った直後、それを否定するかのよう追跡者が姿を現す。

ぼこり、という音とともに土の中から姿を現したのは、三メートルは有ろうかという巨大な身体と一对の鋭い角を持つ、恐ろしいほどの妖力<sup>プレッシャー</sup>を放った土竜だった。

その姿を見た瞬間、彼はきびすを返してねぐらへと戻っていった。その只ならぬ雰囲気、経験と本能が全力で警笛を鳴らし始めたのだ。

引くべきところは引く。この感情に流されない冷静な部分がなければ、彼は何度その命を落としたか分からない。

やれやれとねぐらに帰った彼は、未だ響く地響きと甲高い音を無視して眠りにつこうと奮戦しはじめた。

このたまりに溜まったストレスは、明日の狩りの獲物に晴らしてやろうと心に決めながら。

——魔物の彼が知るよしもないことだが、彼が見た土竜は人族達に固有勢力圏テリトリー持ちと位置付けられるほどの魔物で、相当の手練が複数いて漸く討伐できるか否かとされる強力な個体だった。

本来ならば自身の勢力圏テリトリーからは殆ど出ないのだが、久々にキレちまったよといわんばかりの執念深さで三馬鹿を追い掛けて外に出張っているのだ。

それを承知で手を出したのかどうかは定かではないが、今はとにかく必死の逃走劇を繰り広げているのであった。

というか、死ぬ気で走らないと追いつかれたら本当に死が待っていそうなので、冗談

を言っている場合ではないのだが。

「さ、さつき見えた光はこの辺りだったはずだ！ こんな夜中に歩いている奴なんざ、相  
当の手練に決まってる！ なんと少しでも協力させて、この窮地を乗り切るんだ！」

「合点承知でやす！ 姉さんも、探知魔法でも何でも掛けて探すでやすす！」

「も、もうやってるわよう！ これ、走りながらやるの大変なんだからね?！」

逃げる三馬鹿は、皆一様に涙目になりながら必死に協力者イケニエを求めて走り回る。

その後ろを土竜が追いかけるという、見る分にはなんとも滑稽な光景だった。

その土竜というのが三メートルを超えるほどのもので、触れたら即死亡な攻撃さえ  
放ってこなければではないが。

見えた光を放った主が自分たちを助けてくれると信じてひたすらに走り回るが、中々  
それらしい人物をみつけないことにはできない。

カバルはさすがのような視線をエレンに向けるが、その視線に気が付いたエレンは首を  
振るのみ。

それはつまり、近くに人は居ないということであって。ひいては、自分たちの置かれている状況は全くもって改善していないということだ。

このままだとジリ貧だ、とカバルは歯がみする。

前回はシズやリムルのお陰で事なきを得たが、今回手を貸してくれそうな相手はここにはいない。

装備こそ最高品質の物を受け取り、一度は命すら守ってもらったといえど、それだけでは立ち向かえるものでもない。

長く旅をしているとはいえ、生粋の前衛職のカバルや罨などの探索によつて意外と身体を動かしているギドに比べ、魔法職のエレンは体力も少ない。

今も、魔法を使いながらも足下をとられないように走るといふ恐ろしく集中力を使うことをしており、いつ限界が来てもおかしくない。

どうにかならないか、とカバルが再度歯がみしようとしたとき、ずっと難しい顔をしていたエレンがぱつと顔を輝かせて声を上げた。

「み、みつけた！　すぐ左の方に反応が！」

「おっしやあ！　悪いが巻き込ませてもらおうぞ！」

それを聞くやいなや一気に舵を左に切る一行。

必死すぎた彼等は気がつかない。それなりの範囲をカバーできるはずのエレンの探知魔法が、何故至近に近づくまで反応しなかったのかを。

がさがさと茂みをかき分け、エレンが捉えたという反応の方へと突き進む。

欲を言えばAランク並みの近接戦闘職が居てくれれば話は楽なのだが、この際戦力になつてくれるなら贅沢は言つていられない。

そんな考えを抱きながらちよつとした広場のようなところへと出てきた三人は、反応の主を見て一瞬固まる。

それも無理からぬことだろう。目の前にいたのはどんな予想とも違った見た目年齢一桁台の幼子だったのだから。

三者共に何故？ と内心混乱していたが、ふと自分たちが何に追われているのか思い出し、このままではこの子が危ないと直ぐさま離脱する決断を下す。

「ギドー！」

「了解でやすー！」

キョトンと惚けたような顔をしている少女の両側にギドとカバルが回り込むと、双方からしつかりと抱え上げて一気にかけ出す。

「え、え？ なに、なにごと?!」

困惑したような声上がるも、今はかまっていられないとガン無視を決め込んだ二人は、若干スピードを落としながらも流星の連携でエレンの後ろにつけながら必死の形相で走る。

幸いにも抱え上げている子が暴れずに大人しくしているために、僅かな走りづらさはあるものの気になるほどではない。

それよりも――

「――ッ!」

ゴバツと土が盛り上がる音とともに、土の中からその巨体が顔を出す。

その衝撃で周辺の大地が揺れに揺れ、カバルとギドは運悪くそれに足をとられて蹠よろ蹠ろ

めく。

転倒には至らなかつたものの、走るスピードを落としてしまった彼らを追跡者が狙わないはずがない。

大きく振り上げられた前脚に反応したのは、長く前衛職をつとめて戦闘では司令塔としての役割も兼ねているカバル。

咄嗟に抱えていた腕を放すと、支えを失って無残にも地面に顔面から落ちむぎゅつと潰れた蛙のような声を上げた少女を無視し、背の大剣を抜き放つ。

「ぜ、ああああああー！」

裂帛とともに振り下ろした大剣は、今まさに三人を切り裂こうと迫ってきていた爪とせめぎあい、押し返す。

その代償としてカバルもそれなりに後退させられたのだが、むしろ距離をとれて幸いだったと考えるべきだろうか。

なにせ、目の前の巨大土竜は防がれたことが気にくわなかつたのかその目に怒りの色を湛えながら此方をにらんでいるのだから。

怒らせちまつたか、と内心冷や汗もののカバルだったが、そんなことはおくびにも出

さず他に二人へと指示を出す。

「ギド！ お前はその女の子連れてさっさと離脱しろ！ エレンは魔法で援護を……つて、おい?!」

指示を出している途中で、カバルが信じられないものを見たかのような顔で声を上げる。

いつの間にか隣まで来ていた少女が、何を思ったかすたすたと巨大土竜の前まで歩いていくのが見えたからだ。

当然、土竜は射程内に無防備に飛び込んできた獲物を逃がしたりするほど甘くはなかった。

無慈悲にも振り上げられた前脚をみて、カバルは咄嗟に前へと駆け出す。

先に動いたエレンがその前足へと魔法を放つも、抵抗レジストされているのかその勢いには一切の衰えが見られない。

当の少女とはいえば、迫り来る前足を只じつと見据えているだけ。

いつたい何がしたいのか。それは分からないが、目の前でこんなに小さい子が魔物に殺されるところなど見たくもない。



この装備なら、さつき同様死ぬことはないはずだ……あんなの二度とごめんだと思っただが、仕方がねえ！ そう考え、カバルは躊躇無くその攻撃の前に身をさらした。

大剣は面積が広い分攻撃にも防御にも使えるが、その反面咄嗟の出来事や精密を要することに關しては苦手としてしまう。

つまり、この局面においてカバルの身を守るのはリムル達から受け取った装備のみ。

流石に痛いだろうな、と攻撃が当たる瞬間に身をこわばらせ、目をつむってしまう。

緊張からか、やけに攻撃を食らうまでの時間を長く感じ、そしていくら何でも長すぎないかと首を捻る。

「えっと……あの、大丈夫？」

「……は？ つて、うおわ?!」

突然聞こえてきた声に、カバルは反射的に目を開ける。

その視界に飛び込んできたのは、ぎらりと鈍く光る鋭利な爪の切っ先。

驚いて思わず後退ったところで、土竜のからだの全体が見えるようになった。

その自慢の爪をカバル達に突き立てる寸前で動きを完全に止めてしまっている土竜

は、しかし変わらず目の前の自分たちを睨み付けている。

だが、その瞳に浮かぶ僅かな濁りにカバルは気がついた。

その視線はカバルなど捉えておらず、只一心にカバルの後方へと注視している。

まるでその存在の一挙手一投足までをも見逃すまいとするかのような視線。それに晒されているのは、当然直前までカバルの後ろにいた存在。

つまり——これではまるで——

「——警戒……いや、恐れ？　この子を……う？」

あたかも化け物でも見たかのような瞳で少女を見下ろしているのは、何故なのだろう？

あとがきに転生する？

✓ Yes

No